伯太町埋蔵文化財調査報告書第４集

# シアケ遺跡発掘調査報告書

主要地方県道安来伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

２００２年３月

伯太町教育委員会

伯太町埋蔵文化財調査報告書第４集

# シアケ遺跡発掘調査報告書

主要地方県道安来伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

２００２年３月

伯太町教育委員会

# 序　　文

伯太町は原始・古代より文化の栄えた地域で、出雲の東端にあたり、とりわけ隣国伯耆との密接な交流もうかがわれ、現在でも数多くの文化遺産が残っています.

ここに報告するシアケ遺跡は島根県広瀬土木事務所の委託を受けて伯太町教育委員会が平成12年～13年度に実施した主要地方道県道安来伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果であります。

町内には要衝の地として安田要害山をはじめたくさんの城跡があります。シアケ遺跡は、調査前から縄張りが鮮明に読み取られる山城跡で伯太川の上流域を監視する上で絶好の場所に立地しています。調査の結果、曲輪や建物跡、堀切、横堀状遺構などの遺構が確認され、当時使われていた土器などの遺物も発見され、山城の実態を知る上で貴重な手がかりを得ることができました。

この調査地はやむを得ず現状を失うことになりましたが、その記録や掘り出された出土品は貴重な文化財として私たちの郷土を知り、愛する一助となれば幸甚と存じます。

調査に際しては、土地所有者、日次地区の皆様に一方ならずご理解とご協力を頂くとともに、県教育委員会文化財課をはじめとする関係各機関、各位のご指導ご助言を賜わりました。心から感謝し厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

伯太町教育委員会
教育長　　山﨑　丈治

# 例　　言

1．本報告書は主要地方道県道安来伯太日南線改良工事に伴い、島根県広瀬土木事務所の委託を受けて伯太町教育委員会が実施した伯太町大字日次の地名「シアケ」の埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．本書の作成は次のように行なった。

報告書本文については松本が主として執筆し、氏名を目次に記載した。挿図のうち、遺構実測は松本、福田、川本。浄写は福田、川本が行った。遺物の実測は松本、福田、川本、田中、前田。浄写は福田、前田が行った。遺構写真・遺物写真は福田、石門が撮影した。全体の編集は松本、妹尾が行った。

3．本報告書に掲載の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1、及び5,000分の1の地形図「伯太」を使用した。

4．図面・写真類・出土遺物の保管は、伯太町教育委員会で行っている。

5．現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。

〈調査指導〉

足立　克己（島根県教育委員会文化財課）

池淵　俊夫（島根県教育委員会文化財課）

〈指導・助言〉

東森　市良・佐古　和枝・西尾　克己・中原　斉

# 凡　　例

1．本報告書は収載した遺物の記述は、本文中の観察表にかえ、遺物には観察表中の取上番号をネーミングしてある。

2．本報告書における実測図は、下記の縮尺で掲載した。

〈遺構図・遺物出土状況図〉

トレンチ・掘立柱建物跡・柵列・堀切1／80、土坑・溝状遺構1／80・1／40、段状遺構1／160・1／80、曲輪1／200・1／100・1／80・1／40、横堀状遺構1／130・1／60、遺物出土状況1／40・1／20

〈遺物実測図〉

弥生土器・土師質土器・須恵器・陶器1／3、土製品1／1、石製品1／4・1／1、鉄製品1／2・1／1

3．本報告書の土器実測図において、その断面は弥生土器・土師質土器・陶器は白抜き、須恵器は黒塗りとした。土器実測図中「―〇」は、ケズリによる砂粒の動きを示す。

4．本報告書の遺構挿図中セクションエレベーションの基準線標高は〔H＝〕の記号で表す。

5．本報告書における遺構略記号は次のように表わす。

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柵列　ＳＤ：溝状遺構　ＳＳ：段状遺構

ＳＫ：土坑　ＳＸ：古墳　Ｐ：ピット

6．本報告書における遺物記号は次のように表わす。

Ｐｏ：土器・土製品　Ｓ：石器　Ｆ：鉄器

7．本報告書におけるピットの計測値は（長径×短径―深さ）cmで示した。

# 目　　次

**序文**
**例言・凡例**
**目次・挿図目次・挿表目次・図版目次・付図目次**

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯 …… （妹尾）1
第２節　調査の経過 …… （妹尾）2
第３節　調査体制 …… （妹尾）2
第２章　位置と環境
第１節　地理的環境 …… （松本）4
第２節　歴史的環境 …… （松本）4
第３章　シアケ遺跡の調査
第１節　調査の概要 …… （松本）6
第２節　曲輪 …… （松本）15
第３節　段状遺構、柵列 …… （松本）24
第４節　掘立柱建物跡 …… （松本）35
第５節　溝状遺構 …… （妹尾）44
第６節　土坑 …… （妹尾）47
第７節　堀切 …… （松本）57
第８節　横堀状遺構 …… （松本）59
第９節　古墳 …… （松本）63
第10節　その他の遺構外遺物 …… （松本）66
第４章　まとめ
第１節　遺構 …… （松本）68
第２節　遺物 …… （松本）68

出土遺物観察表
　出土土器・陶磁器・土製品観察表
　出土石製品観察表
　出土金属製品観察表

写真図版

# 挿　図　目　次


挿図１　シアケ遺跡調査地位置図 …… 1
挿図２　伯太町遺跡分布図 …… 3
挿図３　シアケ遺跡調査前地形測量図並びにトレンチ位置図 …… 7
挿図４　第１・２・３トレンチ遺構図、第１トレンチ出土土器実測図 …… 8
挿図５　第４・５・８・12・13トレンチ遺構図 …… 9
挿図６　第６トレンチ遺構図 …… 10
挿図７　第７トレンチ遺構図(1) …… 11
挿図８　第７トレンチ遺構図(2) …… 12
挿図９　第９トレンチ遺構図 …… 13
挿図10　第10・11トレンチ遺構図、第10トレンチ出土土器実測図 …… 14
挿図11　第７トレンチ集石状況図 …… 15
挿図12　曲輪１北東側遺構図・出土遺物実測図 …… 16
挿図13　曲輪２全体遺構図 …… 17
挿図14　曲輪２出土遺物実測図(1) …… 18
挿図15　曲輪２出土遺物実測図(2) …… 19
挿図16　曲輪２出土遺物実測図(3) …… 20
挿図17　曲輪２出土遺物実測図(4) …… 21
挿図18　曲輪２出土遺物実測図(5) …… 22
挿図19　玉砂利出土状況図 …… 22
挿図20　第17土坑集石状況図 …… 23
挿図21　第１段状遺構遺構図 …… 24
挿図22　第８・９・11・12段状遺構遺構図・出土遺物実測図(1) …… 27
挿図23　第９段状遺構出土遺物実測図(2) …… 28
挿図24　第13段状遺構遺構図・出土遺物実測図、第６溝状遺構遺構図・出土遺物実測図 …… 29
挿図25　第14段状遺構遺構図、第７溝状遺構遺構図 …… 30
挿図26　第15段状遺構遺構図 …… 31
挿図27　第１柵列遺構図、第16段状遺構遺構図・出土遺物実測図(1) …… 32
挿図28　第16段状遺構出土遺物実測図(2) …… 31
挿図29　第17段状遺構遺構図 …… 32
挿図30　第２柵列遺構図 …… 34
挿図31　第１・２掘立柱建物跡遺構図 …… 35
挿図32　第３・４掘立柱建物跡遺構図 …… 36
挿図33　第５・６・７掘立柱建物跡遺構図 …… 37
挿図34　第８掘立柱建物跡遺構図・出土土器実測図 …… 39
挿図35　第９掘立柱建物跡遺構図・出土土器実測図 …… 39
挿図36　第10・11・12・13掘立柱建物跡遺構図 …… 41
挿図37　第14・15掘立柱建物跡遺構図 …… 42
挿図38　第１溝状遺構遺構図 …… 44
挿図39　第４溝状遺構遺構図 …… 45
挿図40　第５溝状遺構遺構図 …… 45
挿図41　第１土坑遺構図 …… 47
挿図42　第２土坑遺構図 …… 47
挿図43　第３土坑遺構図 …… 48
挿図44　第４土坑遺構図 …… 48
挿図45　第５土坑遺構図 …… 48
挿図46　第６土坑遺構図 …… 49
挿図47　第７土坑遺構図 …… 49
挿図48　第８土坑遺構図・出土遺物実測図 …… 49
挿図49　第10土坑遺構図 …… 50
挿図50　第９土坑遺構図 …… 50
挿図51　第11土坑遺構図 …… 51
挿図52　第12土坑遺構図 …… 51
挿図53　第13土坑遺構図 …… 51
挿図54　第14土坑遺構図・出土土器実測図 …… 52
挿図55　第15土坑遺構図 …… 52
挿図56　第16土坑遺構図 …… 53
挿図57　第17土坑遺構図 …… 53
挿図58　第18土坑遺構図 …… 53
挿図59　第19土坑遺構図・出土遺物実測図 …… 54
挿図60　第20土坑遺構図 …… 54
挿図61　第21土坑遺構図 …… 55
挿図62　第22土坑遺構図 …… 55
挿図63　第１堀切　東側遺構図・出土土器実測図、第23土坑遺構図 …… 57
挿図64　第２堀切　東側遺構図、第19段状遺構遺構図 …… 58

挿図65　第１横堀状遺構遺構図(1)・集石状況図 …… 60
挿図66　第１横堀状遺構遺構図(2)・出土遺物実測図 …… 61
挿図67　日次１号墳遺構図 …… 64
挿図68　日次１号墳第１埋葬施設遺構図・遺物出土状況図 …… 65
挿図69　日次１号墳第１埋葬施設出土遺物実測図 …… 65
挿図70　遺構外出土遺物実測図 …… 67

# 挿　表　目　次

挿表１　伯太町遺跡一覧表 …… 3
挿表２　トレンチ計測表 …… 6
挿表３　掘立柱建物跡計測表 …… 43
挿表４　溝状遺構計測表 …… 46
挿表５　土坑計測表 …… 56

# 図　版　目　次


－遺構写真－

図版１　シアケ遺跡調査前全景
図版２　シアケ遺跡調査地全景
図版３　調査前曲輪１、第１・２・３・６トレンチ、ＳＫ－01
図版４　第６・７・８・９トレンチ、土塁、第２横堀状遺構
図版５　第７・11・13トレンチ、第１堀切、ＳＫ－23
図版６　調査区南側、第２堀切、曲輪１、ＳＫ－23
図版７　曲輪１、ＳＸ－01、ＳＸ－01第１埋葬施設、ＳＳ－04・05・06、ＳＢ－01、緊急防災工事施工状況
図版８　曲輪２、ＳＳ－09・11・12
図版９　曲輪２、ＳＢ－14・15、ＳＤ－06
図版10　調査区東側、曲輪２、ＳＳ－17、ＳＤ－04・05、ＳＫ－01・04
図版11　ＳＫ－05・06・07・08・09・10・11・12
図版12　ＳＫ－11・12・13・14・15・18・20・21
図版13　ＳＫ－22、第１横堀状遺構
図版14　第１横堀状遺構

－遺物写真－

図版15　第１・10トレンチ、ＳＢ－08・09、ＳＳ－07・08・09・10、ＳＫ－14
図版16　第１堀切、ＳＳ－10・12・16・18、ＳＫ－08
図版17　曲輪２、ＳＳ－04・06・09・10・16・18
図版18　曲輪２、ＳＳ－10・13・14・16・18、ＳＫ－19、ＳＸ－01埋葬施設
図版19　遺構外


# 付　図　目　次


付図１　シアケ遺跡全体遺構図
付図２　シアケ遺跡調査区地形測量図

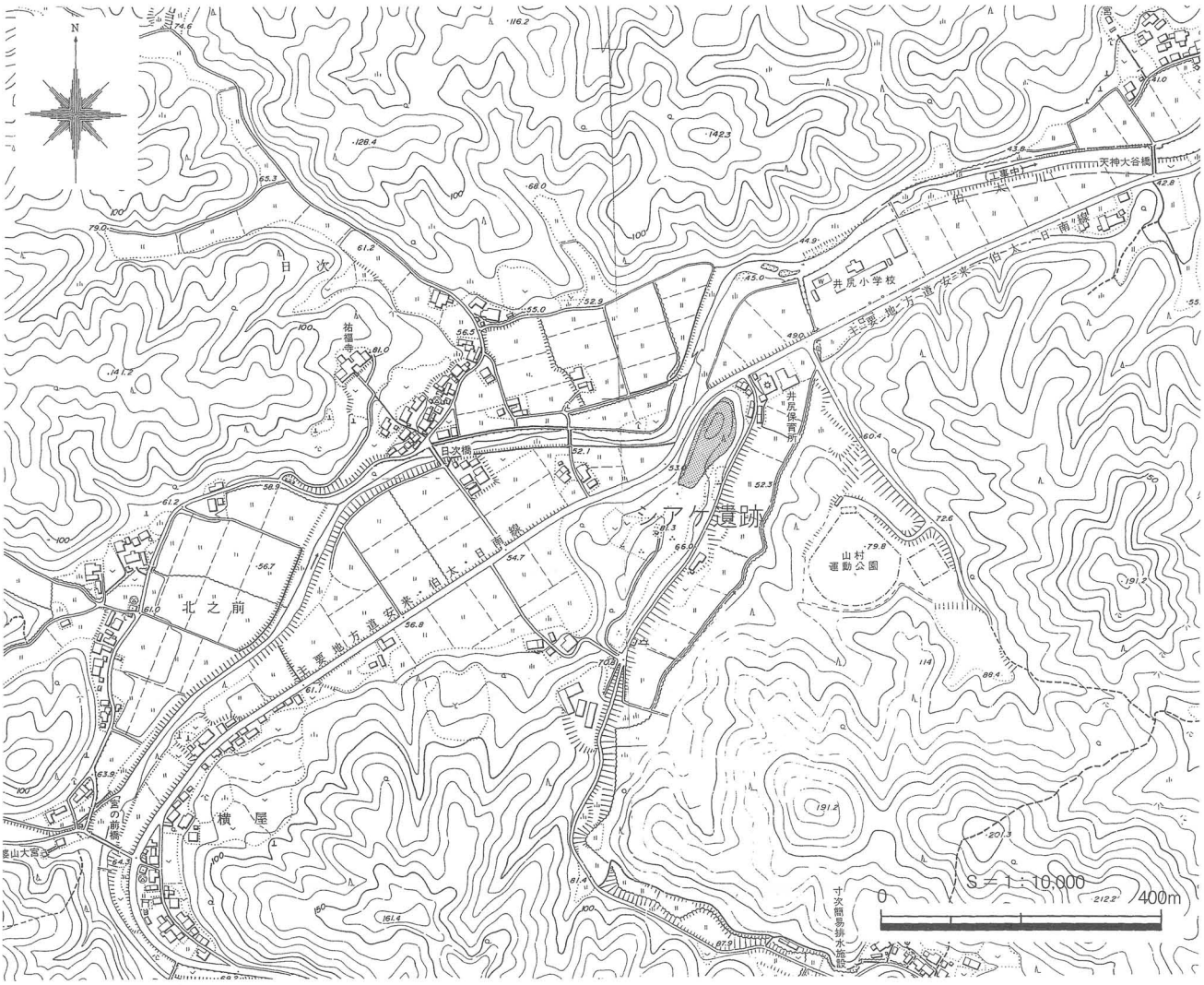
# 第１章　調査の経緯

## 第１節　調査に至る経緯

主要地方道県道安来伯太日南線改良工事に係るシアケ遺跡の取り扱いについては、数年前から関係諸機関で協議、調整が重ねられ、この事業によって損なわれる山城の丘陵部を対象として発掘調査が実施されることとなった。

これに先立ち、平成12年度に伯太町教育委員会が島根県広瀬土木事務所から委託を受け発掘調査を実施することになった。平成12年６月、現地調査に先立ち、事業主体の島根県広瀬土木事務所並びに島根県教育委員会文化財課と調査の実施について具体的な協議を行った。

その結果、平成12年８月１日から調査員が現地を踏査して事業計画のうち西側から北側にかけての急斜面を除く地域を伐開の範囲として広瀬土木事務所に立木伐採を依頼することになった。立木伐採後、現地調査を開始する運びとなった。




挿図１　　シアケ遺跡調査地位置図

## 第２節　調査の経過

平成12年８月22日に伐採された立木が搬出されたのを確認後、８月24日から調査員が調査区設定を行い、並行して国土座標杭の設定、調査前地形測量を測量業者に委託して実施した。なお、災害対策として県道沿いの西側から北側にかけての急斜面には防護柵の設置を行なった。

調査はまず調査区全体に地形に応じて12本のトレンチを設定し、９月４日から地表面清掃と遺構検出を人力で行なった。なお、地表面清掃においては相当量の雑草、小雑木が生じたため、これらの搬出、集積には困難を極めた。曲輪平坦面のトレンチ調査実施中の10月６日（金）午後１時30分頃震度６以上の大地震（鳥取西部地震）にみまわれた。丘陵頂部曲輪平坦面には10人以上の作業員、調査員、補助員が発掘作業中であった。全員が目前で地表に何条もの大きな地割れと丘陵全体が前後左右にゆれるという異常事態に遭遇したにもかかわらず災害対策に万全の注意を払っていたため、幸いにも全員が無事であった。10月11日、これを受け、広瀬土木事務所、県教育委員会文化財課、伯太町教育委員会は、今後の調査計画について協議を重ねた。その結果、当初は遺構が確認された全域についての調査を予定していたものの、地震により南西から北東にかけての西側半分は危険地帯と判断され、調査は丘陵の東側半分に計画変更された。なお、10月10日から10月12日までの３日間は好天にもかかわらず、地震災害防止の観点から現場作業を休止した。10月13日からトレンチ調査を再開し、10月19日、全てのトレンチ調査を終了した。地震により危険地帯とかした西側半分が緊急防災工事地域となった為、10月24日から11月10日の間でこの部分の一角を緊急調査することとなった。11月20日、調査変更計画に基づいて、本格的な発掘作業を開始した。翌13年１月から３月上旬は積雪の為、現場作業休止日が続いた。雪解け後、３月14日から曲輪等の遺構掘り込みが実施され、５月14日をもって遺構完掘が終了した。その後、遺構実測を続け、５月19日現場調査を全て終了した。

調査面積は当初約2,500㎡を予定していたが、変更後は1,392㎡となった。５月25日から本格的な整理作業を実施し、その後、６月18日、島根県教育委員会文化財課の指導により第２堀切の一角の追加調査をする運びとなり、６月27日をもって終了した。

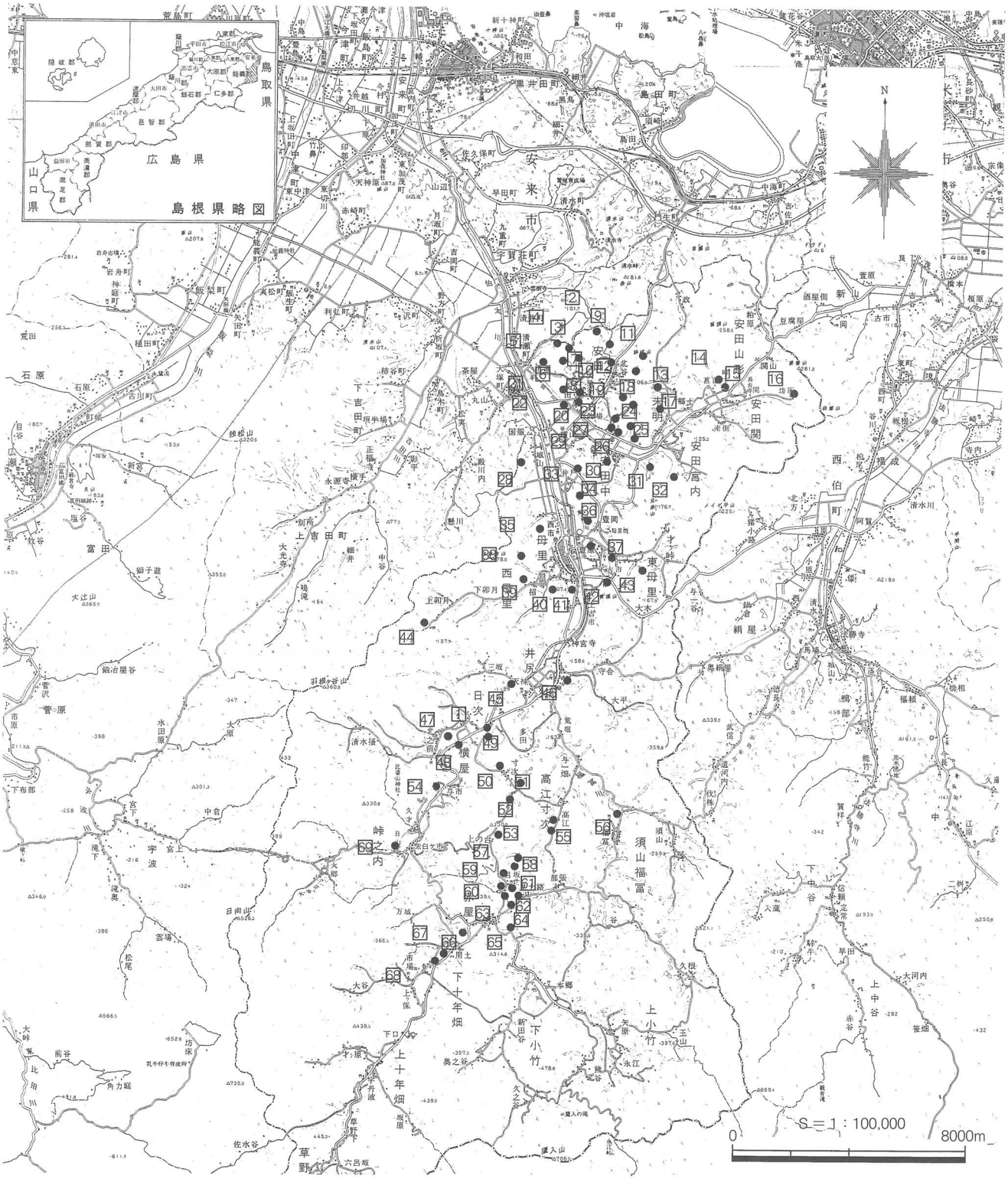
## 第３　調査体制

島根県教育委員会文化財課、島根県埋蔵文化財調査センターの指導のもと、下記の体制で実施した。

| | | |
|---|---|---|
| 調査主体 | 伯太町教育委員会 | |
| 調査担当 | 調査団長 | 山﨑　丈治（伯太町教育委員会教育長） |
| | 調査主任 | 妹尾　秀樹（伯太町教育委員会文化財保護係長） |
| | 調査員 | 松本　哲 |
| | 調査補助員 | 福田　寛子、川本　美佐子 |
| | 整理補助員 | 石門　安定、田中　セキ子、前田　慶子、<br>仲田　節子、細田　久美子、 |

下記の方々に発掘作業員として協力していただいた、記して謝意を表したい。

赤名幸次、秋間エツコ、安部章夫、安部悦子、安部恒子、岩佐忠信、遠藤廣子、塩見敏行、塩見正子、長谷繁、長谷玉江、細田さなえ、細田重美、細田壽美子、細田暖子、細田雅秋、山岡信子、山岡峯子、山岡美登




挿図２　　伯太町遺跡分布図

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | シアケ遺跡 | 13 | 赤はだ古墳群 | 25 | 東塚古墳 | 37 | 神宮寺古墳群 | 49 | 座王古墳群 | 61 | 小松伏古墳群 |
| 2 | 真の谷古墳 | 14 | 御戸古墳群 | 26 | 石堂横穴群 | 38 | 御殿山古墳 | 50 | 唐樋宅裏古墳群 | 62 | 天神堀古墳群 |
| 3 | 髭濡古墳群 | 15 | 丸山古墳群 | 27 | 石堂古墳群 | 39 | 招古墳群 | 51 | 上塚田古墳 | 63 | 小丸子山古墳群 |
| 4 | 金掘古墳群 | 16 | 坊床横穴群 | 28 | 城山古墳群 | 40 | 御笠古墳群 | 52 | 垣の内遺跡 | 64 | のろ山古墳 |
| 5 | 虫尾遺跡 | 17 | 小赤はだ古墳群 | 29 | 井戸古墳群 | 41 | 釜田谷古墳群 | 53 | 上の台遺跡 | 65 | 比田啓三郎氏裏横穴 |
| 6 | 文珠山古墳群 | 18 | 高広谷遺跡 | 30 | 大森神社遺跡 | 42 | 青垣神社横遺跡 | 54 | 横屋丸山古墳 | 66 | 赤屋城山古墳群 |
| 7 | 中山横穴 | 19 | 高広遺跡 | 31 | 長尾古墳群 | 43 | 守納古墳群 | 55 | 岩屋谷古墳群 | 67 | 中ぞね古墳 |
| 8 | 御崎山古墳 | 20 | 横手古墳 | 32 | 宮内古墳群 | 44 | 佐古横穴群 | 56 | 塚田古墳 | 68 | 下十年畑遺跡 |
| 9 | 穴ケ峠古墳 | 21 | 長田古墳 | 33 | 五反田古墳群 | 45 | さこ谷古墳 | 57 | 日向尾根古墳 | 69 | 矢原古墳 |
| 10 | 長田八幡宮横穴 | 22 | 田面崎遺跡 | 34 | 中山古墳群 | 46 | 正平塚古墳 | 58 | 日向峰古墳群 | | |
| 11 | 鉢伏城遺跡 | 23 | 替地遺跡 | 35 | 極楽寺山古墳群 | 47 | 岩屋が平古墳 | 59 | 森木峰古墳群 | | |
| 12 | カウカツ遺跡 | 24 | 丹部遺跡 | 36 | 亀遊山古墳群 | 48 | 上稲田古墳 | 60 | 穴畑峰古墳群 | | |

挿表１　伯太町遺跡一覧表

# 第２章　位置と環境

## 第１節　地理的環境

伯太町は、島根県の東端に位置し、北は安来市、西は広瀬町に接している。東と南は鳥取・島根の県境であり、東には米子市と西伯町、南には日南町がそれぞれ接している。

町域の南端より伯太川及び支流が流れ、集落も川沿いに営まれている。伯太川に沿うように中央軸として主要地方道安来伯太日南線が縦貫している。これを主軸にして、主要地方道溝口伯太線、一般県道米子伯太線、同米子広瀬線、などがそれぞれ米子自動車道、山陰自動車道などに連結している。伯太町から近隣主要地への距離は松江 32km、安来 11km である。

伯太町の面積は昭和 29 年の旧村別集計では 95.06km²であったが、国土地理による平成元年 10 月の修正結果では、現在 97.87km²となっている。

伯太町の地質は山間部の大半が花崗岩で、母里、井尻は安山岩類が分布する。南部には鷹入山（706 m）、葛野山（737.8 m）がそびえている。葛野山は『出雲風土記』に葛野山（かどのやま）として記されている。

シアケ遺跡は伯太川西側の横屋集落の西側から井尻集落に向かって延びる尾根の先端部に位置する遺跡である。

## 第２節　歴史的環境

伯太町は中心を伯太川が流れ、これに合流する支流も多くみられる。これらを挟むようにして成立した沖積地が多くみられ、遺跡も主としてこの低地及び河岸段丘に立地する。

縄文時代は豊かな海、山の幸を求めて人々が広く活動した時代であるが、この時代の遺物として伯太町からは赤屋地区の下十年畑（68）の水田下の黒色土中から、土師器と共に出土した土器の中に縄文土器片が１片含まれている。器形は深鉢と考えられ、表面には縄文がめぐらされている。赤屋地区は伯太町の最奥部であるが、縄文時代の人々が伯太町において生活した証である。

弥生時代に入ると、大陸から伝来した水稲耕作と金属器の普及により、縄文時代とは異なった社会構造が成立し、階級社会を成立していくことはすでによく知られていることである。伯太町内の弥生時代の遺跡は丘陵、山裾に多くみられるが、弥生時代前期まで遡る遺跡は今のところは確認されていない。弥生時代中期の遺跡としては、昭和 34 年に壷形土器、黒耀石が出土した安田中地区の丹部遺跡（24）田面崎遺跡 (22) が挙げられる。後期になると、稲作可能地を追って奥地部へと弥生時代の人々は生活の場を拡大するようになっていくことが、後述する後期遺跡の分布からうかがい知ることができる。弥生時代後期の時期の遺跡として田面崎遺跡（22）、安田小学校校庭裏遺跡、平成４年にゴルフ場建設予定地に伴う試掘調査によって、四隅突出型墳丘墓の確認されたカウカツ遺跡（12）、同調査によって住居跡が確認された丹部遺跡（24）などを挙げることができる。

古墳時代に入ると多くの古墳が伯太町内に造られるようになる。古墳の所在については、大規模な古墳が独立していることはなく、その大半は数基単位となって平地を望む尾根上に点在している。6 世紀～７世紀の築造の後期古墳が大半とみられている。時期の明らかな古墳は、『伯太町史』によると長尾古墳群（31）から出土した須恵器が、出雲における須恵器編年の第２～第３前半形式に相当することから、最も古い時期のものとされている。その他に、文殊山古墳群(6)、釜田谷古墳群 (41)、極楽寺山古墳群 (35)、矢原古墳（69）、上の台古墳（53）、日向峰古墳群（58）、森木峰古墳群（59）、天神堀古墳群（62）、小松伏古墳群（61）、のろ山古墳（64）、穴畑峰古墳群（60）、小丸小山古墳群（63）、などがあげられる。横穴群は母里地区に多く確認されており、井尻、赤屋、安田においても確認されている。安田の中山横穴

(7) は昭和14年に発見され、胴地金銅張りの圭刀太刀、馬具等が出土している。その他に、長田八幡宮横穴（10)、坊床横穴群（16)、石堂横穴群（26)、佐古横穴群（44)、比田啓三郎氏裏横穴群（65）などがあげられる。

天平５年（733年）に記された『出雲風土記』によると、現在の伯太町は意宇郡に入り屋代郷、母里郷に該当すると考えられる。これら郷の位置についても記述がみられる。『風土記』には記されていないが、安田関には坊床寺跡、岡の原廃寺跡、古御堂の寺跡があり、塔の心礎、布目瓦が出土していることから氏寺の建立が早い時期から行われたと考えられる。この時代における古代山陰道の手間刻は伯太町安田関にあった関所で、今でも関・関山などという地名を残している。平安時代になると安来荘、母里荘は京都の賀茂神社の荘園に、更に安田荘は石清水八幡宮の荘園となる。

一般的に中世といわれているのは、鎌倉幕府の成立（1192年）から室町幕府の滅亡（1537年）までの380年間であり、政権の所在地によって、鎌倉、南北朝、室町と３時代に分けることができる。伯太町にあるシアケ遺跡（１）は鎌倉時代の山城跡である。この時代は貴族に代わって武家が支配するようになった時代である。「承久の乱」の後は戦功のあった武士に地頭職を与えた。出雲では７箇所の地頭補任地があるが、その中に安田荘がある。任命された地頭の中に江戸四郎太郎重持の名前がみえるが、地頭は従来の慣行を破ることが多く、幕府の裁定により「安田荘」の南側は領家清水谷分と北側は地頭分とに分かれることになった。この結果により荘園領主側の収益は大きく後退し、地頭側は大きく前進する結果となった。しかし、こうした支配もその後も長期安定したものではなかった。「元弘の変」（1331年）において、後醍醐天皇は捕らわれの身となり、隠岐の国に配流となった。翌年の３年２月には隠岐島を脱出し、名和湊に上陸した。そして、名和庄に勢力をもつ名和長年の加勢によって船上山に兵を上げた。この挙兵を知った出雲国守護の塩谷高貞、その一族、富士名義綱などの近国の武士は船上山にはせ参じた。後醍醐天皇にまつわる伝承として、伯太町内の「安田の関」を通過され、現在の未明集落のあたりにこられた時に、ほのぼのとした夜明けを迎えられ、後醍醐天皇は「ほのかに明けたり」と言われたことから未明（ほのか）の地名がついたと言われている。伝承されている後醍醐天皇の鎌倉幕府討伐の戦いが進められていたとき、安田荘に動揺が起きている。今までの地頭の江戸氏が領地を取り上げられ、代わって別の地頭が補された。後醍醐天皇はいったん勝利を収めて中央政権を打ち立てたが、この間に「安田荘」は光守僧都という人物に横領されてしまった。南北朝の動乱に乗じて「安田荘」の横領をもくろんだのである。中央では足利尊氏の挙兵から建武の中興は崩れ去ったが、この間に、先に江戸氏の子孫である江戸孫次郎重清が本主として建武３年(1336年)に帰ってきている。南北朝の争いは、この出雲の国も巻き込んで、安来・能義の地も戦に巻き込まれたが、南朝勢力と北朝勢力が相対しながら、中央における南朝勢力の衰退と共に出雲の南朝勢力も消滅していったと考えられる。江戸氏の弟とみられる人物は建武５年（1338年）南方神領も横領してしまったために足利氏からお互いに違乱のないようにと採決されている。応永13年（1406年）室町幕府の斯波義重は、南「安田荘」について福王寺の関与を退けて、雑掌に返させるように守護である佐々木氏に命じている。このように鎌倉時代から室町時代にかけても社会は在地領主、荘園、地頭などの関係から不安定な要素を含んでいた。

応仁の乱（1463年）以降になると各地で乱が勃発し、城郭、砦が方々に多く築かれるようになり、戦国時代へと続き、各地の土豪は尼子と毛利の戦いへと巻き込まれ、白鹿城の落城で宍道湖岸が毛利方になった。輸送手段も弓ヶ浜から富田城の陸路に代わったために、伯太地域の安田要害山城、亀遊山での戦いが激しくなっていく。

近世になると母里藩となる。この時代には伯太地域の山間部においてたたら製鉄が行われたが、シアケ遺跡（１）の伯太川をはさむ西側には金屋子神社がある。

註・参考文献　　伯太町誌　上巻

# 第３章　シアケ遺跡の調査

## 第１節　調査の概要

### １．構　造

シアケ遺跡は地表面観察においても曲輪と考えられる削平地、土塁、堀など人工の凹凸が明瞭に確認できる山城跡である。城域は南北に蛇行する伯太川を直ぐ眼下に望み、南西－北東方向に先細り気味に形を変えながら延びる尾根上先端部に展開する。

全体の構造は尾根上最高所に主郭と考えられる曲輪（標高約 80 m）とやや高い台状部（標高 80.6 m）を設け、その北側から南側にかけて幅狭な削平地（付属的な機能をもつ帯曲輪）を一段下って主郭に沿う形で「？字形」に隣接させている。その為、広義的には複郭とみなすことができる。主郭の南側に続くやせ尾根上には主郭との最大比高差約８ｍを測る第１堀切、さらに南方に最大比高差約５ｍを測る第２堀切と２条の堀切が尾根の鞍部を切断する形で東西方向に設けられている。

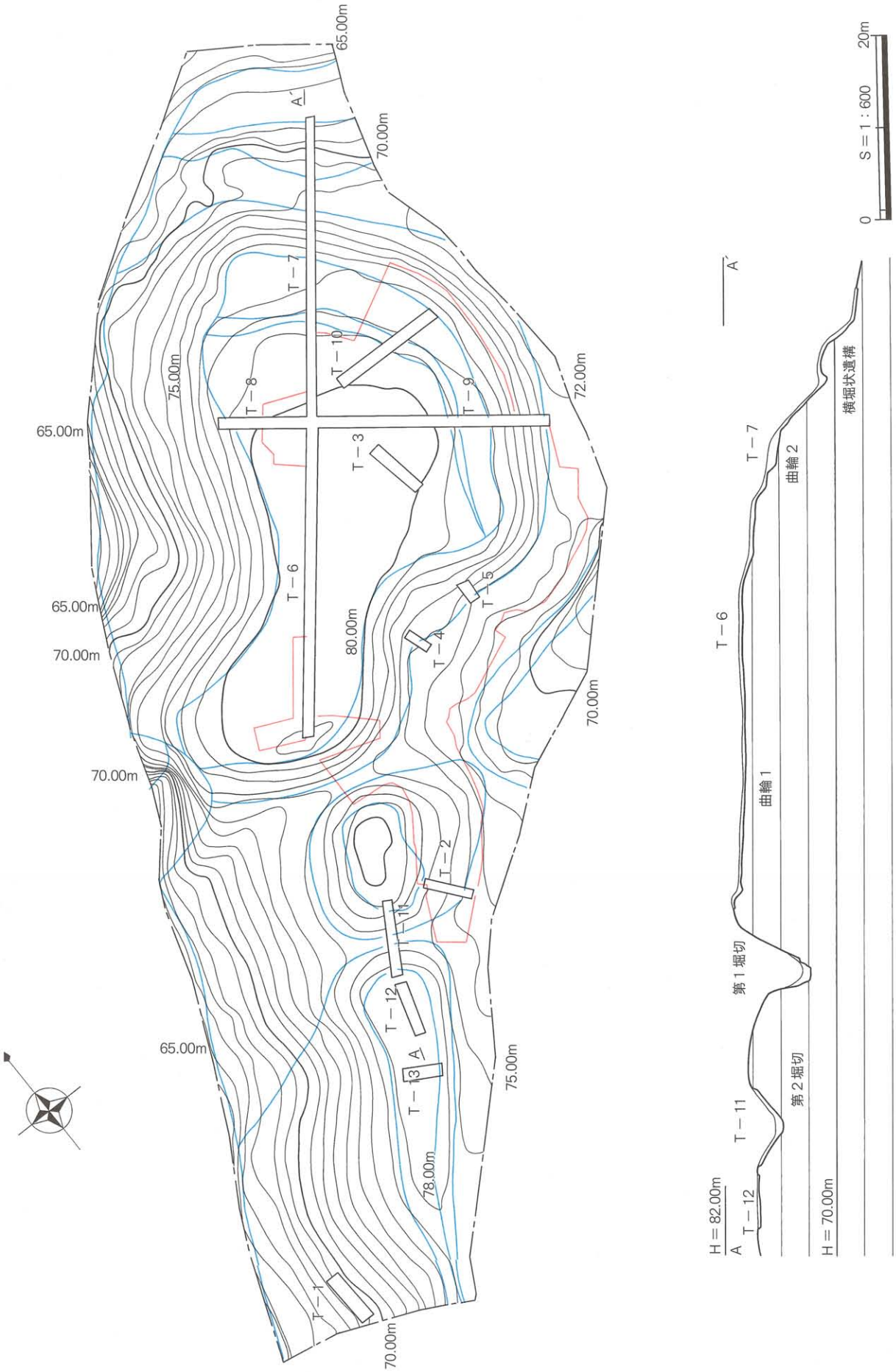
第１堀切の東端からは主郭との最大比高差約７ｍを測る横堀状遺構を帯曲輪に沿う形で巡らしているが、南東側で一旦終焉し、やや東寄りから再び派生し、規模を大きくしながら北側で終焉している。

### ２．遺構面

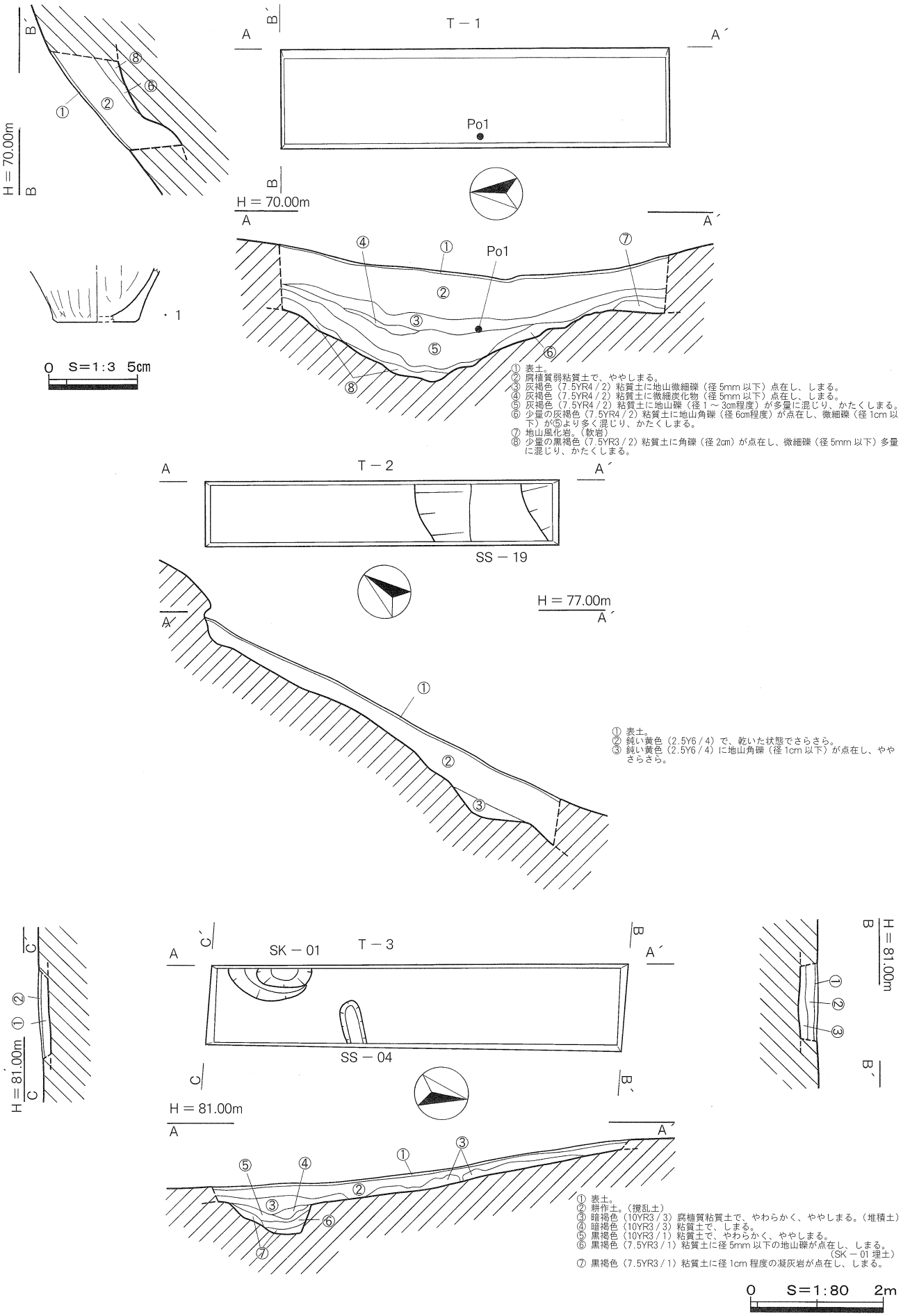
トレンチ（第１～13 トレンチの計 13 本）及び面検出調査の結果、遺構面としては、重複した状態で表土下の整地された造成面とその下の地山面の２面が確認された。前者では主に帯曲輪状造成面において掘立柱建物跡、柵列、段状遺構、溝状遺構、土坑、柱穴などの遺構が重複した状態で検出された。後者では帯曲輪部において段状遺構、溝状遺構、土坑、柱穴などの遺構が検出された。なお、主郭部は地山掘削であり、ここからは柱穴、溝状遺構、土坑が検出されている。また、やせ尾根鞍部や斜面部で検出された堀切や横堀状遺構は地山掘削により造成されている。その他に主郭部北側の台状部からは古墳の痕跡が確認された。

| トレンチ番号 | 規模（m） | 検出遺構 | 出土遺物 | トレンチ番号 | 規模（m） | 検出遺構 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ｔ－１ | 5.90 × 1.50 | － | 弥生土器 | Ｔ－８ | 9.40 × 1.20 | SX－01 前方部・ピット・段状遺構 | － |
| Ｔ－２ | 5.40 × 1.00 | 段状遺構 | － | | | | |
| Ｔ－３ | 6.30 × 1.30 | 土坑・溝 | － | Ｔ－９ | 25.00 × 1.20 | 段状遺構 | － |
| Ｔ－４ | 2.70 × 1.00 | 段状遺構 | － | Ｔ－10 | 12.64 × 1.30 | 段状遺構 | 須恵器 |
| Ｔ－５ | 2.60 × 1.00 | － | － | Ｔ－11 | 8.30 × 1.10 | 堀切 | － |
| Ｔ－６ | 32.86 × 1.20 | ピット・土塁 | － | Ｔ－12 | 5.90 × 1.30 | － | － |
| Ｔ－７ | 32.34 × 1.20 | 集石・ピット・横堀状遺構 | － | Ｔ－13 | 4.40 × 1.40 | 溝・土塁状遺構 | － |
| | | | | | | | |

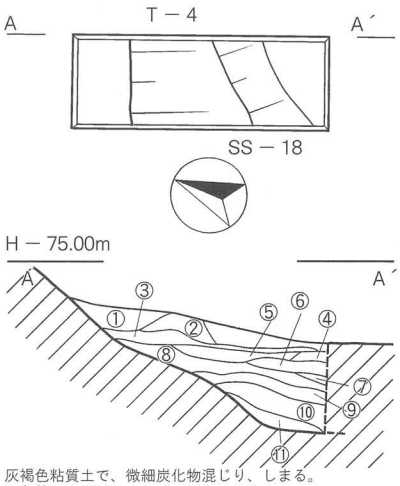
挿表２　トレンチ計測表



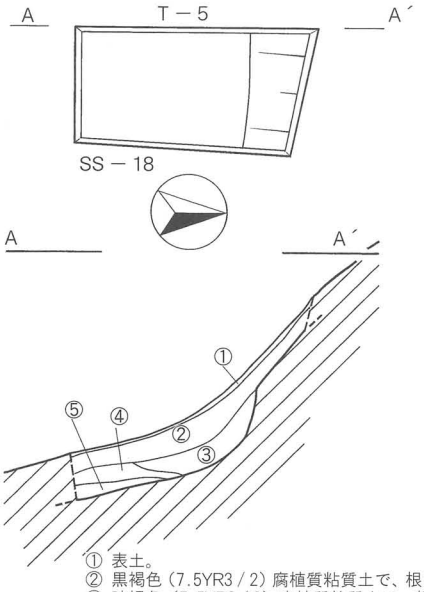

挿図３　　シアケ遺跡調査前地形測量図並びにトレンチ位置図



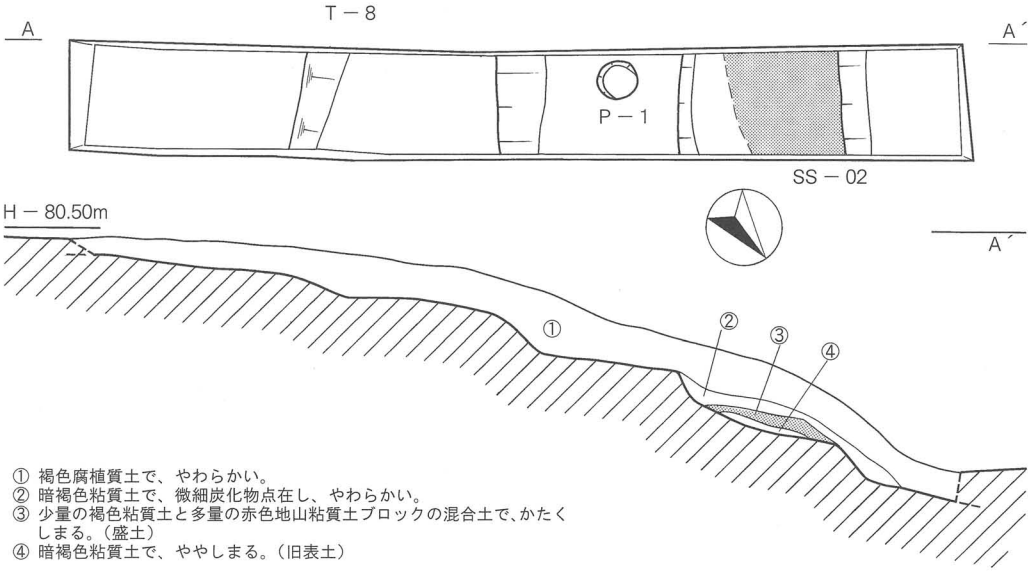

挿図４　　第１・２・３トレンチ遺構図、第１トレンチ出土土器実測図



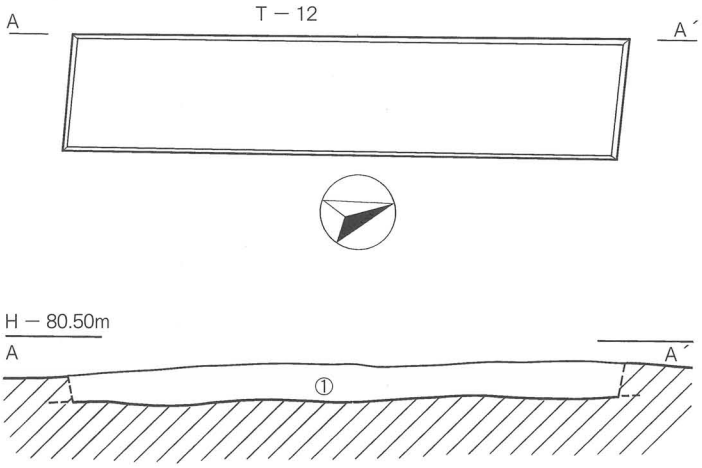

① 灰褐色粘質土で、微細炭化物混じり、しまる。
② 灰色粘質土のブロックで、かたくしまる。
③ 灰色粘質土のブロックに黄白色地山微細礫混じり、かたくしまる。
④ 少量の茶褐色粘質土と多量の青色、黄白色、淡茶色地山礫（径1cm未満）の混合土で、かたくしまる。
⑤ 灰色粘質土で、かたくしまる。
⑥ 灰褐色粘質土に青色微細地山礫多量に混じり、しまる。
⑦ 灰褐色粘質土に青色微細地山礫少量に混じり、しまる。
⑧ 褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物混じり、しまる。
⑨ 茶灰褐色粘質土に地山微細礫点在し、しまる。
⑩ 灰褐色粘質土に微細炭化物点在し、しまる。
⑪ 黄灰褐色粘質土に青色地山微細礫多量に混じり、かたくしまる。



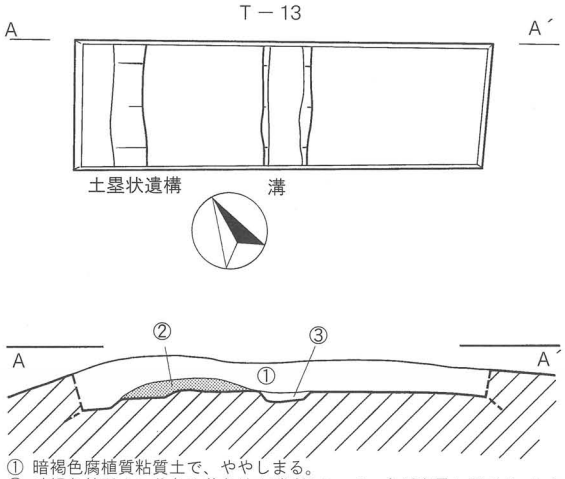

① 表土。
② 黒褐色（7.5YR3／2）腐植質粘質土で、根多く入り、ややしまる。
③ 暗褐色（7.5YR3／3）腐植質粘質土で、根少なく、しまる。
④ 褐色（7.5YR4／3）腐植質粘質土で、地山小礫混じり、しまる。
⑤ 褐色（7.5YR4／4）粘質土で、しまる。（平坦面遺構面）




① 褐色腐植質土で、やわらかい。
② 暗褐色粘質土で、微細炭化物点在し、やわらかい。
③ 少量の褐色粘質土と多量の赤色地山粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（盛土）
④ 暗褐色粘質土で、ややしまる。（旧表土）



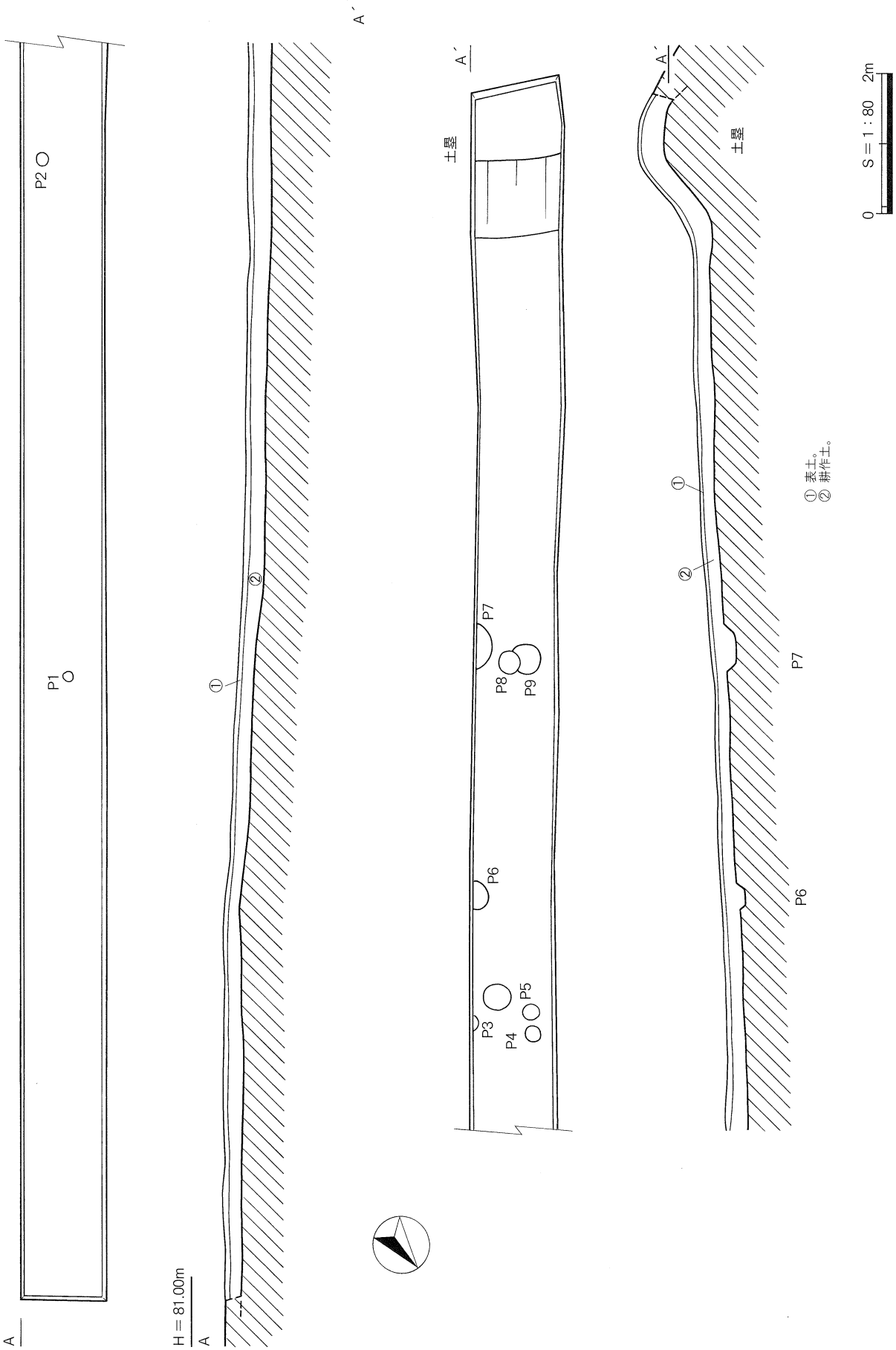

① きなこ色で、もろい。（サラサラ）




① 暗褐色腐植質粘質土で、ややしまる。
② 暗褐色粘質土に紫色や黄色地山礫（径1～2cm）が多量に混じり、しまる。（盛土）
③ 褐色粘質土で、ややしまる。（溝状遺構埋土）

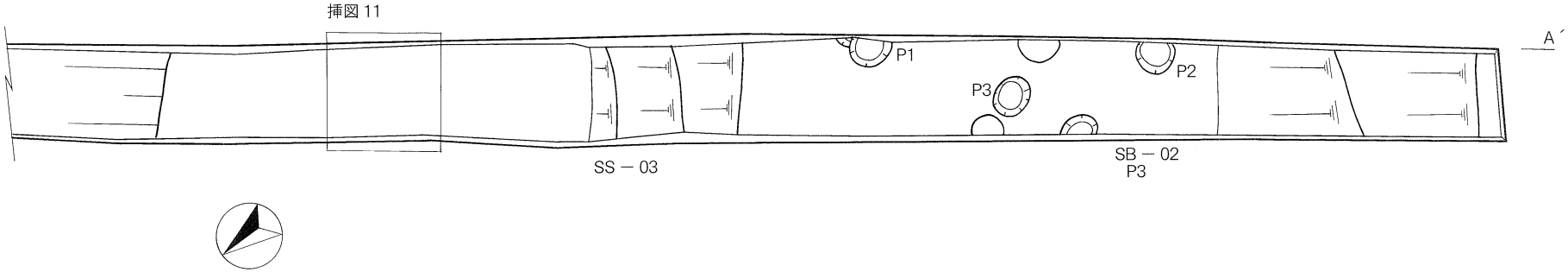
0　S＝1:80　2m

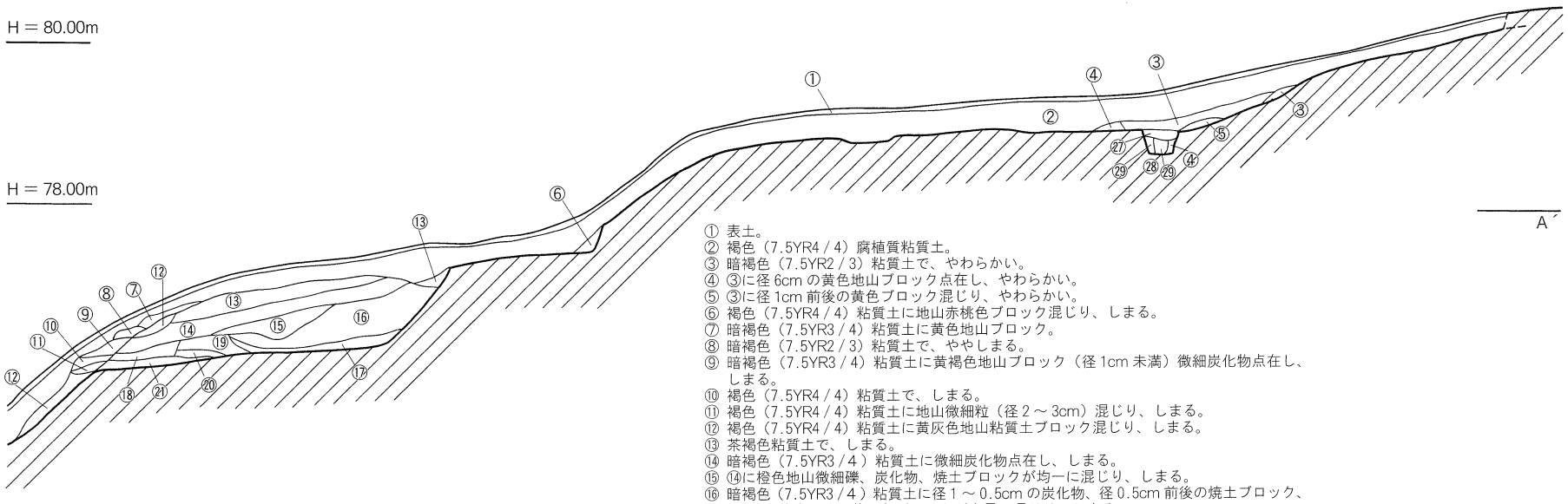
挿図5　第4・5・8・12・13トレンチ遺構図




挿図６　　第６トレンチ遺構図

挿図7



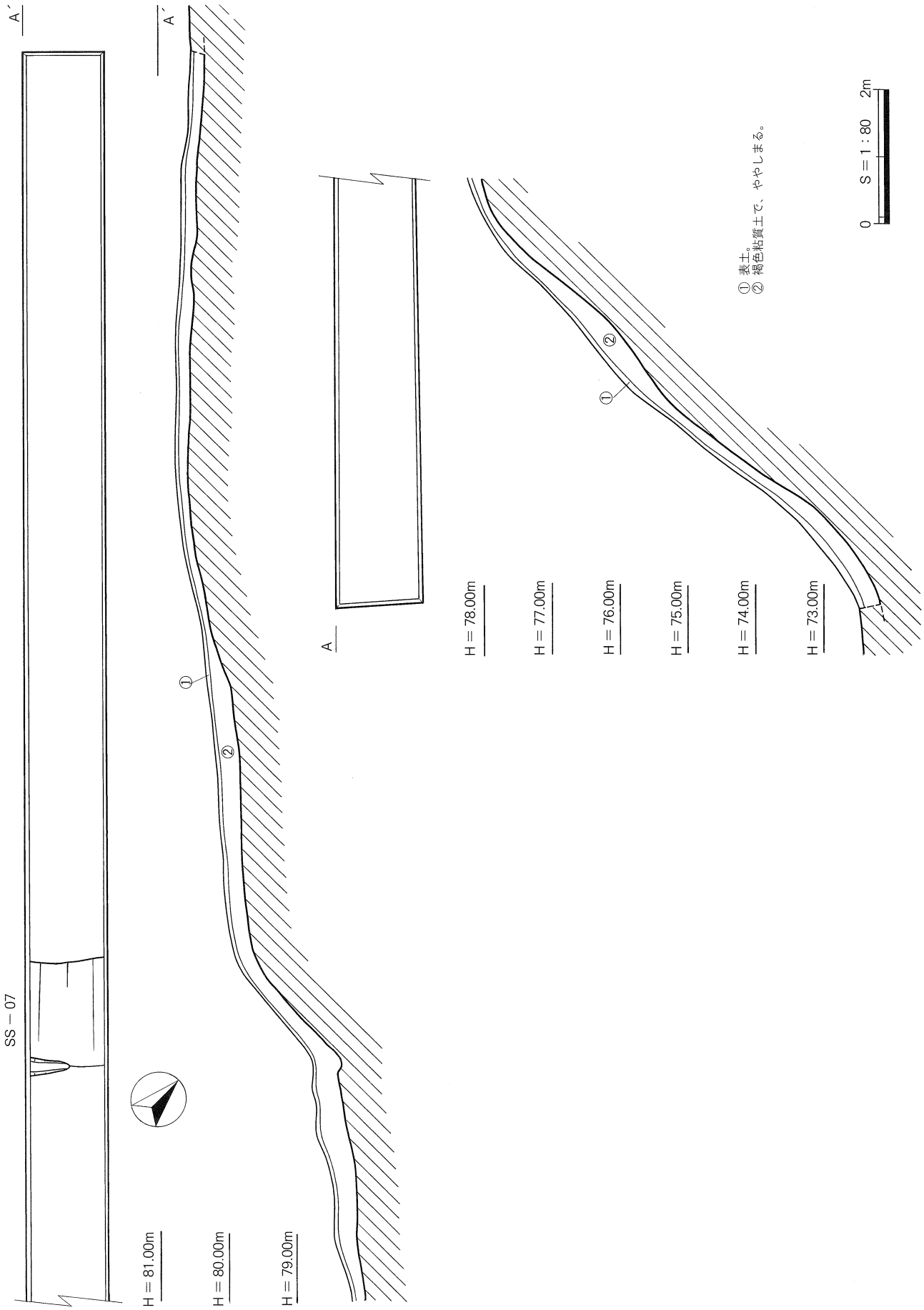




① 表土。
② 褐色（7.5YR4 / 4）腐植質粘質土。
③ 暗褐色（7.5YR2 / 3）粘質土で、やわらかい。
④ ③に径 6cm の黄色地山ブロック点在し、やわらかい。
⑤ ③に径 1cm 前後の黄色ブロック混じり、やわらかい。
⑥ 褐色（7.5YR4 / 4）粘質土に地山赤桃色ブロック混じり、しまる。
⑦ 暗褐色（7.5YR3 / 4）粘質土に黄色地山ブロック。
⑧ 暗褐色（7.5YR2 / 3）粘質土で、ややしまる。
⑨ 暗褐色（7.5YR3 / 4）粘質土に黄褐色地山ブロック（径 1cm 未満）微細炭化物点在し、しまる。
⑩ 褐色（7.5YR4 / 4）粘質土で、しまる。
⑪ 褐色（7.5YR4 / 4）粘質土に地山微細粒（径 2 ～ 3cm）混じり、しまる。
⑫ 褐色（7.5YR4 / 4）粘質土に黄灰色地山粘質土ブロック混じり、しまる。
⑬ 茶褐色粘質土で、しまる。
⑭ 暗褐色（7.5YR3 / 4）粘質土に微細炭化物点在し、しまる。
⑮ ⑭に橙色地山微細礫、炭化物、焼土ブロックが均一に混じり、しまる。
⑯ 暗褐色（7.5YR3 / 4）粘質土に径 1 ～ 0.5cm の炭化物、径 0.5cm 前後の焼土ブロック、径 1cm 前後の地山黄灰色ブロックが多量に混じり、しまる。
⑰ 暗褐色（7.5YR3 / 4）粘質土に微細炭化物、地山黄色微細ブロック点在し、ややしまる。
⑱ 暗褐色（7.5YR3 / 4）粘質土に微細黄灰色地山粘質土ブロック、微細炭化物点在し、やわらかい。
⑲ 茶褐色粘質土と黄灰褐色粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（盛土）
⑳ 褐色（7.5YR4 / 4）粘質土に黄灰色粘質土ブロック混じり、しまる。（盛土）
㉑ 褐色（7.5YR4 / 3）粘質土で、しまる。（旧表土）
㉒ 褐色（7.5YR4 / 3）腐植質粘質土で、ややしまる。（旧表土）
㉓ 褐色（7.5YR4 / 3）粘質土に径 3 ～ 7cm の地山礫点在し、ややしまる。
㉔ 23 に地山微細礫点在し、ややしまる。
㉕ 褐色（7.5YR4 / 4）粘質土に地山微細礫多量に混じり、かたくしまる。
㉖ 褐色（7.5YR4 / 4）粘質土に地山細礫（径 1 ～ 2cm）点在し、かたくしまる。
㉗ 褐色粘質土で、かたくしまる。
㉘ 黄褐色粘質土で、ややしまる。（柱痕跡）
㉙ 褐色粘質土で、しまる。（詰土）
㉚ 地山礫と粘質土の混合土で、しまる。（盛土）

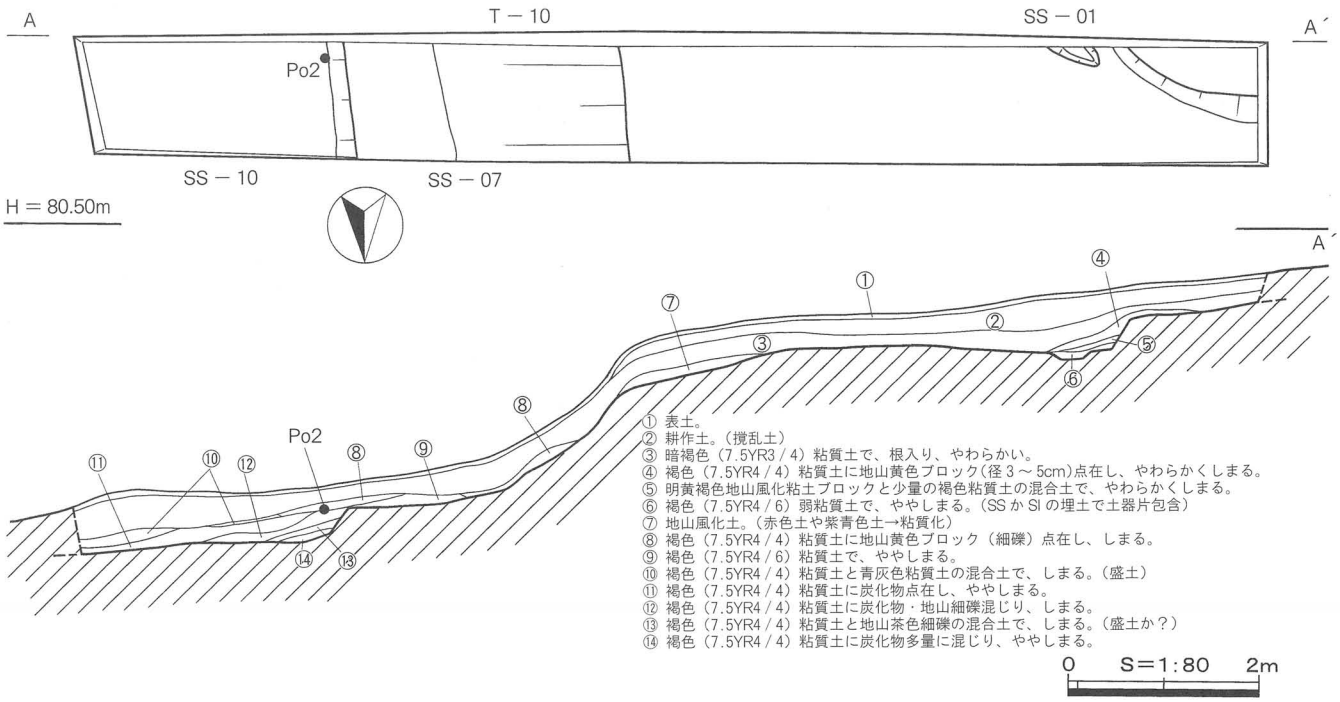
0　S＝1：80　2m

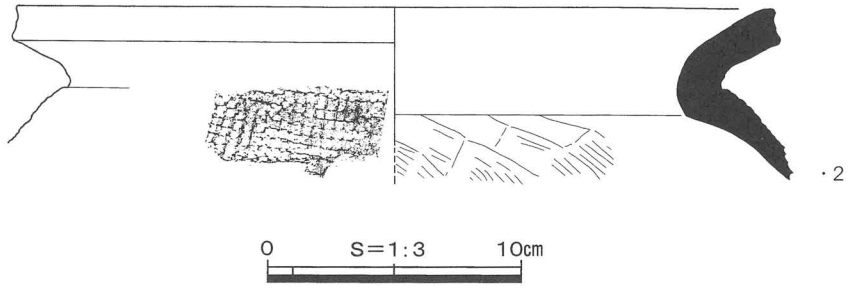
第7トレンチ遺構図（1）

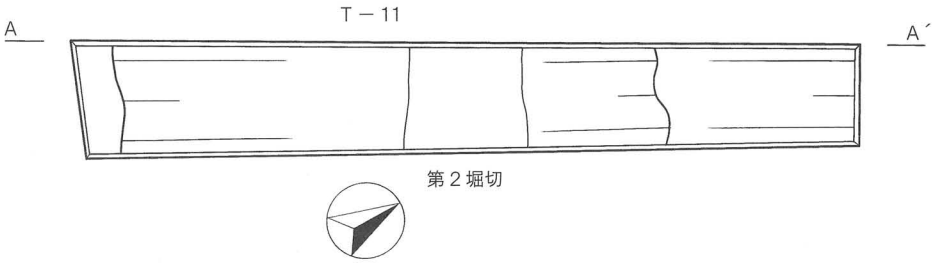
挿図８　　第７トレンチ遺構図（2）

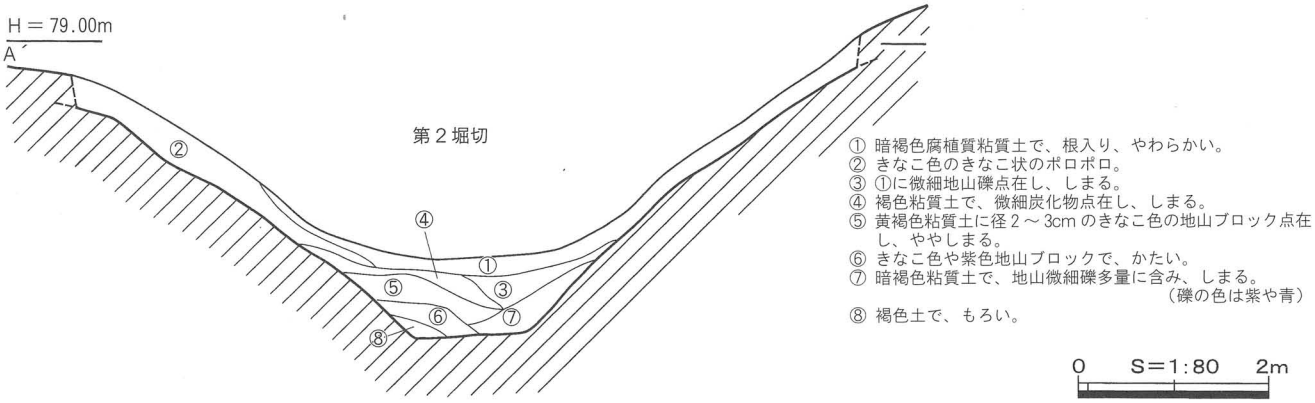



挿図９　　第９トレンチ遺構図




挿図10　第10・11トレンチ遺構図、第10トレンチ出土土器実測図

## 第２節　曲輪

曲輪は２ヶ所で確認された。（ここでは便宜上、曲輪１、曲輪２と呼称する。）

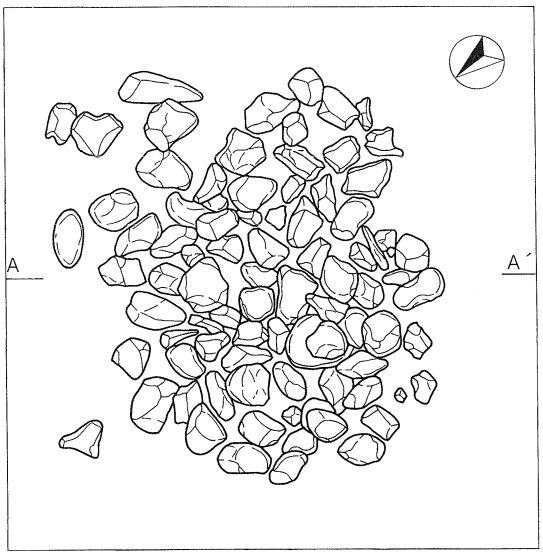
### 曲輪１（挿図 12）

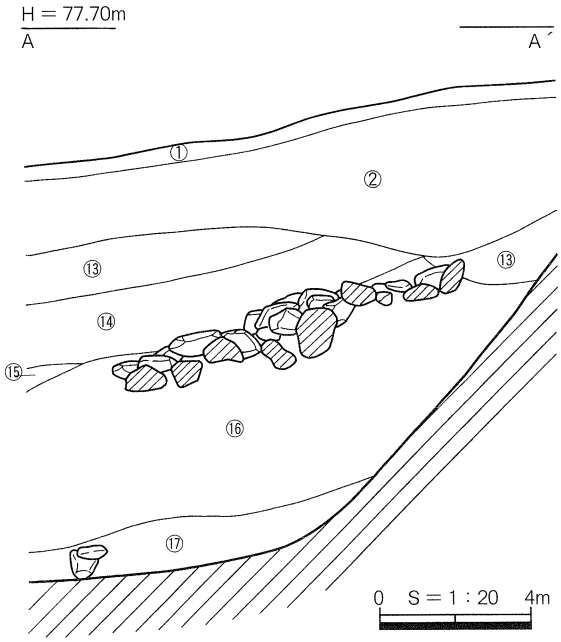
曲輪１は立地、規模等から主郭と考えられ、尾根上先端部の最高所に位置し、南北方向長さ約 40 m、東西方向幅約７～ 20 mを測るやや歪な平面ひょうたん形を呈する。南北側は平坦に地山を削平し、北側にはやや高い台状部を設けている。なお、この台状部は緊急調査区域のため時間の制約等からピット等は検出できなかった。標高は前者が約 80 m、後者が約 80.6 mを測る。面積は約 520㎡と推定され、そのうち調査を行ったのは緊急調査を含めて東側半分以上の約 380㎡である。

曲輪１の周囲をみると南端部には楕円形を呈する土塁（東西方向長さ推定 9.0 m、南北方向最大幅推定 1.8 m、高さ約 0.7 m）を地山掘削にて造成し、外方には深さ８mを測る第１堀切を付設している。南西側から北側一帯はかなりの急斜面となっており、容易には攻め込み難い要害となっている。なお、曲輪１からは南側平坦面で 12 個のピット、溝状遺構１本、土坑５基、台状部の外方北側から東側にかけて段状遺構を伴う掘立柱建物跡７棟などが検出されたが、これらのうち、同時期と推定されるものは曲輪１のピット群、掘立柱建物跡７棟などと推定される。

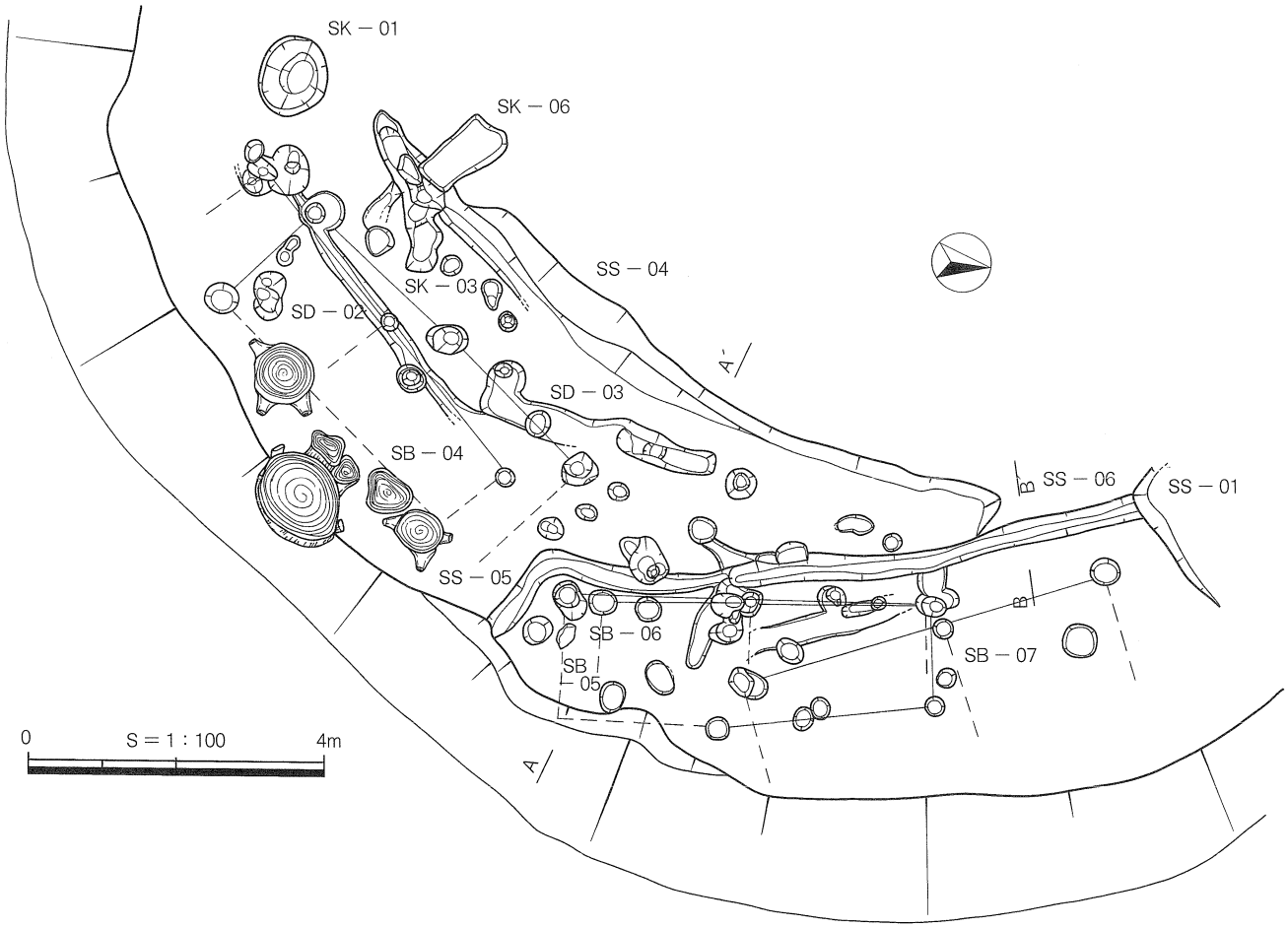
### 曲輪２（挿図 13）

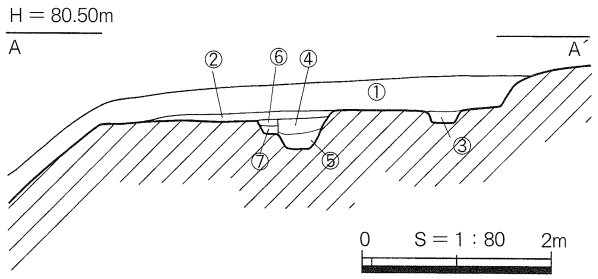
北側から南東に一段下って曲輪１に沿う形で帯状の曲輪２を巡らしている。その外方も西側ほどではないものの、急斜面となっており、容易には進入し難い要害を呈している。この曲輪２は幅３～ 1.5 m の平坦面で、さらに外方に一段下った状態で北側から南東側にかけてやや幅狭な（幅４～ 1.5 m）平坦面を造成している。したがって曲輪１からみると二段に階段状に段が付く形態をとるが、ここではこれらを含めて曲輪２と呼称する。曲輪２からは平坦面で同時期と推定される掘立柱建物跡６棟、段状遺構５基、溝状遺構２本、土坑 10 基、側壁際で柵列１本などが確認された。

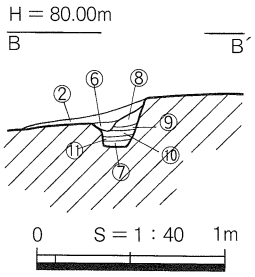


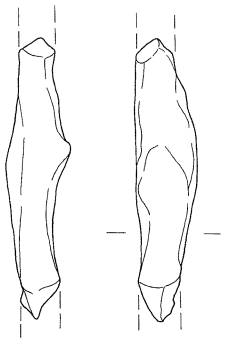

挿図 11　　第７トレンチ集石状況図



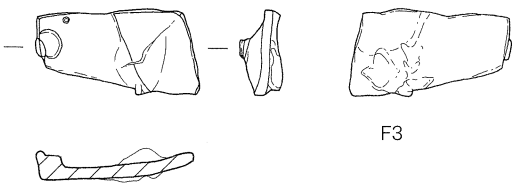



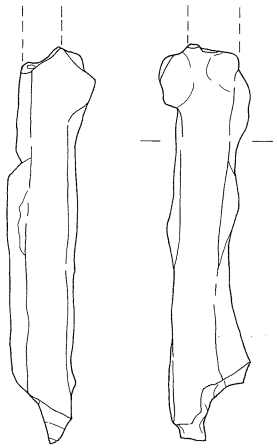

① 褐色粘質土で、ややしまる。
② 褐色粘質土に微細炭化物、微細地山礫混じり、しまる。
③ 褐色粘質土に微細炭化物点在し、しまる。（SD－03 埋土）
④ 褐色粘質土に地山微細礫点在し、しまる。
⑤ 褐色粘質土に微細炭化物点在し、しまる。
⑥ 茶褐色粘質土に微細炭化物混じり、しまる。
⑦ 褐色粘質土に少量の微細炭化物点在し、ややしまる。
⑧ 少量の茶褐色粘質土と多量の桃黄色地山粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（盛土）
⑨ 茶褐色粘質土と少量の赤土粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（盛土）
⑩ 褐色粘質土に少量の地山微細礫混じり、しまる。（盛土）
⑪ ⑥とほぼ同じ混合土。（盛土）



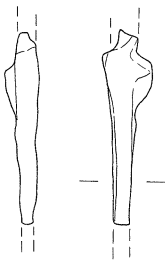
F1



F3



F4

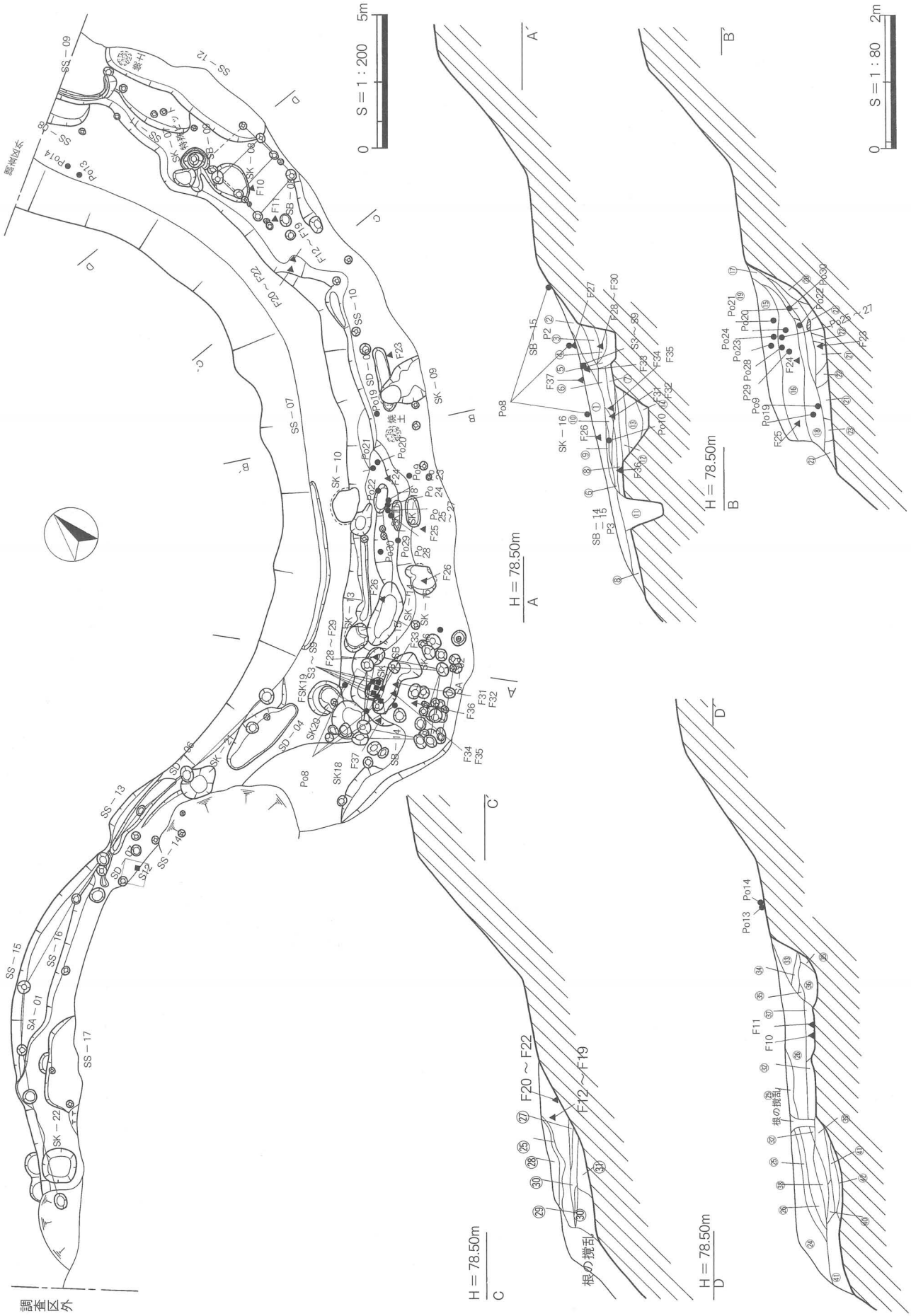


F1

0　S＝1：2　5cm

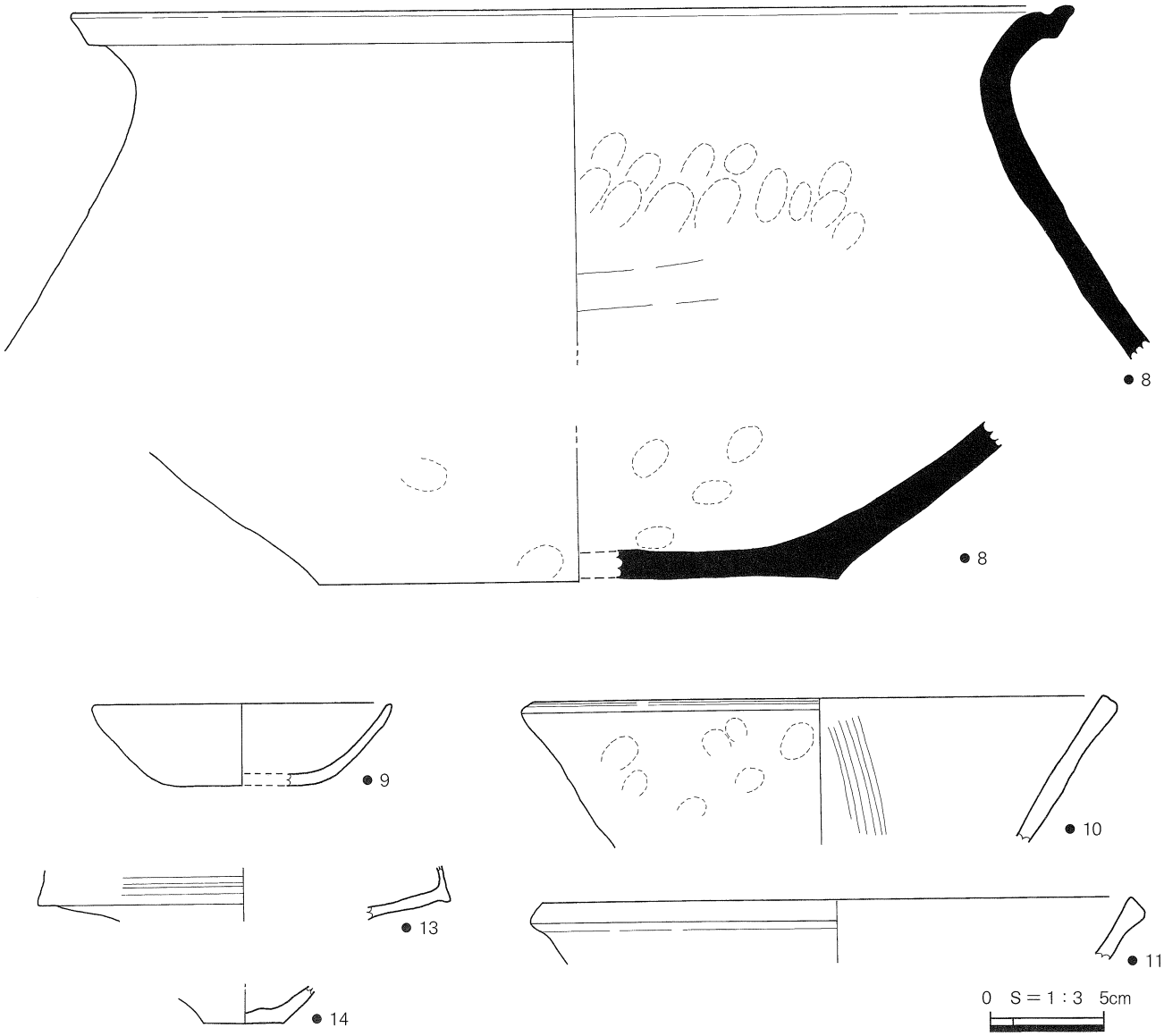
0　S＝1：1　2cm

挿図 12　曲輪 1 北東側遺構図・出土遺物実測図

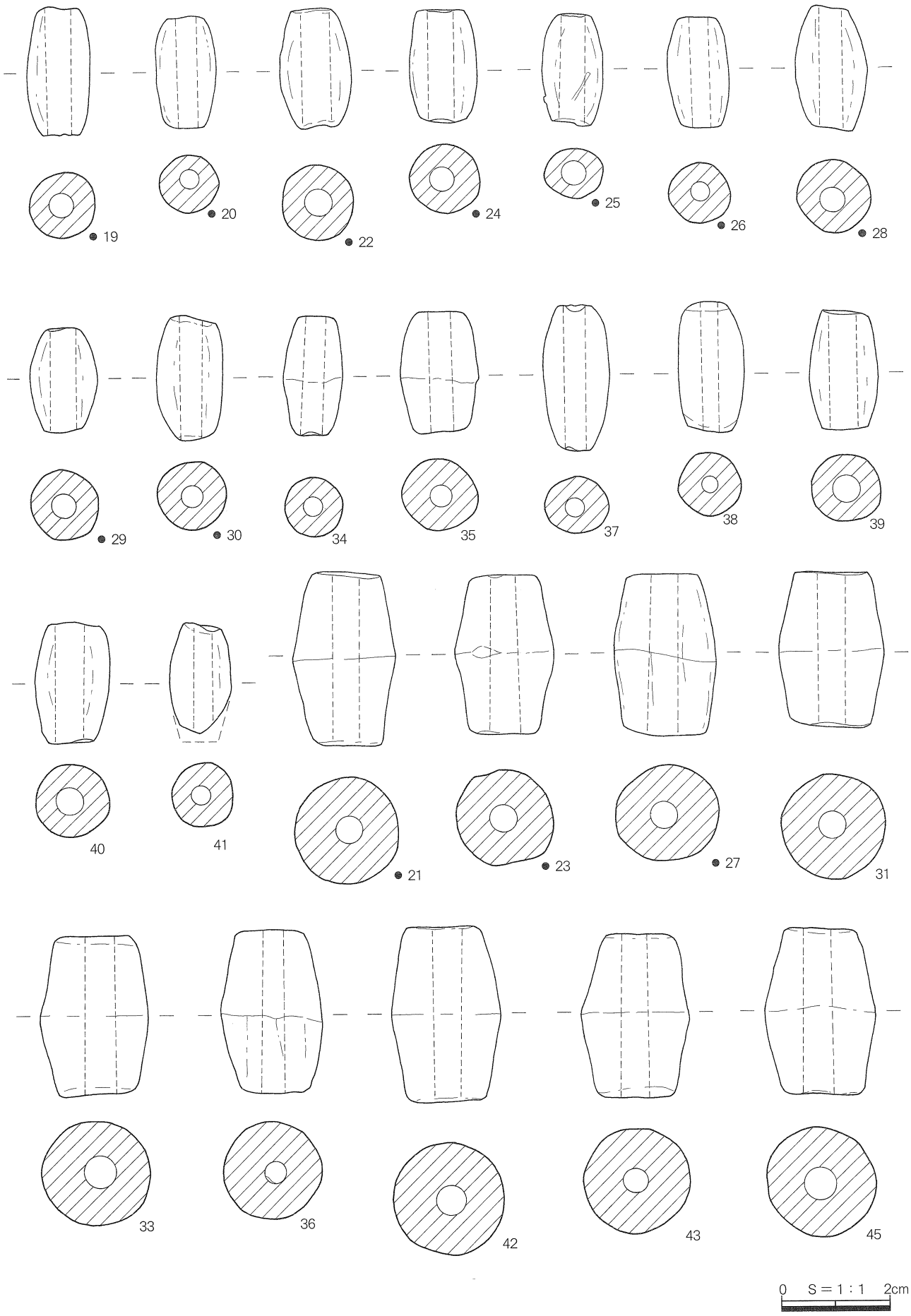



挿図 13　　曲輪 2 全体遺構図

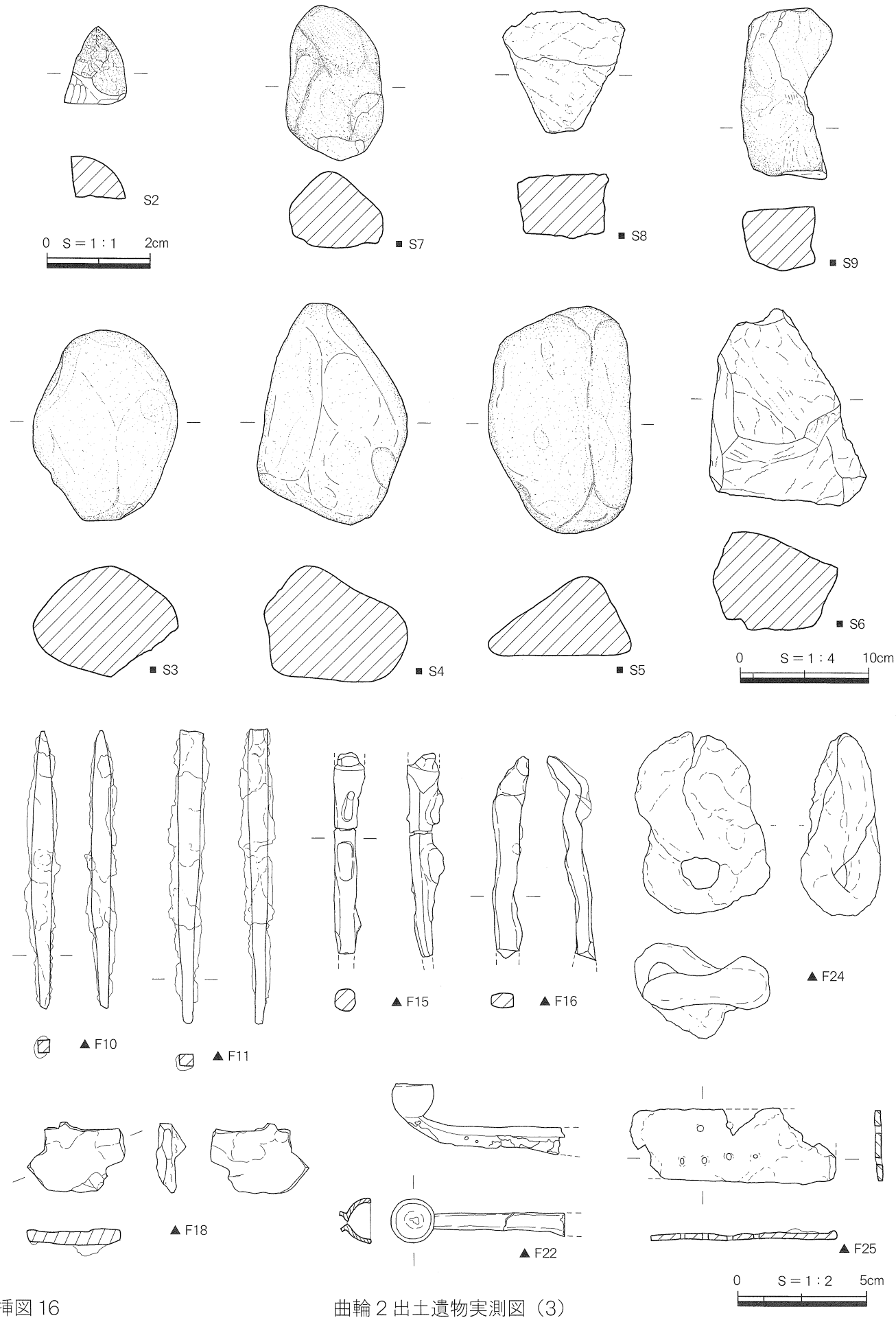
① 褐色粘質土に黄白色地山ブロック（径２～3cm）が点在し、微細炭化物混じり、しまる。
② 褐色粘質土に黄白色地山微細礫混じり、ややしまる。
③ 少量の褐色粘質土と多量の黄白色紫色の地山ブロック（径 1cm 未満）の混合土で、ややもろい。
④ 少量の褐色粘質土に茶色地山ブロックの混合土で、しまる。（ピット埋土）
⑤ ③に炭化物点在し、地山ブロック（径１～3cm）とやや大きい。（ピット埋土）
⑥ 黄白色・茶灰色地山ブロックで、かたくしまる。（盛土）
⑦ 褐色粘質土に微細炭化物点在し、しまる。
⑧ 灰色粘質土で、しまる。
⑨ ⑥に少量の褐色粘質土が混じり、しまる。（盛土）
⑩ 褐色粘質土に炭化物点在し、ややしまる。（盛土）
⑪ 褐色腐植質土で、微細炭化物、微細黄白色地山礫も点在し、もろい。（ピット埋土）
⑫ 褐色土と黄白色地山礫（径１～2cm）の混合土で、しまる。
⑬ 褐色粘質土ブロック（径１～3cm）少量と多量の黄白色地山ブロック（径 0.5～5cm）の混合土で、しまる。
⑭ 褐色粘質土（径５～6cm）と黄白色地山ブロック（径５～6cm）の混合土で、ややしまる。
⑮ 褐色粘質土に地山微細ブロック、根がよく入り、しまる。
⑯ 褐色粘質土に微細炭化物、微細地山ブロック点在し、しまる。
⑰ 褐色粘質土に地山微細ブロックまじり、かたくしまる。
⑱ 褐色粘質土に黄色地山ブロック（径１～3cm）混じり、微細炭化物点在し、しまる。
⑲ 褐色粘質土に茶色粘質土ブロック（径２～3cm）、黄色地山ブロック（径２～3cm）が多量に混じり、かたくしまる。
⑳ 地山の流土（黄白色）で、しまる。
㉑ 少量の褐色粘質土と多量の黄灰色地山ブロック茶色粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（第１次遺構面の貼床）
㉒ 攪乱土（根）
㉓ 褐色粘質土に微細炭化物点在し、ややしまる。㉔ 褐色粘質土で、やわらかい。
㉕ 褐色粘質土に青灰色粘質土ブロック（径２～3cm）混じり、しまる。
㉖ 褐色粘質土に微細地山礫、炭化物混じり、しまる。
㉗ 褐色粘質土に黄灰色地山ブロック混じり、ややしまる。
㉘ 褐色粘質土に地山微細礫点在し、ややしまる。
㉙ 暗褐色粘質土に炭化物混じり、ややしまる。
㉚ 褐色粘質土と少量の青灰色地山ブロック（微細礫）と多量の黄白色地山ブロック（微細礫）で、しまる。
㉛ 少量の褐色粘質土と多量の黄白色地山ブロックの混合土で、しまる。
㉜ 褐色粘質土に微細青灰色地山ブロックと黄白色地山ブロックが混じり、しまる。
㉝ 褐色粘質土に黄白色微細地山ブロック点在し、しまる。
㉞ 少量の褐色粘質土に多量の桃黄色地山ブロック（径１～3cm）が混じり、かたくしまる。
㉟ ㉝に青灰色地山ブロック混じり、しまる。
㊱ 褐色粘質土に青灰色微細地山ブロック、微細炭化物混じり、しまる。
㊲ 褐色粘質土に黄白色地山ブロック、桃黄色地山ブロック（粘性で径２～4cm と礫４～5cm）の炭化物混じり、しまる。
㊳ 茶褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物混じり、しまる。
㊴ 褐色粘質土に茶色粘質土ブロック（径２～3cm）混じり、しまる。
㊵ 青灰色粘質土に黄白色地山ブロック（径 1cm 未満）が点在し、かたくしまる。
㊶ 茶色地山粘質土ブロックで、しまる。
㊷ 褐色粘質土に微細炭化物点在し、やわらかい。
㊸ 黄褐色粘質土に黄色地山微細礫、微細炭化物混じり、しまる。



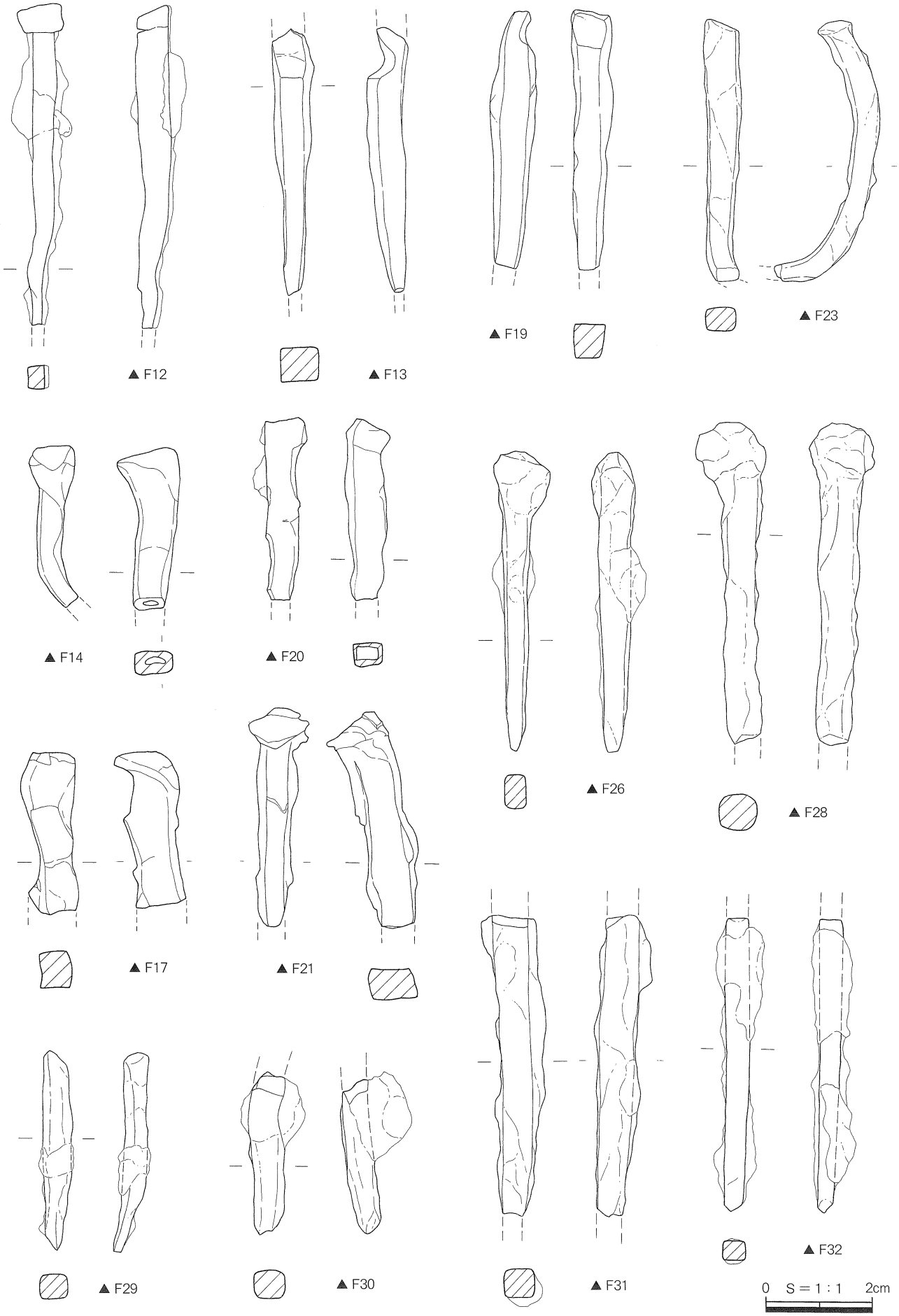

挿図 14　　曲輪２出土遺物実測図（1）



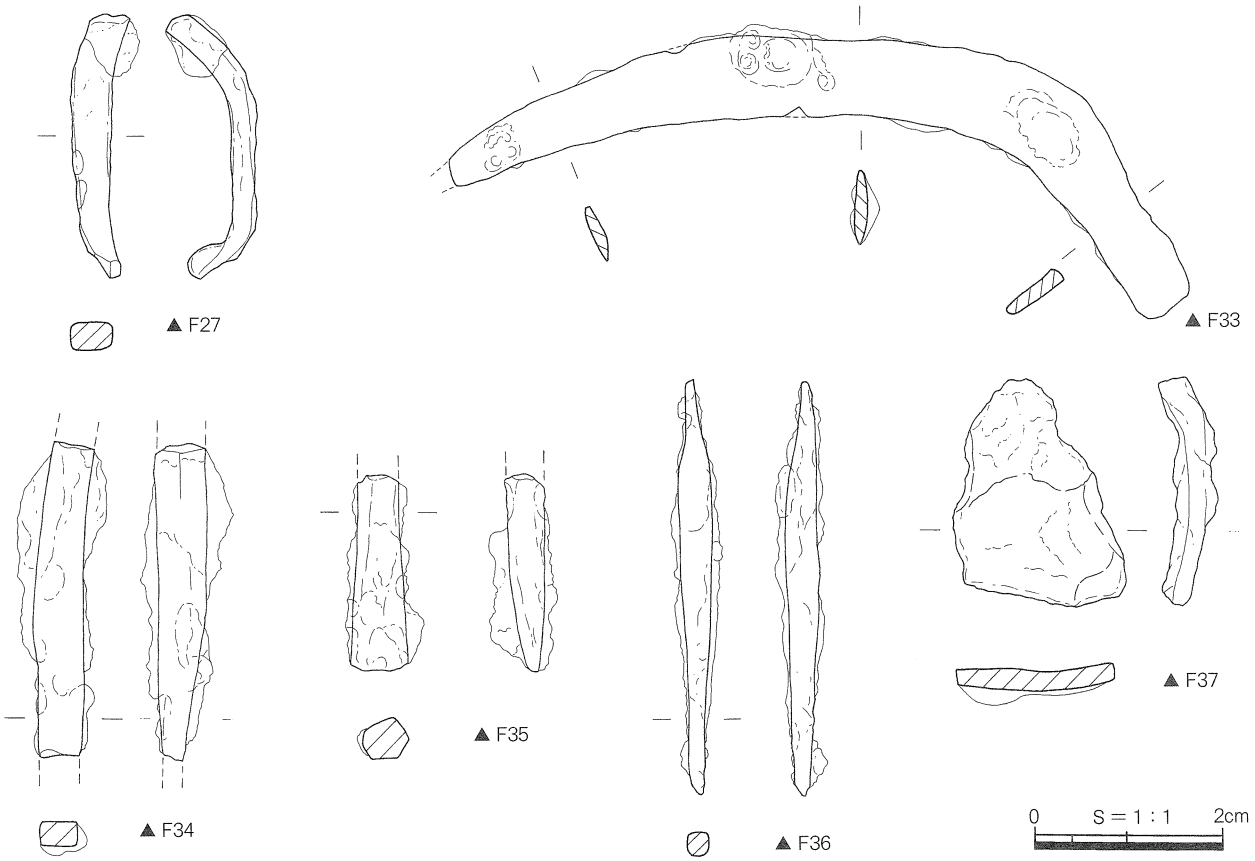

挿図 15　　曲輪 2 出土遺物実測図（2）



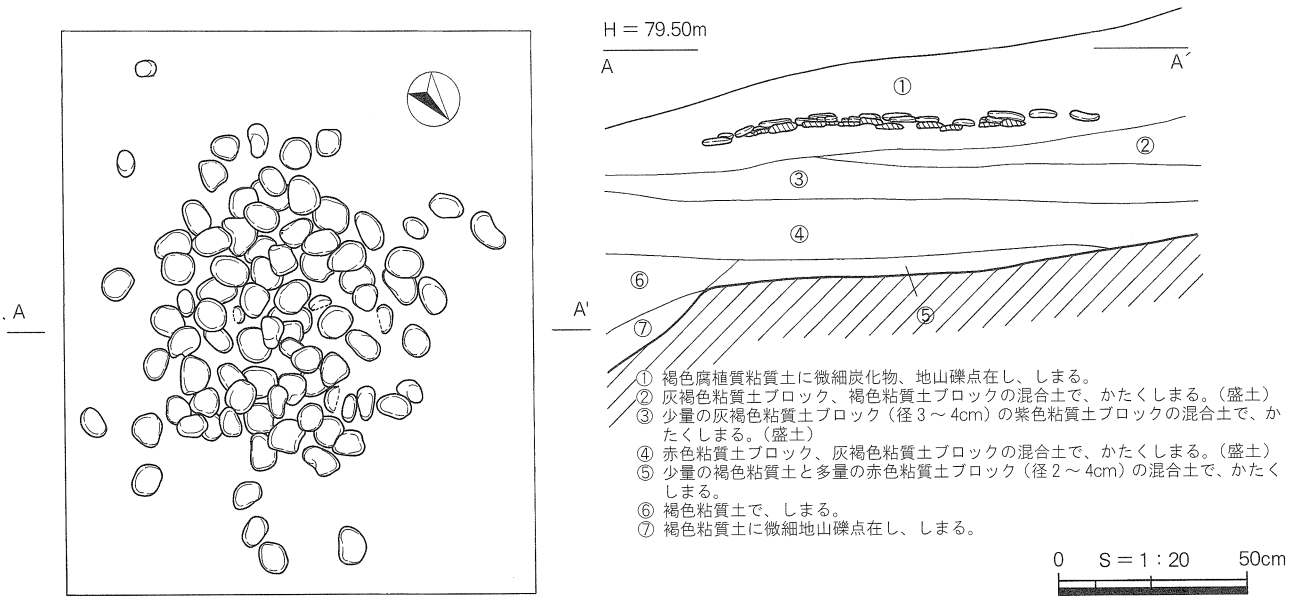

挿図 16　　曲輪 2 出土遺物実測図（3）



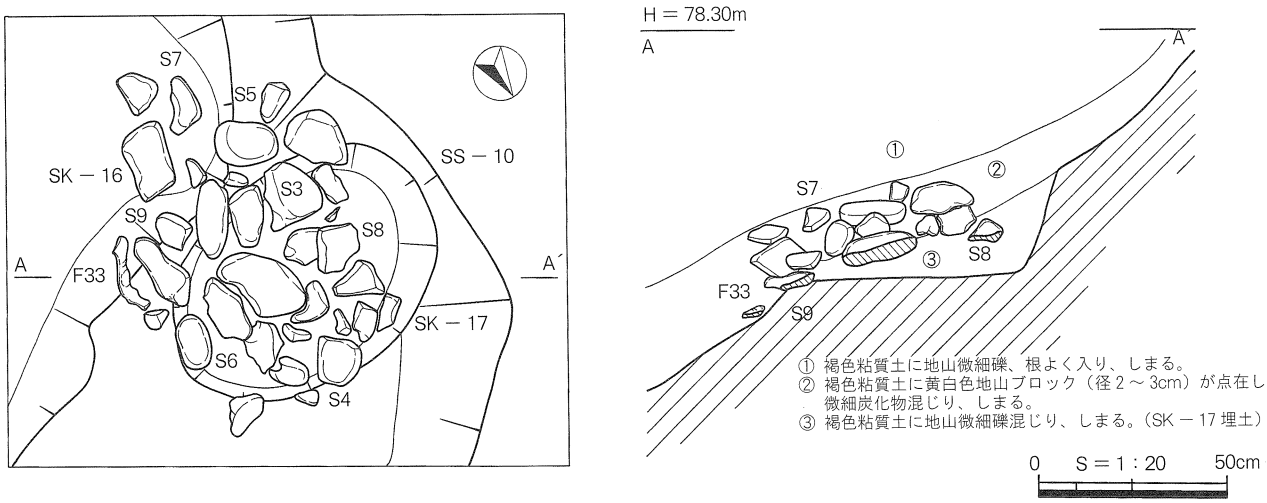

挿図 17　　曲輪 2 出土遺物実測図（4）




挿図 18　　曲輪 2 出土遺物実測図（5）




挿図 19　　玉砂利出土状況図




挿図 20　　第 17 土坑内集石状況図

## 第３節　段状遺構、柵列

段状遺構は曲輪１の北西側で１基、北側で２基、東側で３基。曲輪２に11基と多数みられ、他に横堀状遺構の内方で１基、第２堀切の北東側で１基、計19基が確認された。なお、ここでは便宜上、曲輪２を構成する帯状の平坦面をもつ大規模な段についても一括して段状遺構と呼称することにした。そのため、曲輪２と名称が重複するものもある。また、トレンチ調査で確認した段状遺構の中には立地、形態等から連続する同一のものと推定されるものもあるが、便宜上分類して取り扱うことにした。

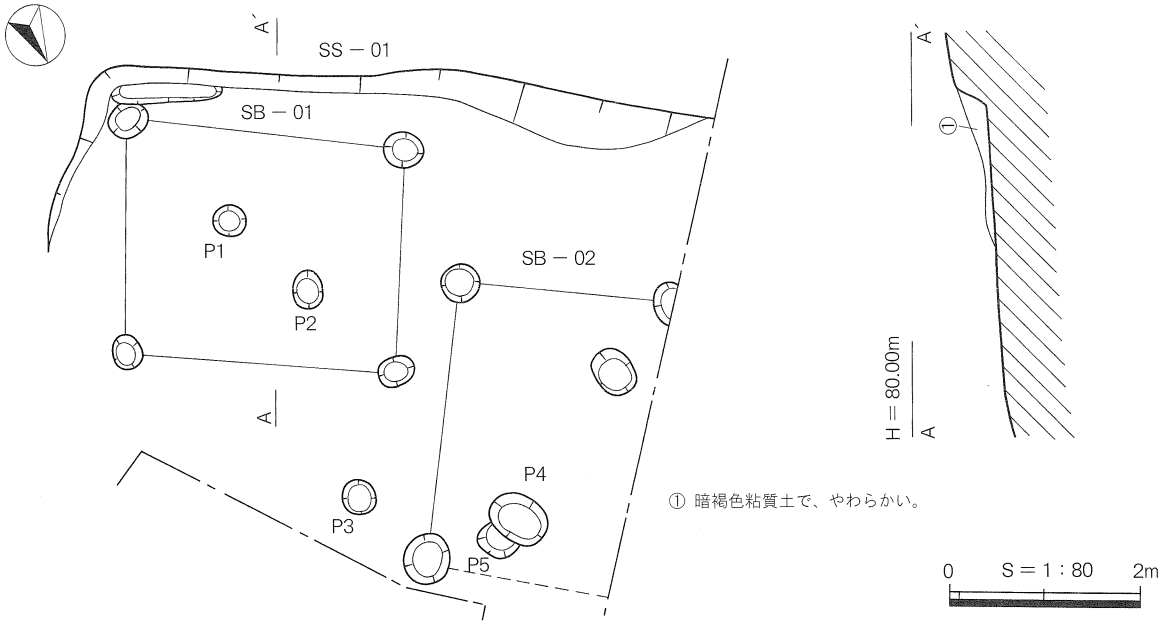
柵列は曲輪１の東側に１本、曲輪２の南側に１本が検出された。

### 第１段状遺構（ＳＳ－01・挿図21）

位　置　　調査区北西側、曲輪１北西端に位置し、底面の南東側でＳＳ－11を切り込んでいる。底面の平均標高は78.20ｍを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で、緩斜面の上側をＬ字状に掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.35ｍを残し、造成面の規模は現況で長辺（東西長）6.60ｍ、短辺（南北長）約5.00ｍを測る。南東側の壁際で長さ2.20ｍ、幅0.18ｍ、深さ0.05ｍを測る側溝が１本検出された。平坦面には壁面に平行してＳＢ－01、ＳＢ－02と２棟の掘立柱建物跡が造られており、関連施設と思われる。埋土はやわらかい褐色粘質土の単層である。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。




挿図21　　第１段状遺構遺構図

### 第２段状遺構（ＳＳ－02・挿図５）

位　置　　調査区の北西側に位置し、第８トレンチ内で確認された。底面の平均標高は78.60ｍを測る。

形　態　　等高線に沿う形で、緩斜面の上側を掘り込んで二段掘りとし、それぞれに平坦面を造成している。掘り込み壁高は上段が0.45ｍ、下段が0.32ｍを残す。規模は東西長がそれぞれ1.50ｍ、1.10ｍを測り、後者には盛土を施し、底面を平坦に整えている。また、上段の底面にはＰ１（42×41－32）cmが掘り込まれている。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第３段状遺構（ＳＳ－03・挿図７、11）

位　置　　調査区の北側に位置し、第７トレンチ内で確認された。底面の平均標高は77.60ｍを測る。上側にＳＳ－01が隣接する。

形　態　　等高線に沿う形で、緩斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.30ｍを残し、造成面の規模は南北長5.20ｍを測る。底面は北側約２/３の範囲で盛土を施し、北端のいわゆる石切部には４層の盛土を小さく互層状に積み上げている。また、盛土下からは、さらに深く掘り込まれた段が検出された。掘り込み壁高は最大で1.02ｍを残し、平坦に造成された底面の規模は南北長3.80ｍを測る。この底面には中央からやや北寄りのところで盛土（⑲・⑳）を台形状（上面0.60ｍ、底面0.90ｍ、厚さ0.32ｍ）に積み上げ、断面形で見る限りでは土塁状に整えている。埋土は⑭～⑱の５層が自然堆積の様相でみられ、⑯層南側には1.15ｍ×1.00ｍの範囲で大小様々な亜円礫や角礫（大きいもので55cm、小さいもので７cm）が集石した状態で検出されている。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。なお、築造過程をみると、当初谷側に深く段状に掘り込み、これが廃棄された後、山側に向かって大きく造成面の規模を拡大している様子が窺える。

第４段状遺構（ＳＳ－04・挿図12・図版７、17）

位　置　　調査区の北東側、曲輪１の北東側に位置し、底面の平均標高は79.70ｍを測る。南端にＳＫ－06が、東側にＳＳ－06がそれぞれ切り込んだ状態で造られている。

形　態　　等高線に沿う形で、緩斜面の上側日次１号墳の東側墳丘部を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.36ｍを残し、造成面の規模は長辺（南北長）約7.00ｍ、短辺（東西長）3.30ｍ測る。北西端の壁際で長さ1.40ｍ（検出面）、幅0.36ｍ、深さ0.07ｍを測る側溝が残存する。平坦面にはＳＢ－03、ＳＢ－04と２棟の掘立柱建物跡が造られており、関連施設と思われる。また、平坦面にはＳＤ－02、ＳＤ－03の２本の溝状遺構も掘り込まれているが、関連性については現況では言及し得ない。

時　期　　埋土中からは鉄釘（Ｆ１、Ｆ２）、板状鉄製品（Ｆ３）が出土しているが、時期決定を行う土器類は土師器細片数点のみであり、時期については不明である。

第５段状遺構（ＳＳ－05・挿図12・図版７）

位　置　　曲輪１の北東側に位置し、底面の平均標高は79.60ｍを測る。西側のＳＳ－04を切り込み、北側はＳＳ－01により切られている。

形　態　　等高線に沿うような形で、緩斜面の上側ＳＳ－04の底面を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.08ｍを残し、造成面の規模は長辺（南北長、検出面）7.10ｍ、短辺（東西長）2.20ｍを測る。側溝下には長さ4.25ｍ（検出面）、最大幅0.45ｍ、深さ0.30ｍを測る逆台形状の側溝を巡らす。平坦面にはＳＢ－05、ＳＢ－06の２棟が重複して造られている。なお、土層断面観察（Ａ－Ａ´）をみると、側溝は重複しており、本遺構の側溝は上方に向かって造り直された可能性が高い。

時　期　　埋土中からは不明鉄（Ｆ４）が出土している。時期は不明である。

第６段状遺構（ＳＳ－06・挿図12・図版７）

位　置　　曲輪１の北東側に位置し、底面の平均標高は79.60ｍを測る。南西側のＳＳ－04を切り込み、北側はＳＳ－01により切られている。

形　態　　等高線に沿うような形で、緩斜面の上側とＳＳ－04の底面を掘り込んで平坦面を造成している。なお、側壁下を巡る側溝の土層断面観察（Ｂ－Ｂ´）をみると、ＳＳ－05側溝と重複しており、本遺構の側溝を付設後、余り時を経ずに、側溝内に盛土をし、やや内方に向かってＳＳ－05の側溝を巡らしている。側溝の規模は最大幅0.35ｍ、深さ0.30ｍで断面逆梯形を呈す。造成面の規模は長辺（南北長）5.40ｍ、短辺（東西長）2.50ｍを測る。また、平坦面にはＳＢ－07、１棟が造られており、関連施設と思われる。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第７段状遺構（ＳＳ－07・挿図13・図版15）

位　置　　曲輪１の北側から東側にかけての東側部分に位置し、曲輪２の一部分として取り扱う。底面の平均標高は77.30ｍを測る。ＳＤ－04及びＳＫ－19、ＳＫ－20は本遺構の東端に掘り込まれている。

形　態　　曲輪１の辺縁部から一段下って曲輪１の形態に沿う形で、弧状に掘り込んで、平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で1.50ｍを残し、平坦面の規模は長さ14.80ｍ、幅4.50～1.25ｍを測る帯曲輪の様相を呈している。

時　期　　北側平坦面（第10トレンチ内）で亀山焼（２）が出土している。その他に埋土中から弥生土器（13）、底部（14）が出土している。鎌倉時代（13世紀代）のものと考えられる。

第８段状遺構（ＳＳ－08・挿図22・図版15）

位　置　　調査区北端、曲輪２北西側にあたり、底面の平均標高は77.10ｍを測る。

形　態　　調査区の関係から全容は不明であるが、上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.38ｍを残し、下側はＳＳ－09により切り込まれている。検出規模は長辺（南北長）1.20ｍ、短辺（東西長）0.60ｍを測る。

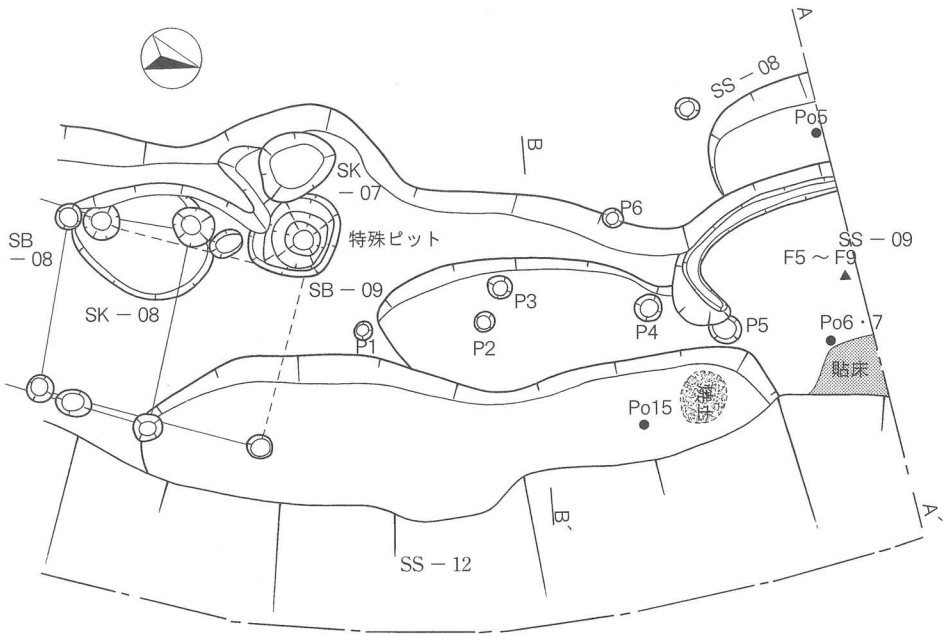
時　期　　埋土（⑳層）中からは備前焼大甕口縁部（５）が出土しており、13世紀代のものと推定される。

第９段状遺構（ＳＳ－09・挿図22、23・図版８、15、17、18）

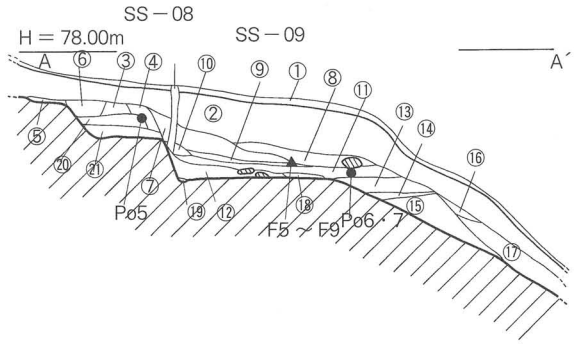
位　置　　曲輪２北西端に位置し、底面の平均標高は76.60ｍを測る。南側にＳＳ－11が接する。

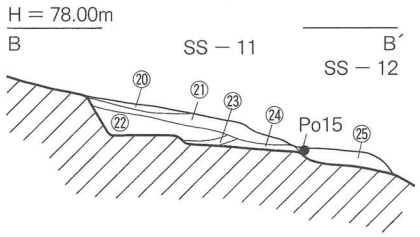
形　態　　調査区の関係から全容は不明であるが、上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.90ｍを残す。側壁下を側溝が検出面Ｌ字状に巡り、規模は最大幅0.24ｍ、深さ0.04ｍを測り、埋土には多量の微細炭化物を含む。底面東端は盛土を施し、平坦に整えている。平坦面の検出規模は長辺（東西長）2.75ｍ、短辺（南北長）2.00ｍを測る。

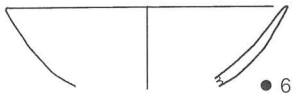
時　期　　東側底面直上から土師器椀（６）、土師器皿底部（７）、埋土中より鉄釘、棒状鉄製品などの鉄製品（Ｆ５～Ｆ９）が出土している。直上遺物から14世紀代に入るものと思われる。

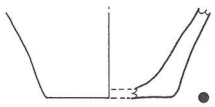


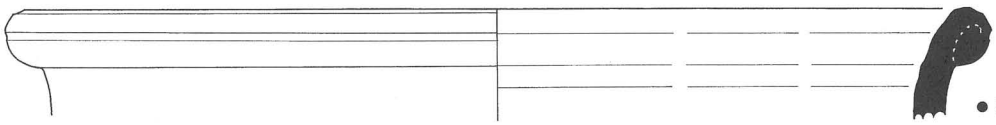

① 表土。
② 褐色腐植質土で、根がよく入り、しまる。
③ 明黄灰色と青灰色の地山粘質土ブロック（径2～3cm）の混合土で、かたくしまる。（盛土）
④ 少量の褐色粘質土と黄灰色粘質土ブロック（径1cm未満）の混合土で、かたくしまる。（盛土）
⑤ 少量の褐色粘質土と黄灰色、青灰色粘質土ブロック（径1cm未満）の混合土で、褐色粘質土には微細炭化物、微細焼土ブロックを含み、しまる。（盛土）
⑥ 褐色粘質土で、微細炭化物混じり、しまる。（ピット埋土）
⑦ 褐色粘質土に黄色や茶色の地山ブロック、炭化物、焼土ブロック混じり、しまる。
⑧ 褐色粘質土に地山ブロック（径1cm未満）点在し、しまる。
⑨ 暗褐色粘質土に微細炭化物まじり、ややしまる。
⑩ 明青灰褐色地山粘質土ブロックで、かたくしまる。
⑪ 少量の桃黄色粘質土ブロックと多量の明青灰色地山粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。
⑫ 暗褐色粘質土で、地山微細礫点在し、径1cm未満の炭化物が混じり、ややしまる。
⑬ いわゆる多量の赤土（明茶色粘質土）と少量の明黄灰色粘質土で、かたくしまる。
⑭ 暗褐色粘質土で、ややしまる。（旧表土）
⑮ 黄褐色粘質土で、しまる。（漸移層）
⑯ ⑬の流土。
⑰ 暗褐色腐植質粘質土で、ややしまる。
⑱ 床面が赤色焼土化、かたい。埋土は褐色で多量の炭化物、焼土ブロックを含む。
⑲ 茶褐色粘質土に微細炭化物混じり、ややしまる。
⑳ 少量の褐色粘質土と黄灰色、青灰色粘質土ブロック（径1cm未満）の混合土で褐色粘質土には微細焼土ブロックを含み、しまる。（盛土）
㉑ 暗褐色粘質土に炭化物（径5cm以下）の炭化物混じり、ややしまる。（SS－12の埋土）
㉒ 褐色粘質土に地山ブロック（径2～4cm、黄色や桃黄色）が点在し、しまる。
㉓ 褐色粘質土に赤色地山ブロック（径1～2cm）、微細炭化物混じり、しまる。
㉔ 茶褐色粘質土に微細地山ブロック、炭化物点在し、かたくしまる。
㉕ 桃黄色地山粘質土ブロック層で、しまる。
㉖ 褐色粘質土に黄色地山ブロック、炭化物混じり、やわらかい。
㉗ 茶褐色粘質土に炭化物、微細焼土ブロックが混じり、しまる。（底面には多量の炭化物が密着した状態で検出）（SS－12）



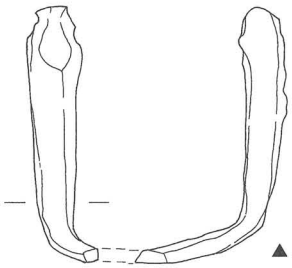



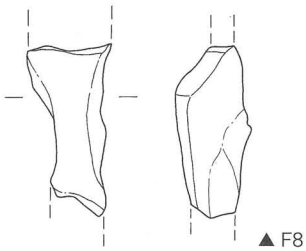



0　S＝1：80　2m

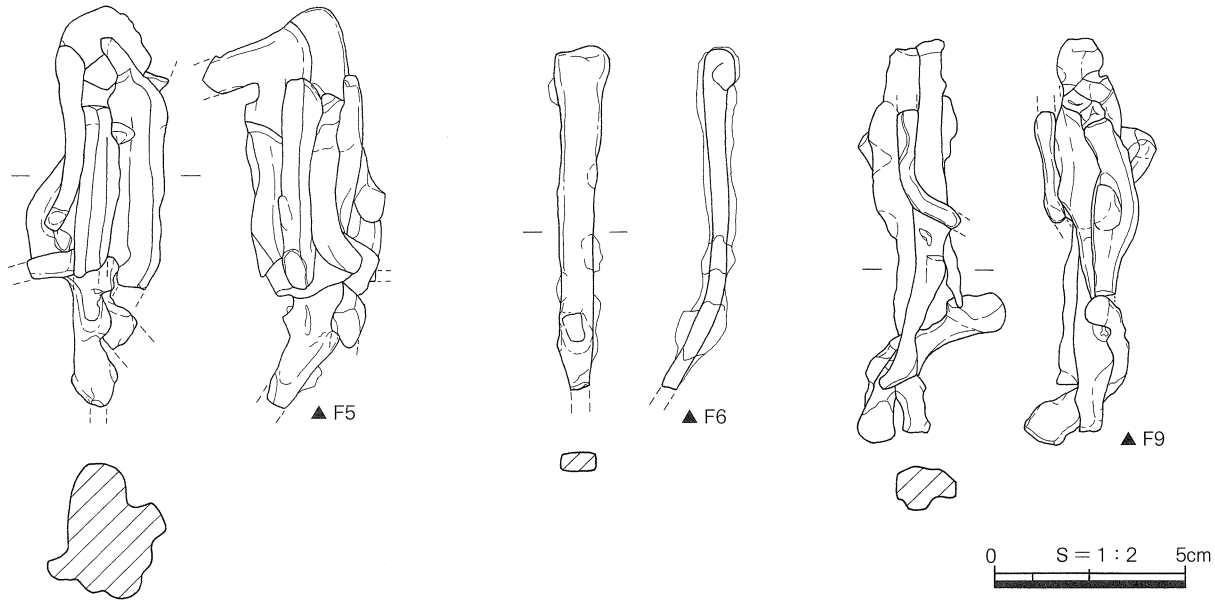
0　S＝1：3　5cm



0　S＝1：1　2cm

挿図22　第8・9・11・12段状遺構遺構図・出土遺物実測図（1）




挿図 23　　第９段状遺構出土遺物実測図（2）

第 10 段状遺構（ＳＳ－10・挿図 13・図版 15、16、17、18）

位　置　　調査区の北東側から東側に位置し、ＳＳ－07 に沿う形で下側に一段下って接している帯状の曲輪（曲輪２の一部分）でここでは便宜上第 10 段状遺構と呼称する。底面の平均標高は北東側で 76.70 m、東側で 77.20 m を測る。

形　態　　ＳＳ－07 に沿う形に上側を掘り込んでやや弧状を呈す平坦面を造成している。掘り込み壁高は北東側で最大 0.42 m、東側で 0.90 m を残す。平坦面の規模は長さ 27.50 m、幅 4.20 ～ 1.05 m を測る帯曲輪の様相を呈している。底面には北東側のやや幅狭な平坦面に掘立柱建物跡ＳＢ－08、ＳＢ－09 の２棟、東側のやや幅狭な張り出し部でＳＢ－10、ＳＢ－11、ＳＢ－12、ＳＢ－13 の４棟、溝状遺構ＳＤ－05、１本、土坑ＳＫ－08、ＳＫ－09、ＳＫ－11、ＳＫ－12、ＳＫ－14、ＳＫ－15、ＳＫ－16 の７基が造られている。また、側壁にはＳＫ－07、ＳＫ－10、ＳＫ－13、ＳＫ－18 が掘り込まれている。なお、土層断面観察Ａ－Ａ´、Ｂ－Ｂ´、Ｃ－Ｃ´をみると、それぞれで本遺構掘削後、盛土を施し底面を平坦に整え、造成面を外側へやや拡張している様子が窺え、少なくとも二時期に亘り、本遺構が機能していたものと考えられる。

遺　物　　本遺構北東側底面直上（Ｂ－Ｂ´）で土師器皿（９）、埋土中より常滑焼大甕（８）、土師器捏鉢（10・11）、弥生土器壺口縁、底部（13・14）、土錘（19 ～ 45）が出土している。鉄製品は、北東側底面直上（Ｄ－Ｄ´）で棒状鉄製品（Ｆ 10・Ｆ 11）の他は埋土中より、鉄釘（Ｆ 12 ～Ｆ 32・Ｆ 34 ～Ｆ 36）、鉄鎌（Ｆ 33）、板状鉄製品（Ｆ 18・Ｆ 37）、小札（Ｆ 25）などが出土している。

時　期　　直上遺物から、底面造成後のものは 13 世紀代と推定される。また、その形態、立地等から山城を構成する曲輪と考えられる。

第 11 段状遺構（ＳＳ－11・挿図 13、22・図版８）

位　置　　調査区の北東端、曲輪２北端にあたり、ＳＳ－10 内に掘り込まれている。底面の平均標高は 76.65 m を測る。

形　態　　上側をやや弧状に掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で 0.15 m を残す。規模は長辺 3.40 m、短辺 1.30 m を測る。底面にはＰ２（22 × 20 － 12）cm、Ｐ３（26 × 24 － 8）cm、Ｐ４（30 × 30 － 8）cm がみられる。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第12段状遺構（ＳＳ－12・挿図13、22・図版８、16、17）

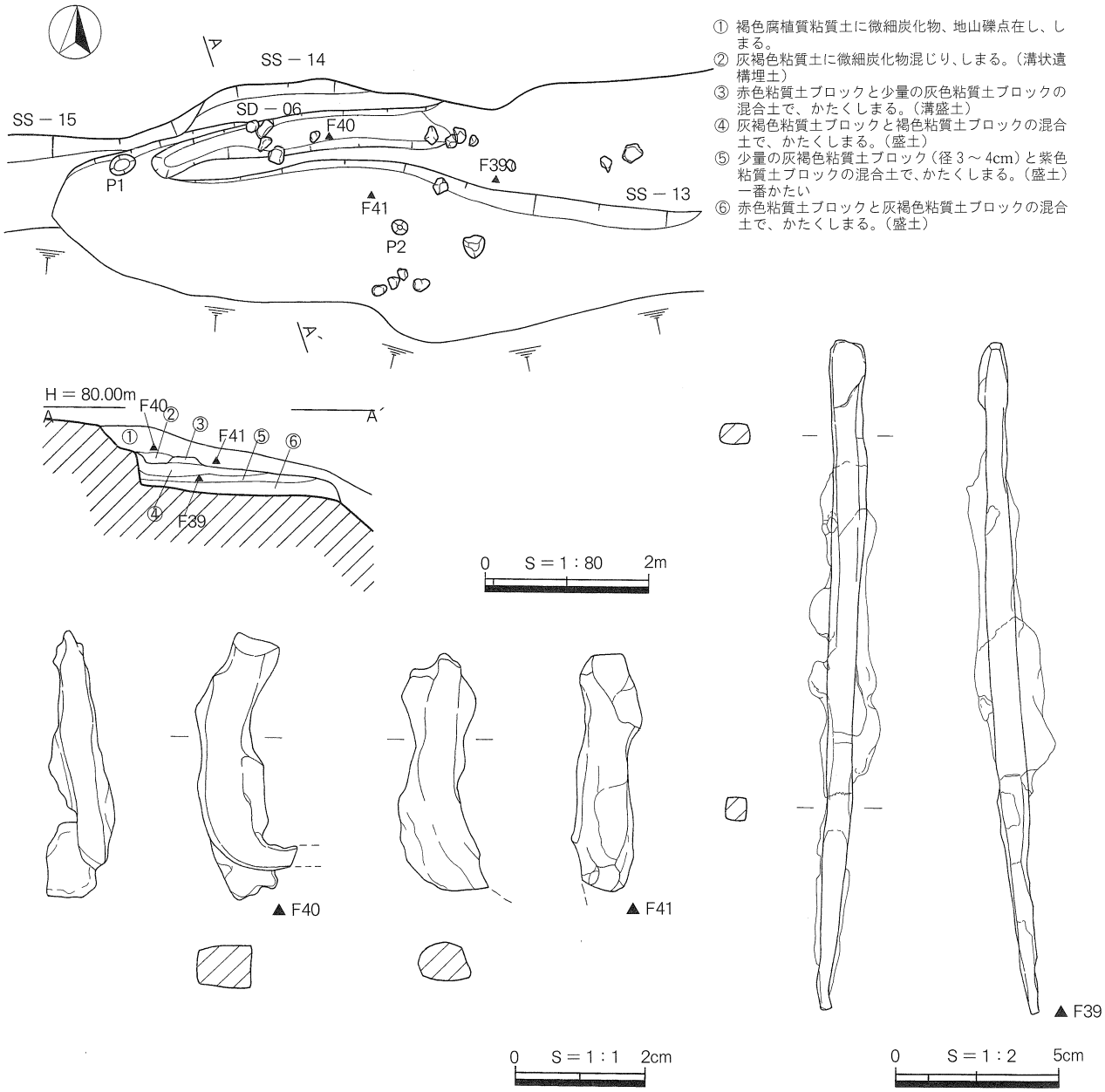
位　置　　調査区の北東端、曲輪２北端に位置する。底面の平均標高は76.55ｍを測る。南側にＳＢ－09のピットが掘り込まれている。

形　態　　上側をやや「コの字」状に掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.20ｍを残す。規模は長辺6.70ｍ、短辺1.30ｍを測る。底面北側には楕円形状（55×48）cmの焼土跡が認められる。

時　期　　埋土中下位より弥生土器底部（15）が出土しており、弥生時代後期頃のものと推定される。

第13段状遺構（ＳＳ－13・挿図13、24・図版18）

位　置　　調査区のほぼ中央に位置し、曲輪１の東端に接する形で掘り込まれている。東側でＳＳ－




挿図24　第13段状遺構遺構図・出土遺物実測図、第６溝状遺構遺構図・出土遺物実測図

07、西側でＳＳ－15が隣接する。また、下側のあたる南東側は急傾斜の崩れとなっている。底面の平均標高は79.20ｍを測る。

形　態　　上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.35ｍを残し、側壁よりやや外側に東西に延びる溝状遺構（ＳＤ－06）を付設している。その外側には平坦面が続いており、規模は長辺（東西長）約8.00ｍ、短辺（南北長）1.90ｍを測る。平坦面にはＰ１（35×30－15）cm、Ｐ２（24×22－10）cmが掘り込まれている。土層断面観察（Ａ－Ａ´）をみるとＳＳ－14構築後、盛土を施し、底面を平坦に整えている様子が窺える。

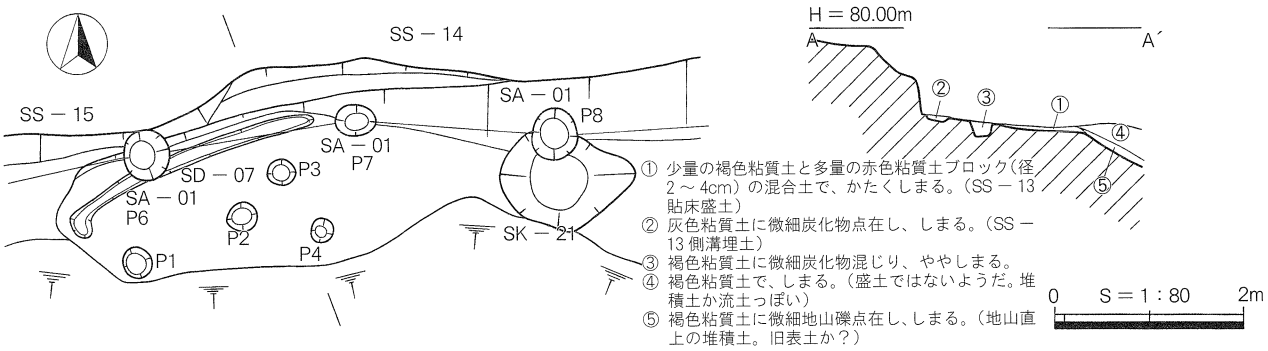
時　期　　底面直上より鉄製品（Ｆ41）が出土しているが、その他には全く出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。

第14段状遺構（ＳＳ－14・挿図24、25・図版８）

位　置　　調査区のほぼ中央に位置し、ＳＳ－13の下で検出された。底面の平均標高は79.00ｍを測る。側壁下にはＳＡ－01のＰ６、Ｐ７が、東側底面にはＳＫ－21が掘り込まれている。

形　態　　上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.60ｍを残し、側壁よりやや外側に東西に延びる溝状遺構（ＳＤ－07）を付設している。平坦面の規模は長辺（東西長）4.40ｍ、短辺（南北長）1.40ｍを測り、Ｐ１（28×24－8）cm、Ｐ２（26×25－8）cm、Ｐ３（26×24－7）cm、Ｐ４（21×20－7）cmが掘り込まれている。

時　期　　埋土中より棒状鉄製品（Ｆ39）が出土している。形態、立地条件、土層断面観察から本遺構廃棄後、余り時を経ずにＳＳ－13を構築したものと推定される。中世の山城を構成する施設の可能性が高い。



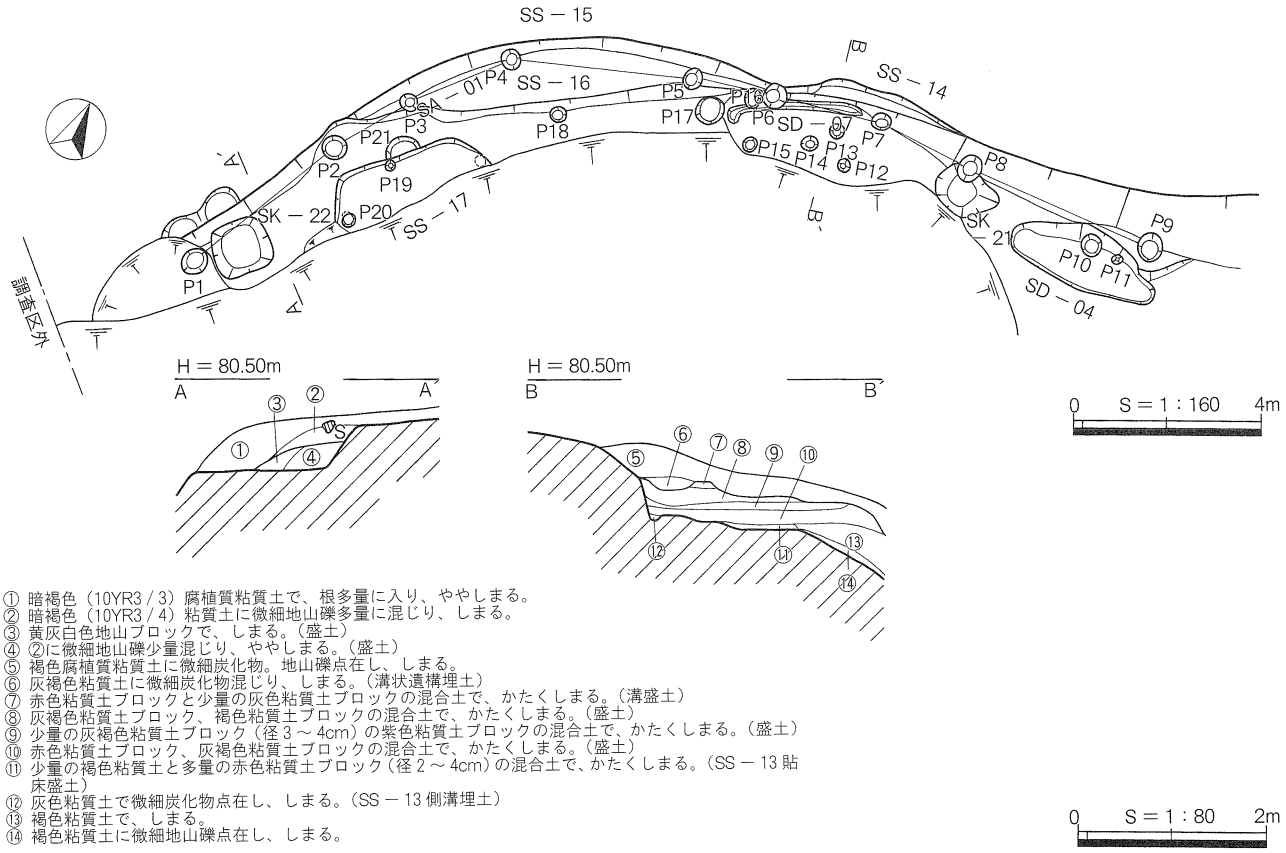

挿図25　　第14段状遺構遺構図、第７溝状遺構遺構図

第15段状遺構（ＳＳ－15・挿図26）

位　置　　調査区中央やや南西寄りに位置し、曲輪１の東端に接する形で掘り込まれている。北側でＳＳ－14、東側～南側でＳＳ－16が隣接する。底面の平均標高は79.70ｍを測る。

形　態　　上側を弧状に掘り込み平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.30ｍを残す。平坦面の規模は長辺（南西－北東長）6.40ｍ、短辺（北西－南東長）1.20ｍを測る。なお、壁際にはＳＡ－01のピットが掘り込まれている。

時　期　　遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。



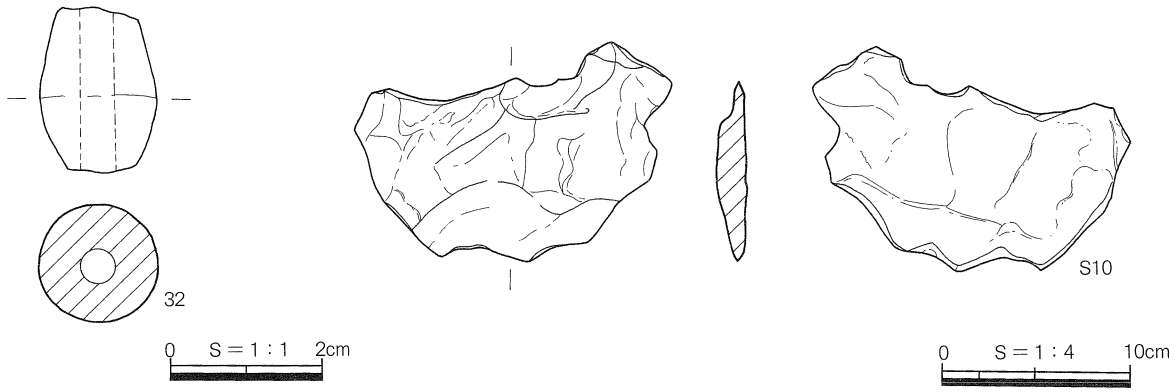

① 暗褐色（10YR3／3）腐植質粘質土で、根多量に入り、ややしまる。
② 暗褐色（10YR3／4）粘質土に微細地山礫多量に混じり、しまる。
③ 黄灰白色地山ブロックで、しまる。（盛土）
④ ②に微細地山礫少量混じり、ややしまる。（盛土）
⑤ 褐色腐植質粘質土に微細炭化物。地山礫点在し、しまる。
⑥ 灰褐色粘質土に微細炭化物混じり、しまる。（溝状遺構埋土）
⑦ 赤色粘質土ブロックと少量の灰色粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（溝盛土）
⑧ 灰褐色粘質土ブロック、褐色粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（盛土）
⑨ 少量の灰褐色粘質土ブロック（径3～4cm）の紫色粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（盛土）
⑩ 赤色粘質土ブロック、灰褐色粘質土ブロックの混合土で、かたくしまる。（盛土）
⑪ 少量の褐色粘質土と多量の赤色粘質土ブロック（径2～4cm）の混合土で、かたくしまる。（SS－13貼床盛土）
⑫ 灰色粘質土で微細炭化物点在し、しまる。（SS－13側溝埋土）
⑬ 褐色粘質土で、しまる。
⑭ 褐色粘質土に微細地山礫点在し、しまる。

挿図26　　第15段状遺構遺構図

## 第16段状遺構（ＳＳ－16・挿図27、28・図版16、17、18）

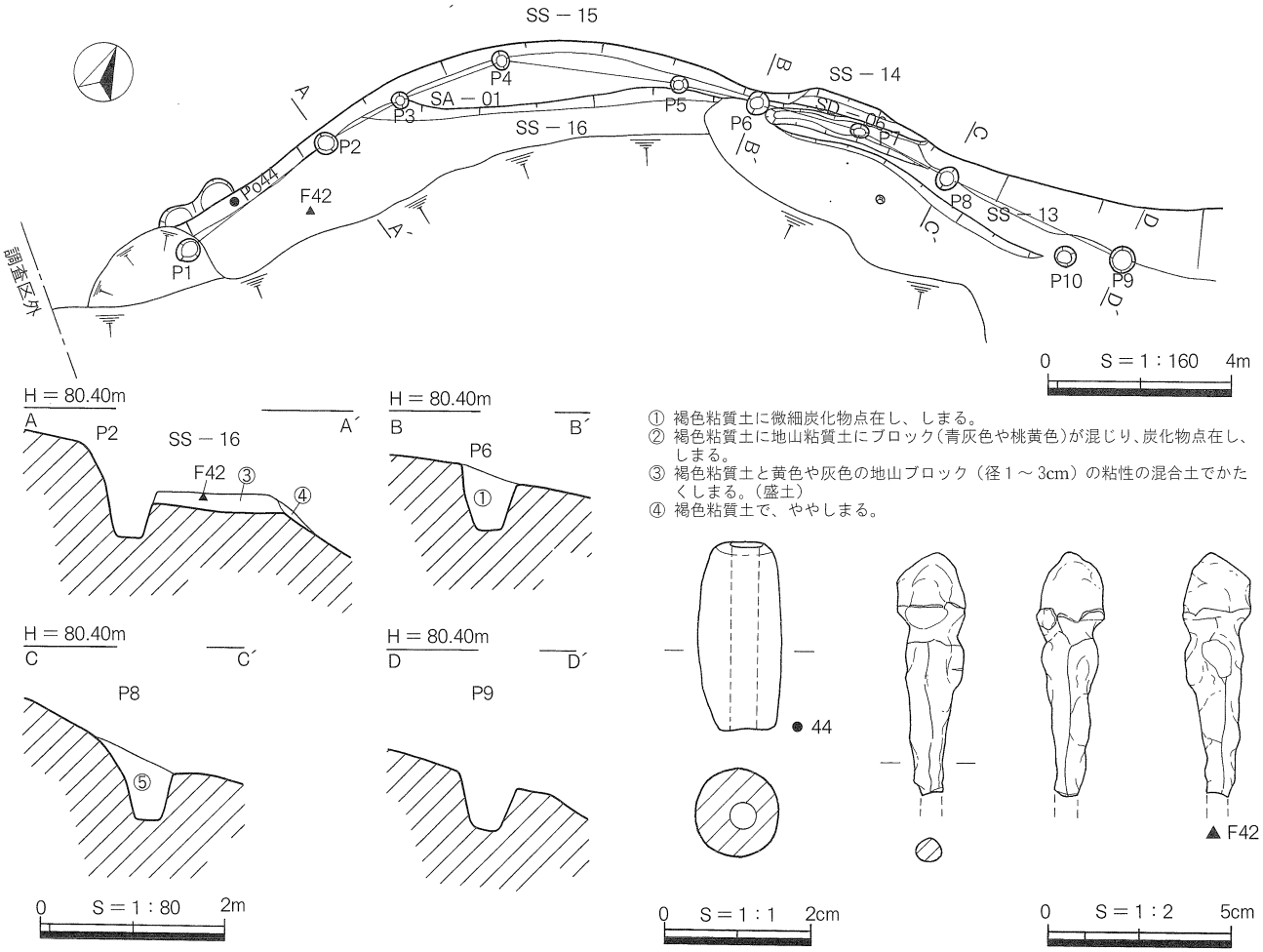
**位　置**　調査区中央から南西寄りに位置し、曲輪１の東～南東端に一部分が接する形で掘り込まれている。北東側でＳＳ－14、北側でＳＳ－15が隣接する。底面の平均標高は79.55ｍを測る。

**形　態**　上側を掘り込み、平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.50ｍを残す。平坦面の規模は長辺（南西－北東長）11.20ｍ、短辺（北西－南東長）1.80ｍを測る。この平坦面には南端にＳＫ－22、中央から南側にかけてＳＳ－17の他にＰ17(57×56－32)cm、Ｐ18(30×28－20)cm、Ｐ21(55×32－10)cmが掘り込まれている。また、壁際にはＳＡ－01のピットが掘り込まれている。土層断面観察（Ａ－Ａ′）をみると本遺構掘削後、底面には盛土を施している様子が窺え、少なくとも２回に亘り本遺構が営まれていたものと考えられる。




挿図28　　第16段状遺構出土遺物実測図（2）

時　期　　埋土中から土師器細片や土錘（44）、石匙状石器（S 10）、盛土中から鉄釘（F 42）が出土している。形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設の可能性が高い。

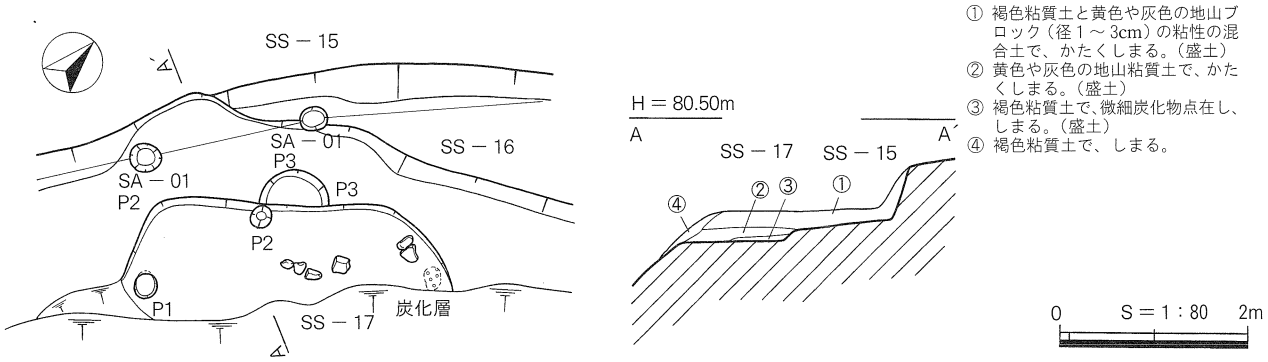



挿図 27　　第 1 柵列遺構図、第 16 段状遺構遺構図・出土遺物実測図（1）

第 17 段状遺構（ＳＳ－17・挿図 26、29・図版 10）

位　置　　調査区中央から南西寄りに位置し、ＳＳ－16 の底面に掘り込まれている。底面の平均標高は 79.20 m を測る。

形　態　　上側を「コの字」状に掘り込み平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で 0.18 m を残す。平坦面の規模は長辺（南西－北東長）3.20 m、短辺（北西－南東長）1.15 m を測り、P 19（22 × 22 － 8）cm、P 20（28 × 26 － 10）cm が掘り込まれている。なお、平坦面中央




挿図 29　　第 17 段状遺構遺構図

から北東端にかけて大小合わせて５個の角礫（大きいもので24×12cm、小さいもので６×５cm）が底面に密着した状態で検出されている。また、焼土跡は平坦面北東端で楕円形状（30×25cm）に認められる。埋土をみると②層は埋め戻された可能性が高い。

時　期　　遺物は全く出土しなかったため、時期は不明である。

第18段状遺構（ＳＳ－18・図版16、17、18）

位　置　　調査区東端から南側に位置し、横堀状遺構の上側に隣接する。底面の平均標高は73.90ｍを測る。便宜上、段状遺構と呼称する。

形　態　　下側に隣接する横堀状遺構の形態に沿う形で急斜面の上側をＳ字形に掘り込み、いわゆる武者走り状の帯状の幅狭な平坦面を造成している。規模は長さ（検出面）41.00ｍ、最大幅1.40ｍを測る。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から、中世の山城を構成する施設と推定される。

第19段状遺構（ＳＳ－19・挿図64）

位　置　　調査区南端に位置し、第２堀切東側に隣接する。底面の平均標高は74.80ｍを測る。便宜上、段状遺構と呼称する。

形　態　　等高線に沿う形で、斜面上側を掘り込んで幅狭な平坦面を造成している。規模は長さ（検出面）10.80ｍ、最大幅1.05ｍを測る。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。

第１柵列（ＳＡ－01・挿図27）

位　置　　調査区中央からやや南西寄りに位置し、ＳＳ－14、ＳＳ－15、ＳＳ－16の側壁面に掘り込まれている。検出面の平均標高は79.30ｍを測る。

形　態　　曲輪１の東端から南東側にかけて地形に沿う形で弧状に掘り込まれたＳＳ－14、ＳＳ－15、ＳＳ－16それぞれの側壁面にいわゆる壁立式に掘り込まれた９本の柱穴である。規模はそれぞれＰ１（54×50－55）cm、Ｐ２（52×50－60）cm、Ｐ３（36×36－40）cm、Ｐ４（42×42－45）cm、Ｐ５（40×38－40）cm、Ｐ６（54×48－70）cm、Ｐ７（42×36－43）cm、Ｐ８（52×48－58）cm、Ｐ９（56×56－62）cmと深めに掘り込まれ、柱穴間距離はＰ１よりそれぞれ3.32ｍ、2.44ｍ、2.00ｍ、3.52ｍ、1.36ｍ、1.84ｍ、1.70ｍ、3.72ｍを測る。なお、段状遺構掘削後、底面側に盛土を施し、柱穴のうちＰ１、Ｐ２、Ｐ４では地がためをした後に掘り込まれている。

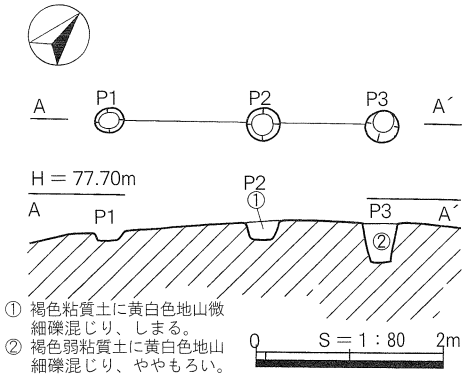
時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。

第２柵列（ＳＡ－02・挿図30）

位　置　　調査区東側、ＳＳ－10の南端平坦面に立地する。検出面の平均標高は77.45ｍを測る。

形　態　　ＳＳ－10南端のやや張り出した平坦面の東端に掘り込まれた３本の柱穴である。規模はそれぞれＰ１（30×26－12）cm、Ｐ２（36×34－20）cm、Ｐ３（36×32－32）cmを測り、柱穴間距離はＰ１から1.66ｍ、1.30ｍである。主軸はＮ－53°－Ｅをとる。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。




挿図30　　第２柵列遺構図

## 第４節　掘立柱建物跡

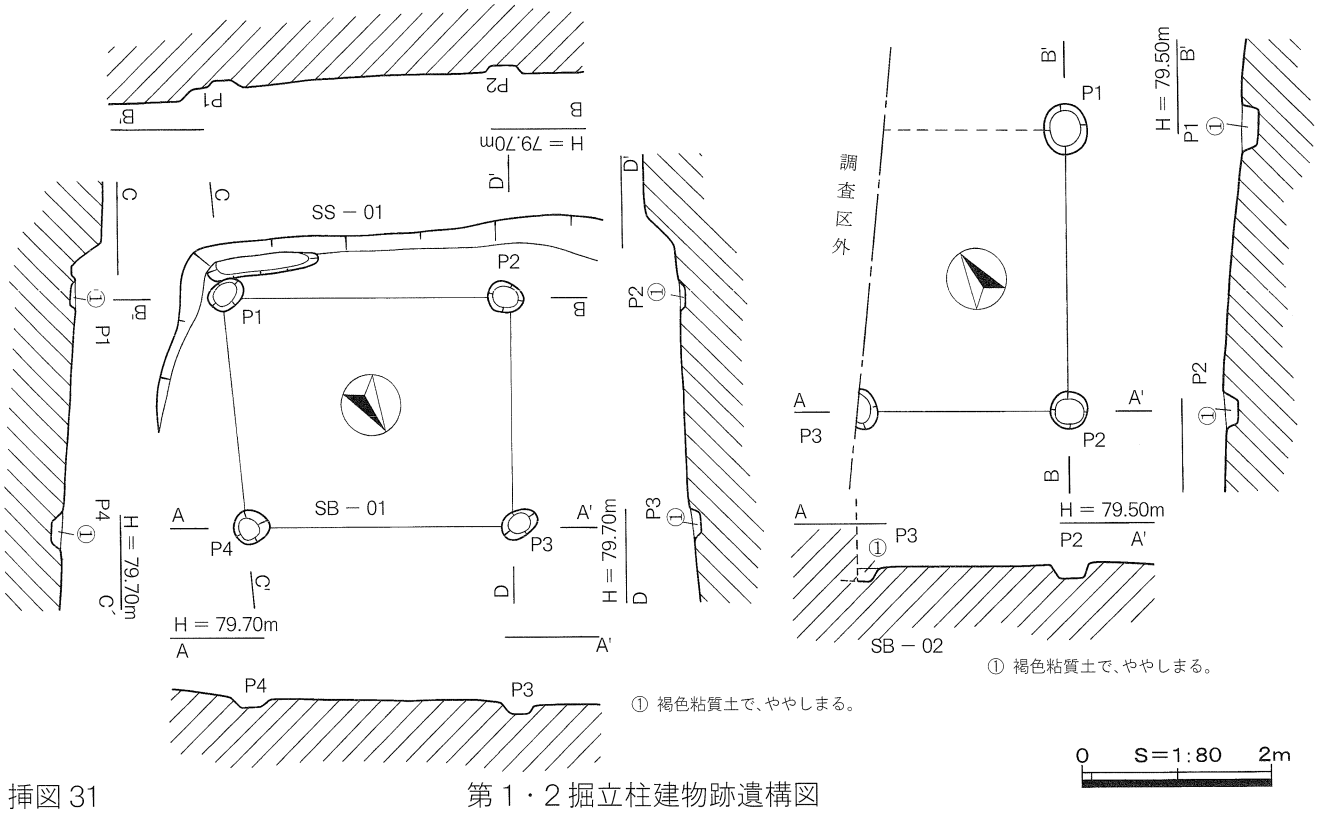
シアケ遺跡において検出された掘立柱建物跡は、曲輪１の北西側の調査区境界付近に２棟と、南東側に５棟、曲輪２の北東側に２棟、中央南東よりに６棟の合計15棟である。

### 第１掘立柱建物跡（ＳＢ－01・挿図31・図版７）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－01の平坦面、標高79.08ｍに立地する。北東側に0.70ｍ離れてＳＢ－02がある。

形　態　　柱の配置はやや歪な方形を呈し、桁行１間（3.00ｍ）×梁間１間（2.40ｍ）、床面積7.22㎡を測り、主軸はＮ－59°－Ｗをとる掘立柱建物跡である。柱穴は４本で規模はＰ１（40×32－9）、Ｐ２（40×33－6）、Ｐ３（40×28－9）、Ｐ４（37×36－11）cm、柱穴間距離はＰ１より3.00、2.40、2.90、2.50ｍを測る。柱穴内埋土は褐色粘質土である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。




挿図31　　第１・２掘立柱建物跡遺構図

### 第２掘立柱建物跡（ＳＢ－02・挿図31）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－01の平坦面、標高79.04ｍに立地し、ＳＢ－01の南東側に0.70ｍ離れて位置する。南東側の柱穴は調査区外へと続く。

形　態　　柱の配置は方形を呈し、桁行１間（3.00ｍ）×梁間１間（2.30ｍ）、床面積は推定で6.82㎡を測り、主軸はＮ－32°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は３本で規模はＰ１(54×46－20)、Ｐ２(39×38－14)、Ｐ３(推定44×34－14)cm、柱穴間距離はＰ１より3.00、2.30ｍを測る。柱穴内の埋土は褐色粘質土である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

### 第３掘立柱建物跡（ＳＢ－03・挿図32）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－04の平坦面、標高79.76ｍに立地し、ＳＤ－02、03を切り込み、ＳＢ－04と重複する。

形　態　　Ｐ２、Ｐ３に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると推定される。桁行２間（5.00ｍ）×梁間１間（1.76ｍ）、床面積は推定8.00㎡を測り、主軸はＮ－36°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は４本で、規模はＰ１（64×54－56）、Ｐ２（56×40－60）、Ｐ３（48×43－68）、Ｐ４（47×40－16）cm、柱穴間距離はＰ１より2.50、2.50、1.76ｍを測る。柱穴内には褐色粘質土に微細炭化物が点在する埋土がみられた。

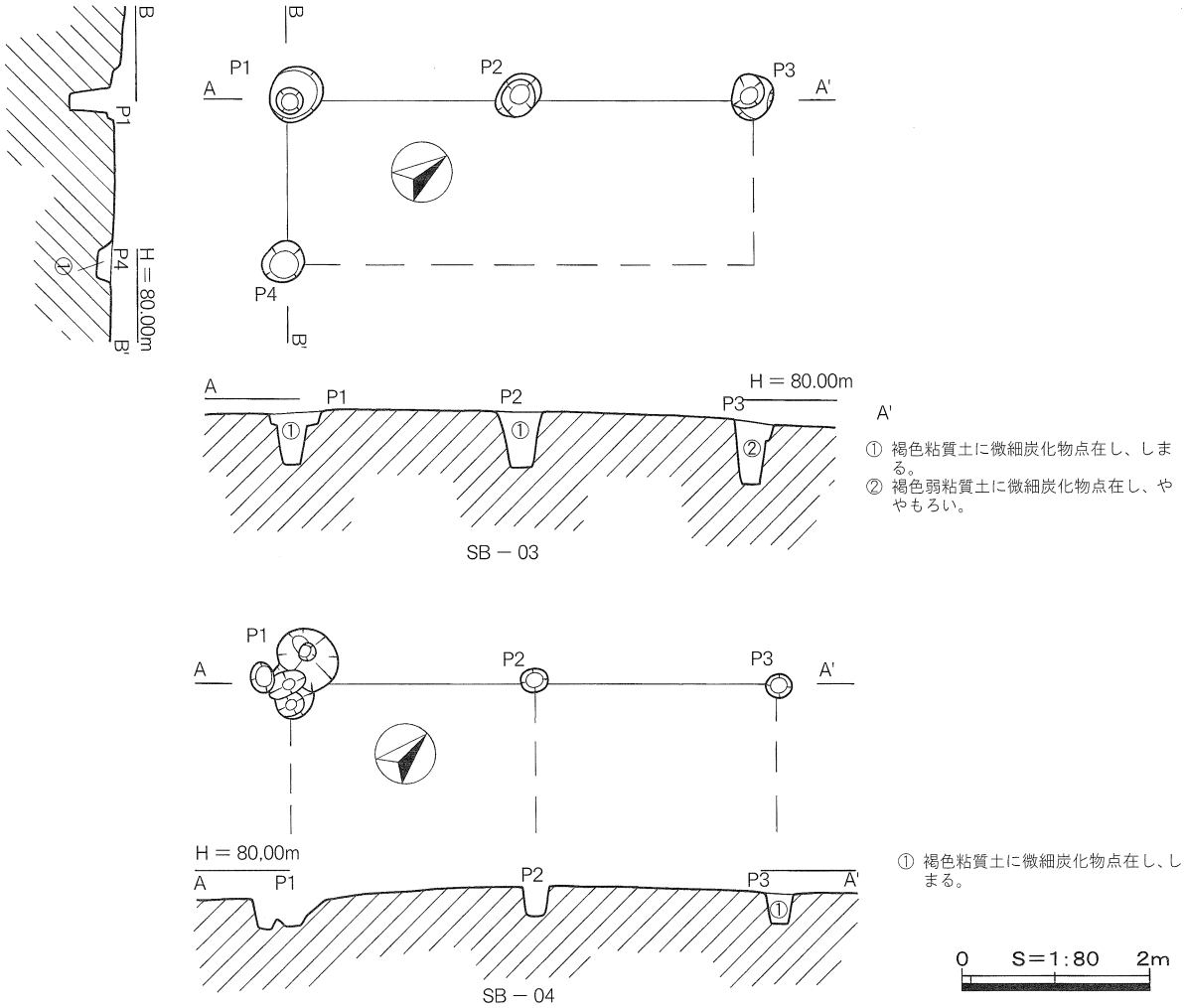
時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第４掘立柱建物跡（ＳＢ－04・挿図32）

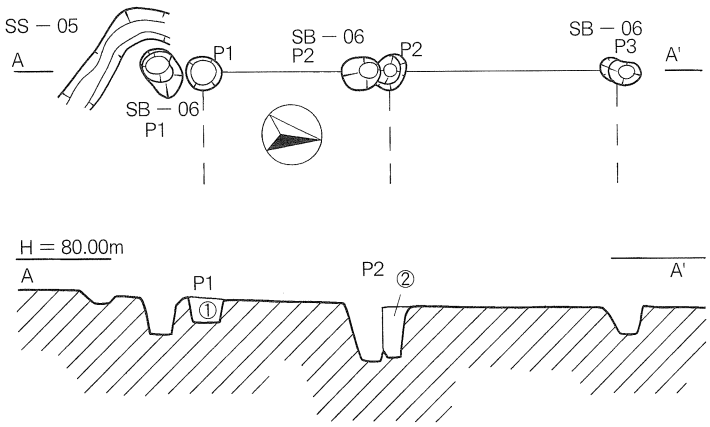
位　置　　調査区中央より北西側のＳＳ－04の平坦面、標高79.80ｍに立地し、ＳＤ－02を切り込み、ＳＢ－03と重複する。

形　態　　Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると推定される。桁行２間（5.20ｍ）、梁間及び床面積は不明で、主軸はＮ－43°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は３本で、規模はＰ１（40×21－38）、Ｐ２（30×26－33）、Ｐ３（36×34－34）cm、柱穴間距離はＰ１から2.64、2.56ｍを測る。柱穴内には褐色質土に微細炭化物が点在する埋土がみられた。

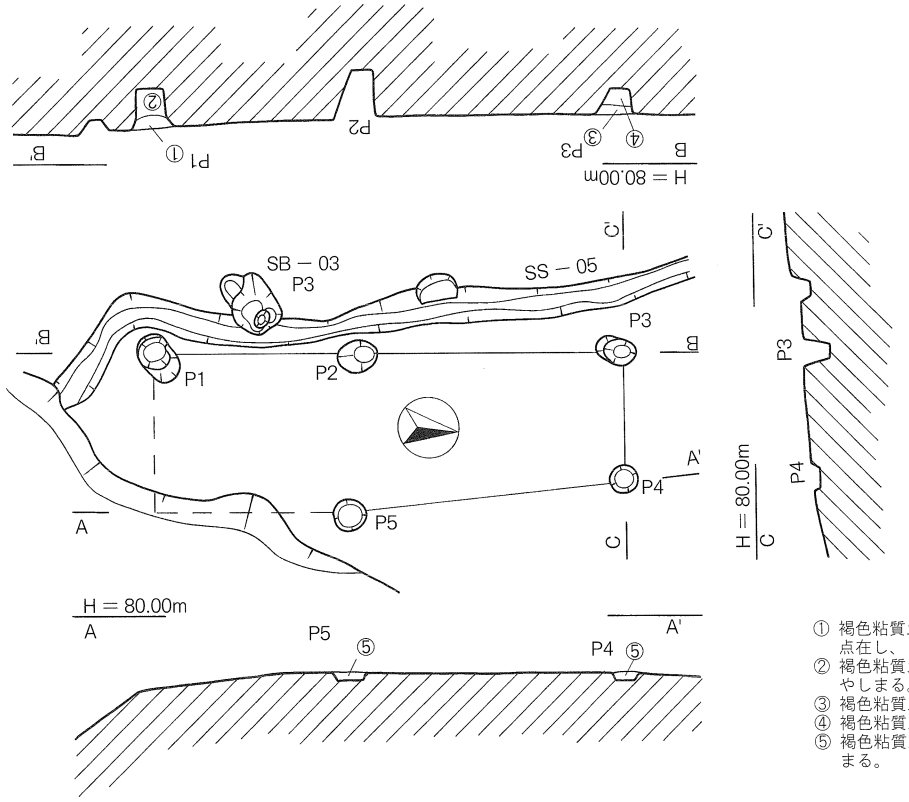
時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。



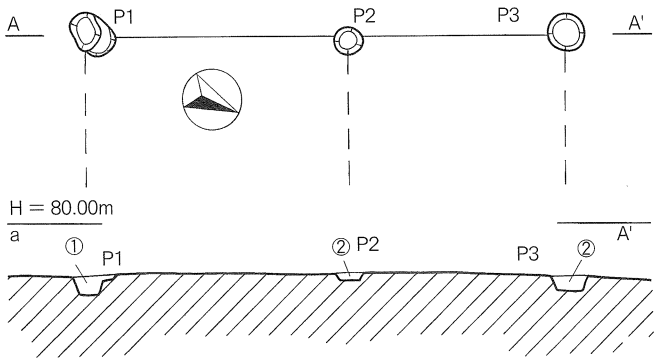

挿図32　　第３・４掘立柱建物跡遺構図




① 褐色粘質土に青灰色地山ブロック（径1～2cm）点在し、しまる。
② 褐色粘質土に地山微細礫混じり、炭化物も点在し、しまる。




① 褐色粘質土に青灰色地山ブロック（径1～2cm）点在し、しまる。
② 褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物点在し、ややしまる。
③ 褐色粘質土に微細炭化物点在し、ややしまる。
④ 褐色粘質土に地山微細礫点在し、しまる。
⑤ 褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物点在し、しまる。




① 褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物、焼土ブロック点在し、しまる。
② 褐色粘質土に微細桃黄色地山礫、微細炭化物点在し、しまる。

0　S＝1:80　2m

挿図33　第5・6・7掘立柱建物跡遺構図

第５掘立柱建物跡（ＳＢ－05・挿図33）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－05の平坦面、標高79.50ｍに立地し、ＳＢ－06によって切られる。

形　態　　Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると推定される。Ｐ３の柱穴はＳＢ－06の柱穴と共有する。桁行２間（4.40ｍ）、梁間及び床面積は不明であるが、主軸はＮ－９°－Ｗをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は３本で、規模はＰ１（40×36－26）、Ｐ２（残存40×32－54）cm、Ｐ３（ＳＢ－06と共有）、柱穴間距離はＰ１から2.00、2.40ｍを測る。柱穴内には褐色粘質土に地山微細礫、炭化物、焼土の点在する埋土がみられた。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第６掘立柱建物跡（ＳＢ－06・挿図33）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－05の平坦面、標高79.48ｍに立地し、ＳＢ－06を切り込む。

形　態　　Ｐ１に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は歪な長方形を呈すると考えられる。桁行２間（5.00ｍ）×梁間１間（1.70ｍ）、床面積は推定で7.94㎡を測り、主軸はＮ－８°－Ｗをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は５本で、規模はＰ１（54×36－44）、Ｐ２（44×32－52）、Ｐ３（42×26－30）、Ｐ４（30×28－10）、Ｐ５（34×34－９）cm、柱穴間距離はＰ１から2.26、2.74、1.38、2.94ｍを測る。柱穴内には褐色粘質に地山微細礫、微細炭化物などが含まれる埋土がみられた。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第７掘立柱建物跡（ＳＢ－07・挿図33）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－06の平坦面、標高79.48ｍに立地し、ＳＢ－07と重複する。

形　態　　Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると考えられる。桁行２間（5.10ｍ）、梁間及び床面積は不明であるが、主軸はＮ－26°－Ｗをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は３本で、規模はＰ１（50×36－22）、Ｐ２（30×28－８）、Ｐ３（40×37－18）cm、柱穴間距離はＰ１から2.80、2.30ｍを測る。柱穴内には褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物、焼土ブロックが含まれる埋土がみられた。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第８掘立柱建物跡（ＳＢ－08・挿図34・図版15）

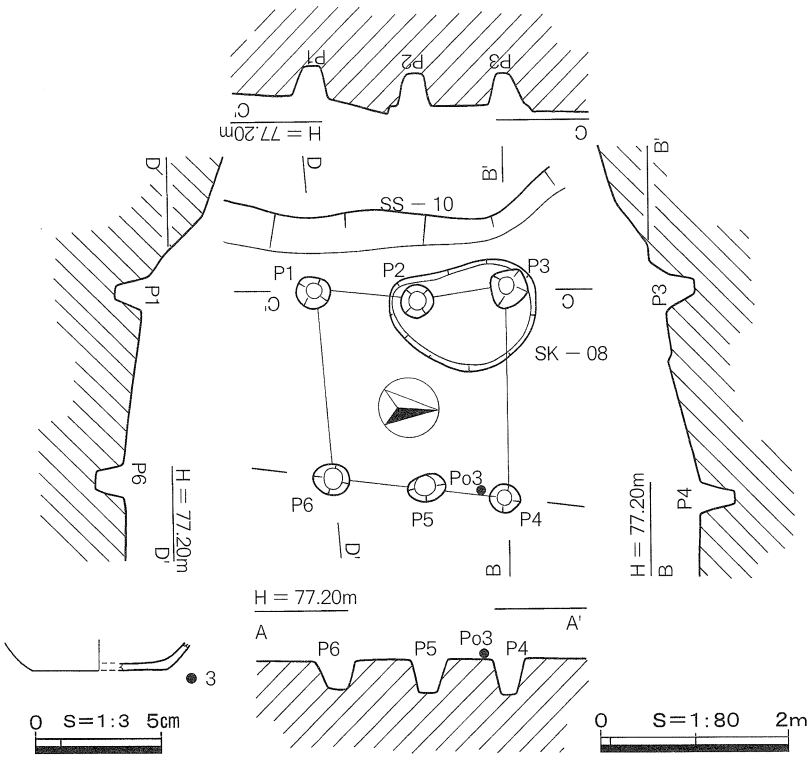
位　置　　調査区中央より東側のＳＳ－10の平坦面、標高76.82ｍに立地し、ＳＢ－09、ＳＫ－08と重複し、ＳＫ－08に切り込まれている。

形　態　　柱の配置は歪な方形を呈し、桁行１間（2.24ｍ）×梁間２間（2.00ｍ）、床面積5.04㎡を測り、主軸はＮ－85°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は６本で、規模は

P１(37×34－34)、P２(35×34－34)、P３(40×40－34)、P４(31×31－38)、P５(40×27－36)、P６(40×32－32)cm、柱穴間距離はP１から1.10、0.95、2.25、0.85、1.00、2.00ｍを測る。

遺　物　　遺物はP４の北側上面部の肩付近から土師器の皿の底部（３）が出土している。

時　期　　出土遺物から本掘立柱建物跡の時期は中世と思われる。




挿図34　　第８掘立柱建物跡遺構図・出土土器実測図

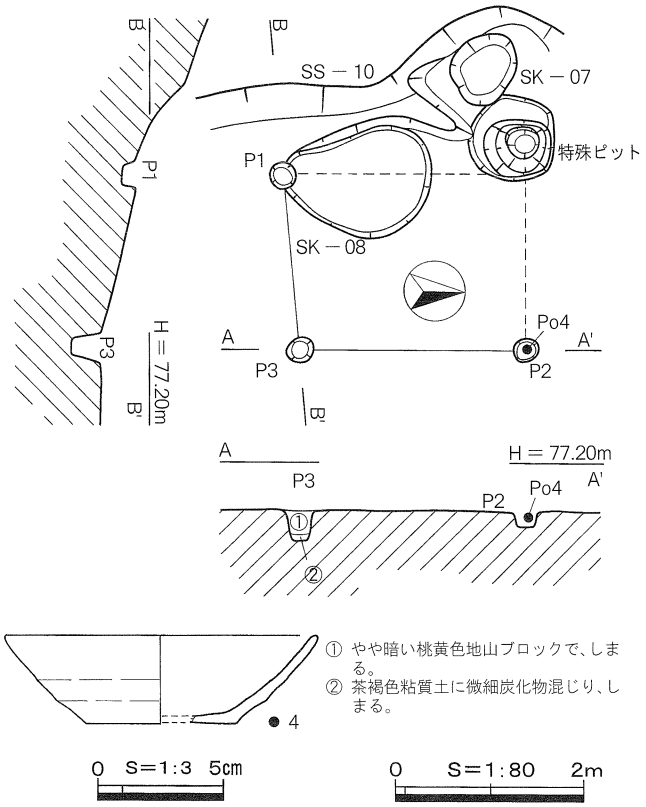
第９掘立柱建物跡（ＳＢ－09・挿図35・図版15）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－10の平坦面、標高76.70ｍに立地し、ＳＢ－08、ＳＫ－08と重複する。

形　態　　柱の配置は長方形を呈し、桁行１間（2.40ｍ）×梁間１間（1.90ｍ）、床面積は推定4.64㎡測り、主軸はＮ－１°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は３本で、規模はＰ１（27×26－15）、Ｐ２（26×24－16）、Ｐ３（29×26－31）cm、柱穴間距離はＰ１から2.40、1.90ｍを測る。Ｐ３の柱穴内埋土には上位に桃黄色地山ブロック、下位に茶褐色粘質土の堆積がみられた。

遺　物　　Ｐ４内から土師器の坏（４）が出土している。

時　期　　出土遺物から本掘立柱建物跡の時期は14世紀ごろと思われる。




挿図35　第９掘立柱建物跡遺構図・出土土器実測図

第10掘立柱建物跡（ＳＢ－10・挿図36）

位　置　　調査区中央より東側のＳＳ－10の平坦面、標高77.40ｍに立地し、ＳＢ－11、ＳＢ－12、ＳＢ－13と重複する。

形　態　　Ｐ１に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると考えられる。桁行２間（4.16ｍ）×梁間１間（1.70ｍ）、床面積は6.51㎡を測り、主軸方向はＮ－32°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は５本で、規模はＰ１(33×33－22)、Ｐ２(50×43－22)、Ｐ３（37×32－30)、Ｐ４（42×40－９)、Ｐ５（62×56－８）cm、柱穴間距離はＰ１から2.00、2.16、1.70、2.30ｍを測る。柱穴内には褐色粘質土、茶褐色粘質土の埋土がみられた。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第11掘立柱建物跡（ＳＢ－11・挿図36）

位　置　　調査区中央より東側のＳＳ－10の平坦面、標高77.67ｍに立地し、ＳＢ－10、ＳＢ－12、ＳＢ－13と重複する。

形　態　　柱の配置は歪な長方形を呈し、桁行１間（2.46ｍ）×梁間１間（1.80ｍ）、床面積3.93㎡を測り、主軸はＮ－31°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は４本で、規模はＰ１（33×26－11)、Ｐ２（33×30－14)、Ｐ３（68×49－11)、Ｐ４（44×38－９）cm、柱穴間距離はＰ１から2.20、1.80、2.46、1.60ｍを測る。柱穴内には茶褐色粘質土、褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物が点在する埋土がみられた。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第12掘立柱建物跡（ＳＢ－12・挿図36）

位　置　　調査区中央より東側のＳＳ－10の平坦面、標高77.44ｍに立地し、ＳＢ－10、ＳＢ－11、ＳＢ－13と重複する。

形　態　　柱の配置は歪な方形を呈し、桁行１間（2.46ｍ）×梁間１間（2.05ｍ）、床面積4.89㎡を測り、主軸はＮ－35°－Ｗをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は４本で、規模はＰ１（40×38－20)、Ｐ２（34×34－22)、Ｐ３（46×38－17)、Ｐ４（41×36－14）cm、柱穴間距離はＰ１より2.10、2.46、2.28、2.05ｍを測る。柱穴内には褐色粘質土の埋土がみられた。

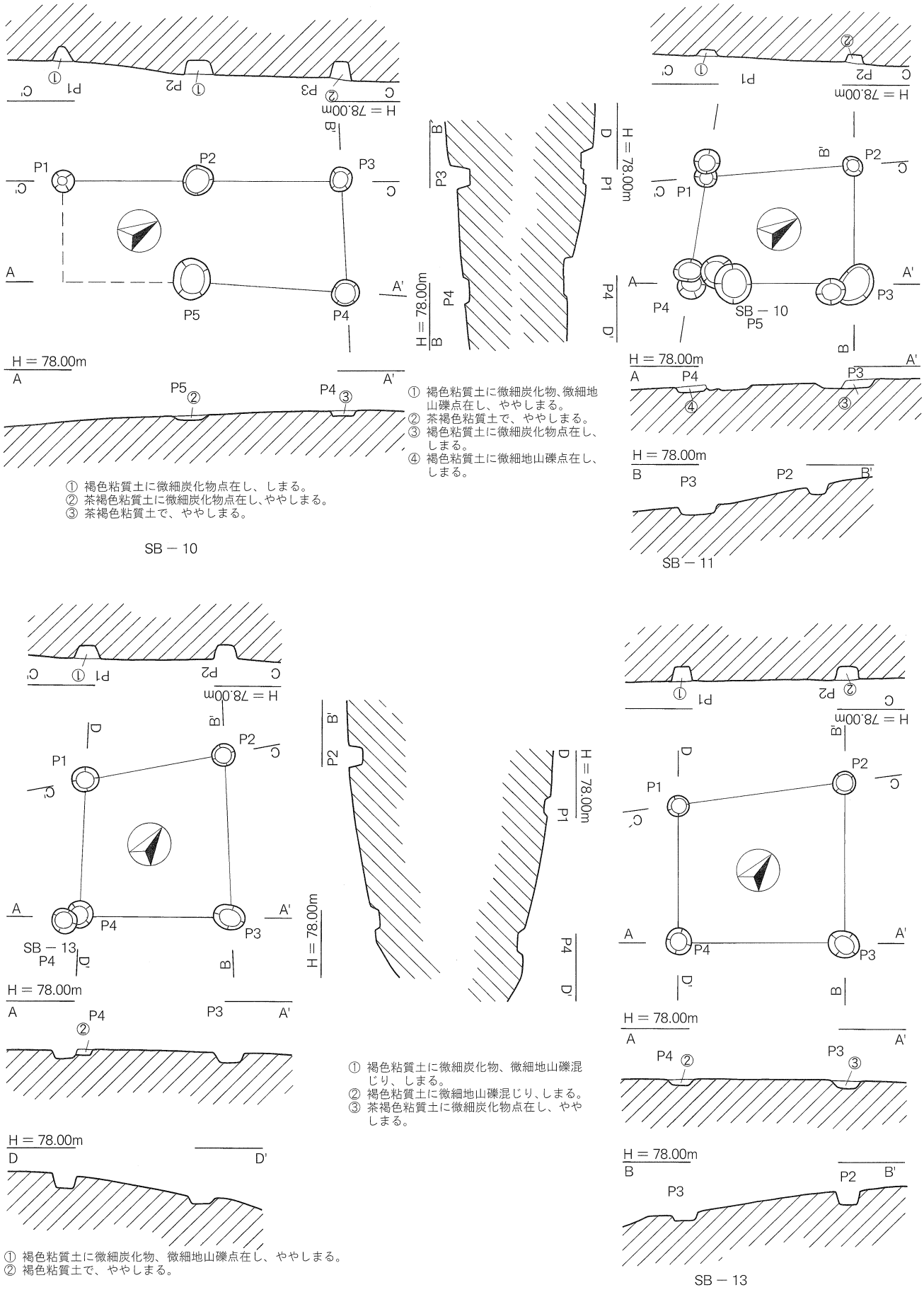
時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第13掘立柱建物跡（ＳＢ－13・挿図36）

位　置　　調査区中央より東側のＳＳ－10の平坦面、標高77.41ｍに立地し、ＳＢ－10、ＳＢ－11、ＳＢ－12と重複する。

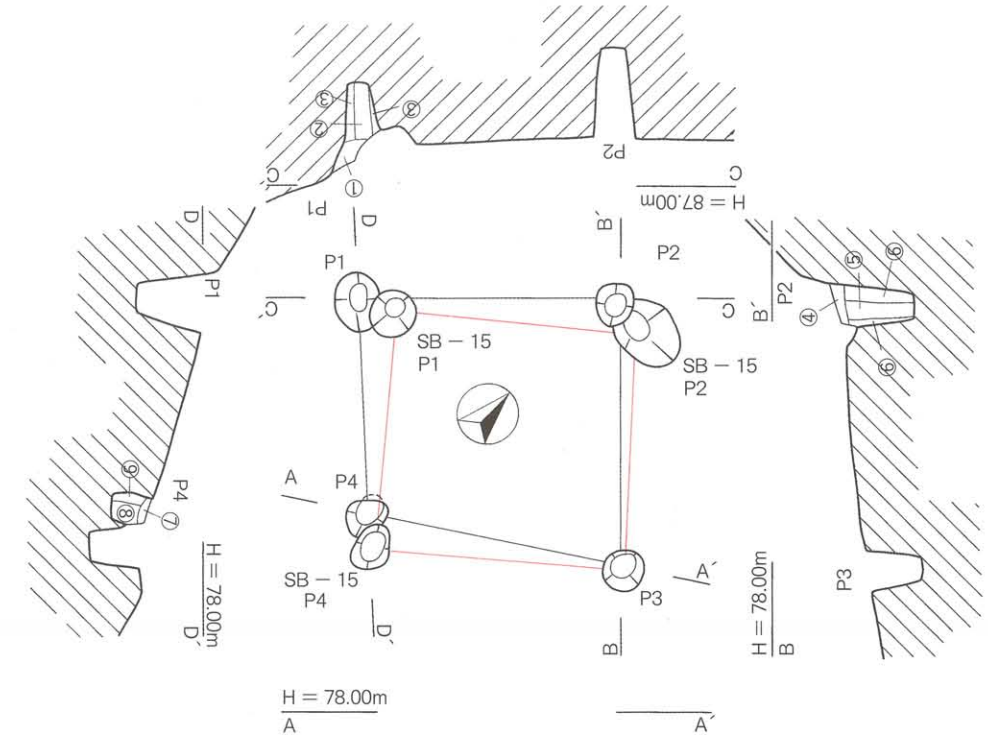
形　態　　柱の配置は歪な方形を呈し、桁行１間（2.50ｍ）×梁間１間（2.42ｍ）、床面積5.60㎡を測り、主軸はＮ－49°－Ｅをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は４本で、規模はＰ１（32×31－24)、Ｐ２（34×34－21)、Ｐ３（48×40－11)、Ｐ４（40×38－９）cm、柱穴間距離はＰ１より2.50、2.42、2.50、2.07ｍを測る。柱穴内には褐色粘質土、茶褐色粘質土に地山礫、微細炭化物が点在する埋土が見られた。

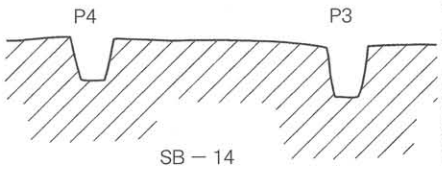
時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。



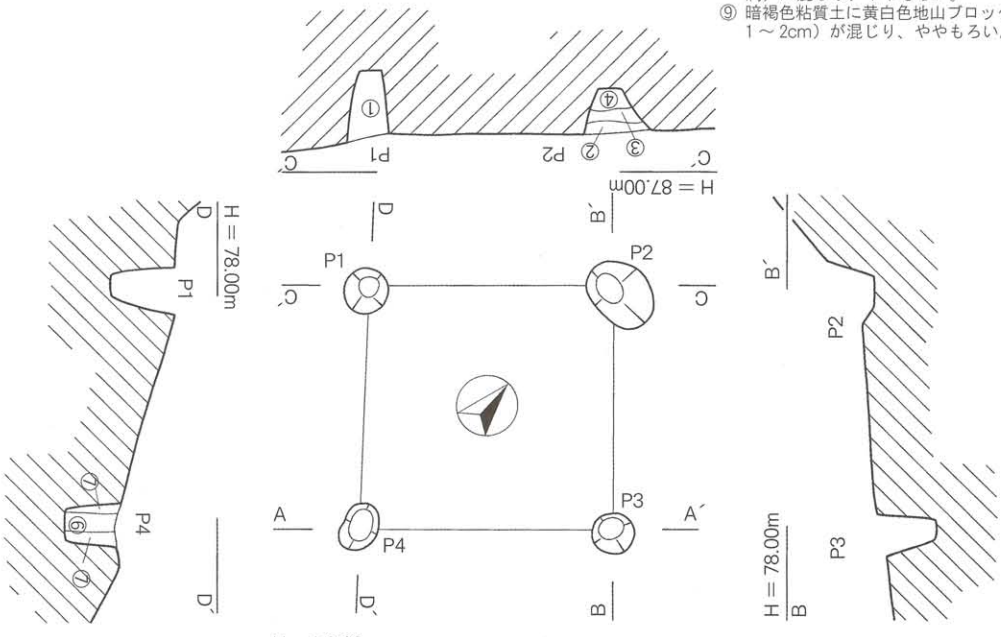

挿図 36　第 10・11・12・13 掘立柱建物跡遺構図

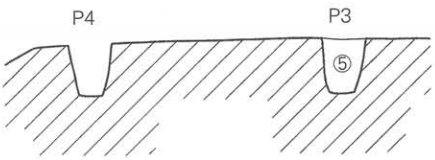
0　S=1:80　2m




① やや紫がかった粘質土に地山ブロック（茶色・黄白色で径1cm未満）が点在し、しまる。
② 褐色腐植質（径2～3cm）の黄白色地山ブロックが点在し、ややもろい。
③ 黄白色地山ブロックで、しまる。
④ 褐色粘質土に微細地山礫多量に混じり、しまる。
⑤ 褐色腐植質土で、もろい。
⑥ 茶色粘質土と黄白色地山微細礫の混合土で、しまる。
⑦ 褐色粘質土に黄白色地山ブロック（径2～3cm）が点在し、しまる。
⑧ 暗褐色腐植質粘質土に青白色、茶色地山ブロック（径1cm未満）が混じり、ややもろい。
⑨ 暗褐色粘質土に黄白色地山ブロック、茶色粘質土ブロック（径1～2cm）が混じり、ややもろい。




① 褐色粘質土に黄白色地山微細礫混じり、微細炭化物点在し、しまる。
② 少量の褐色粘質土と多量の黄白紫色地山ブロック（径1cm未満）の混合土で、ややもろい。
③ 少量の褐色粘質土に茶色地山ブロックの混合土でしまる。
④ ②に炭化物点在し、地山ブロックの径1～3cmとやや大きい。
⑤ 褐色粘質土ブロックと黄白色地山ブロックの混合土で、やわらかい。
⑥ 褐色腐植質粘質土に黄白色地山微細礫混じり、ややもろい。
⑦ 少量の暗褐色粘質土と多量の黄白色地山礫（径1cm未満）の混合土で、かたくしまる。

0　S＝1:80　2m

挿図37　第14・15掘立柱建物跡遺構図

第14掘立柱建物跡（ＳＢ－14・挿図37・図版９）

位　置　　調査区中央より東側のＳＳ－10の平坦面、標高77.24ｍに立地し、ＳＢ－15に切り込まれる。

形　態　　柱の配置は歪な方形を呈し、桁行１間（2.84ｍ）×梁間１間（2.78ｍ）、床面積6.93㎡を測り、主軸はN－46°－Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は４本で、規模はＰ１（63×50－100）、Ｐ２（44×40－100）、Ｐ３（47×42－66）、Ｐ４（45×36－57）cm、柱穴間距離はＰ１より2.78、2.84、2.73、2.28ｍを測る。柱穴内埋土の観察から柱痕跡を確認しており、掘り方の埋土は、黄白色地山ブロック、茶色粘質土系、暗褐色粘質土系が主体となっている。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第15掘立柱建物跡（ＳＢ－15・挿図37・図版９）

位　置　　調査区中央より東側のＳＳ－10の平坦面、標高77.24に立地し、ＳＢ－14を切り込まれている。

形　態　　柱の配置は方形を呈し、桁行１間（2.70ｍ）×梁間１間（2.60ｍ）、床面積6.83㎡を測り、主軸はN－39°－Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は４本で、規模はＰ１（48×48－78）、Ｐ２（78×60－48）、Ｐ３（44×43－58）、Ｐ４（50×36－54）cm、柱穴間距離はＰ１より2.58、2.60、2.70、2.60ｍを測る。Ｐ４の柱穴内埋土の観察から柱痕跡を確認しており、掘り方埋土は暗褐色粘質土と黄褐色地山礫との混合土がみられた。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。なお、ＳＢ－10～15の６棟はＳＳ－10との関連性から、中世の山城跡に伴うものと推測される。

| 遺構名 | 桁行×梁間 | 桁行長（m） | 梁間（m） | 床面積（m²） | 長軸方向 |
|---|---|---|---|---|---|
| SB－01 | １間×１間 | 3.00 | 2.40 | 7.22 | N－59°－W |
| SB－02 | １間×１間 | 3.00 | 2.30 | （推）6.82 | N－32°－E |
| SB－03 | ２間×１間 | 5.00 | 1.76 | （推）8.80 | N－36°－E |
| SB－04 | ２間×不明 | 5.20 | － | － | N－43°－E |
| SB－05 | ２間×不明 | 4.40 | － | － | N－9°－W |
| SB－06 | ２間×１間 | 5.00 | 1.70 | （推）7.94 | N－8°－W |
| SB－07 | ２間×不明 | 5.10 | － | － | N－26°－W |
| SB－08 | １間×２間 | 2.00 | 2.24 | 5.04 | N－85°－E |
| SB－09 | １間×１間 | 2.40 | 1.90 | （推）4.64 | N－1°－W |
| SB－10 | ２間×１間 | 4.16 | 1.70 | 6.51 | N－32°－E |
| SB－11 | １間×１間 | 2.46 | 1.80 | 3.93 | N－31°－E |
| SB－12 | １間×１間 | 2.46 | 2.05 | 4.89 | N－35°－W |
| SB－13 | １間×１間 | 2.50 | 2.42 | 5.60 | N－49°－E |
| SB－14 | １間×１間 | 2.84 | 2.72 | 6.93 | N－46°－W |
| SB－15 | １間×１間 | 2.70 | 2.60 | 6.83 | N－39°－W |

挿表３　掘立柱建物跡計測表

## 第５節　溝状遺構

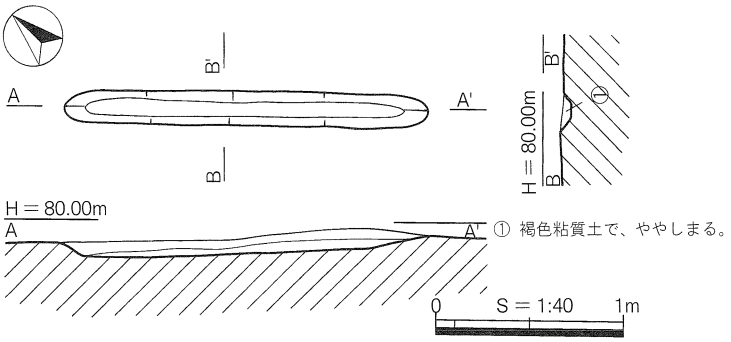
シアケ遺跡において検出された溝状遺構は、曲輪１の南西側に１条、南東側に２条、曲輪２の西側に３条、北東側に１条の合計７条である。

### 第１溝状遺構（ＳＤ－01・挿図38）

位　置　　調査区中央より西側の平坦面に立地し、標高79.80 mに立地する。北西側から南西側に延びる。

形　態　　平面形は直線状を呈す。規模は長さ1.94 m、幅0.17～0.19 m、深さ0.04 mを測り、断面形は逆梯形を呈す。埋土は褐色粘質土でしまり、自然堆積であると考えられる。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。




挿図38　　第１溝状遺構遺構図

### 第２溝状遺構（ＳＤ－02・挿図12）

位　置　　調査区中央よりやや北西側のＳＳ－04平坦面に立地し、標高79.80 mに立地する。等高線に沿うような形で北東から南西方向に延びる。

形　態　　平面形は直線状を呈す。規模は長さ3.61 m、幅0.16～0.26 m、深さ0.18 mを測り、断面形は逆梯形を呈する。ＳＢ－04のＰ２と切りあい関係にあるが、溝が古い遺構である。埋土は褐色粘質土でしまり、自然堆積であると考えられる。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

### 第３溝状遺構（ＳＤ－03・挿図12）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－03の平坦面、ＳＳ－03のテラス面、標高79.85 mに立地する。等高線に沿うような形で南北方向に延びる。

形　態　　平面形は歪な直線状を呈する。規模は長さ3.28 m、幅0.35～0.45 m、深さ0.20 mを測り、断面形は逆梯形を呈する。ＳＳ－03の平坦面と切りあい関係にあるが、ＳＤ－03のほうが新しい。埋土は褐色粘質土で、自然堆積であると考えられる。

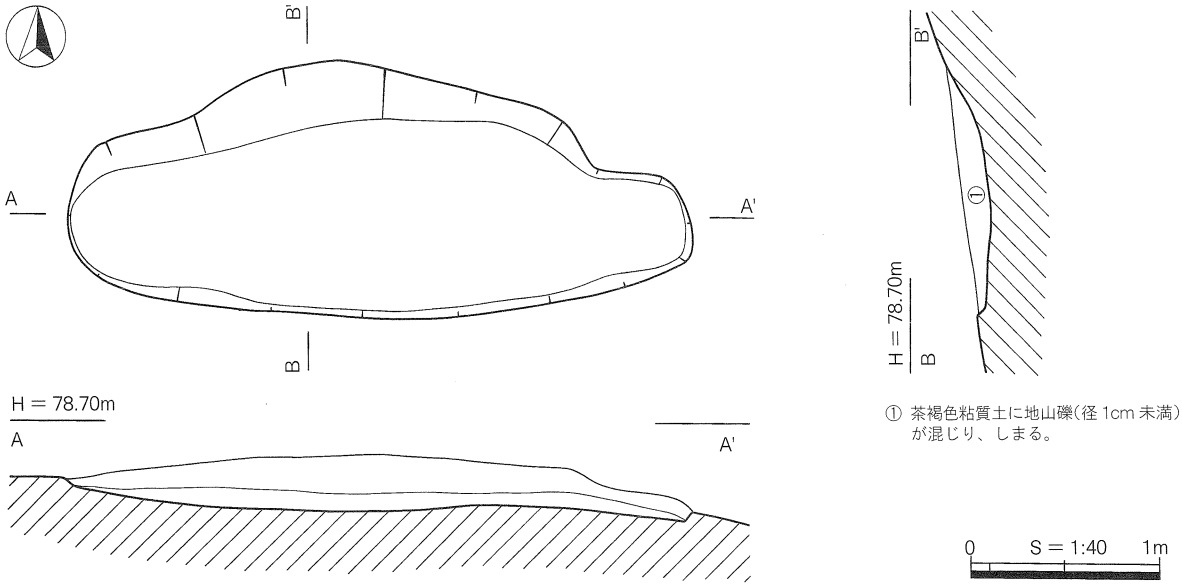
時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

### 第４溝状遺構（ＳＤ－04・挿図39・図版10）

位　置　　調査区中央より、やや南西側のＳＳ－07の平坦面、標高78.40 mに立地する。幅の広い溝で、等高線に沿うように東西方向に延びる。

形　態　　平面形は紡錘形を呈する。規模は長さ3.30 m、幅0.52～1.35 m、深さ0.19 mを測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は茶褐色粘質土に地山礫を含み、自然堆積であると考えられる。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、立地条件等から山城跡に伴う施設と推定される。




挿図 39　　第 4 溝状遺構遺構図

第 5 溝状遺構（ＳＤ－ 05・挿図 40・図版 10）

位　置　　調査区中央より北東側のＳＳ－ 10 の平坦面、標高 77.28 m に立地する。ＳＫ－ 09 を切り込み、等高線に沿うように東西方向に延びる。

形　態　　平面形は直線状を呈する。規模は長さ 22.0 m、幅 0.42 ～ 0.52 m、深さ 0.11 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は褐色粘質土に地山礫、微細炭化物混じりで、自然堆積であると考えられる。

時　期　　遺物は出土しなかった。切り合い関係から、時期はＳＫ－ 09 より新しく、立地条件等から山城跡に伴う施設と推定される。

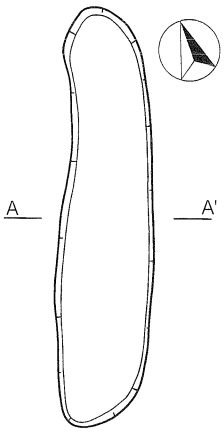
第 6 溝状遺構（ＳＤ－ 06・挿図 24・図版 9）

位　置　　調査区中央より、やや西側のＳＳ－ 13 の平坦面、標高 79.51 m に立地する。東西方向に等高線に沿うように延びる。

形　態　　平面形は直線状を呈する。規模は長さ 3.70 m、幅 0.31 ～ 0.48 m、深さ 0.14 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は灰褐色粘質土に微細炭化物混じりで、自然堆積と考えられる。

遺　物　　埋土上位より、鉄製品の釘（Ｆ 40）が出土している。

時　期　　ＳＳ－ 13 に付設されたものと考えられ、時期は中世の山城跡に伴うものと推定される。

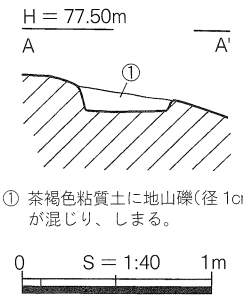



第 7 溝状遺構（ＳＤ－ 07・挿図 25）

位　置　　調査区中央より、やや西側のＳＳ－ 14 の側壁際平坦面に立地する。標高 79.11 m に立地する。東西方向に等高線に沿うように延びる。

形　態　　平面形は緩やかな弧状を呈する。規模は 2.91 m、幅 0.12 ～ 0.18 m、深さ 0.06 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は灰色粘質土に微細炭化物が点在するものがみられた。

時　期　　ＳＳ－ 14 に付設されたものと考えられ、時期は中世の山城跡に伴うものと推定される。




挿図 40 第 5 溝状遺構遺構図

| 遺構名 | 平面形 | 規模（m） | 遺構名 | 平面形 | 規模（m） |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＤ－01 | 直線状 | 1.94 × 0.19 － 0.04 | ＳＤ－05 | 直線状 | 2.20 × 0.52 － 0.11 |
| ＳＤ－02 | 直線状 | 3.61 × 0.26 － 0.18 | ＳＤ－06 | 直線状 | 3.70 × 0.48 － 0.14 |
| ＳＤ－03 | 歪な直線状 | 3.28 × 0.45 － 0.20 | ＳＤ－07 | 緩やかな弧状 | 2.91 × 0.18 － 0.06 |
| ＳＤ－04 | 紡錘形 | 3.30 × 1.35 － 0.19 | | | |

挿表４　溝状遺構計測表

## 第６節　土坑

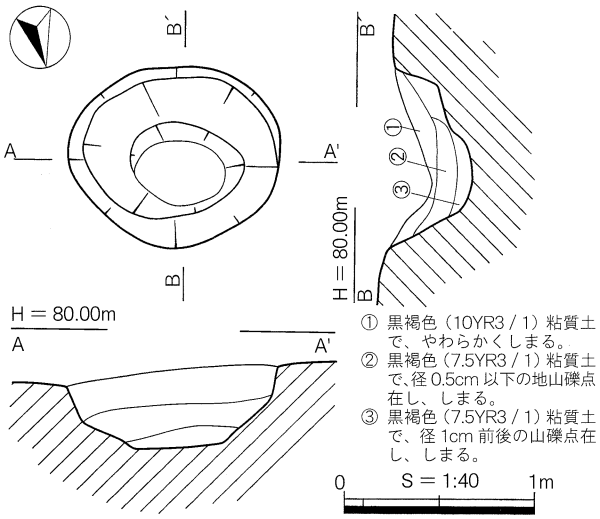
シアケ遺跡において検出された土坑は、曲輪１の西側から７基、曲輪２の南西側から２基、中央から13基、北東側から１基の合計23基である。

### 第１土坑（ＳＫ－01・挿図41・図版３、10）

位　置　　調査区中央より南東側、ＳＸ－01南側の平坦面で検出された。ＳＫ－05の西側1.30ｍに位置する。検出面での標高は79.82ｍを測る。

形　態　　平面形は円形をなし、主軸はＮ－77°－Ｗをとる。上縁部の長径は1.11ｍ、短径は0.96ｍで、深さは0.44ｍを測る。断面形は段をもつお碗形で、底面形は楕円形を呈する。長径0.47ｍ、短径は0.39ｍを測る。埋土は３層に分層され黒褐色土系の粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

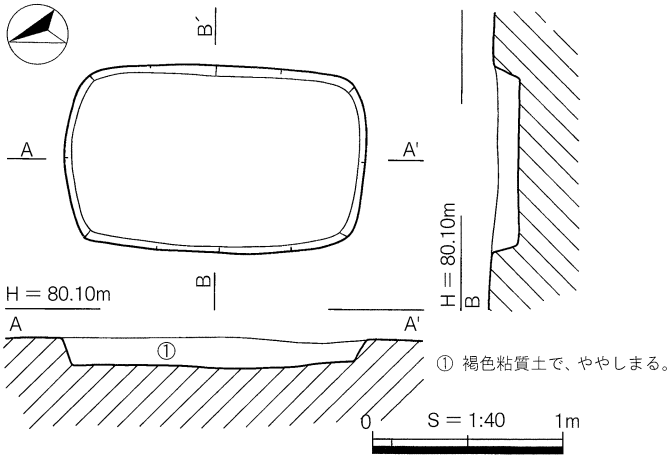



挿図41　　第１土坑遺構図

### 第２土坑（ＳＫ－02・挿図42）

位　置　　調査区中央より北西側、暖斜面部で検出された。ＳＫ－03の南西側3.50ｍに位置する。検出面での標高は79.95ｍを測る。

形　態　　平面形は隅丸長方形をなし、主軸はＮ－17°－Ｅをとる。上縁部の長径は1.59ｍ、短径は1.00ｍで、深さは0.15ｍを測る。断面形は逆梯形で、底面形は長方形を呈し、平坦である。長径は1.52ｍ、短径は0.89ｍを測る。埋土は１層で褐色粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。




挿図42　　第２土坑遺構図

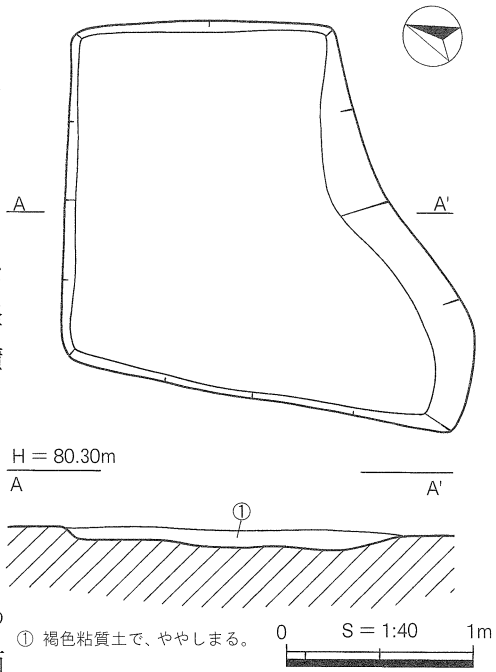
時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第３土坑（ＳＫ－03・挿図43）

位　置　　調査区中央より北側、暖斜面部で検出された。ＳＫ－02の北側3.50ｍに位置する。検出面での標高は80.05ｍを測る。

形　態　　平面形は長方形をなし、主軸はＮ－69°－Ｅをとる。上縁部長径は2.00ｍ、短径は1.77ｍで、深さ0.11ｍを測る。断面形は逆梯形で、底面形は歪な方形状を呈し、平坦である。長径は19.20ｍ、短径は16.70ｍを測る。埋土は１層で褐色粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。



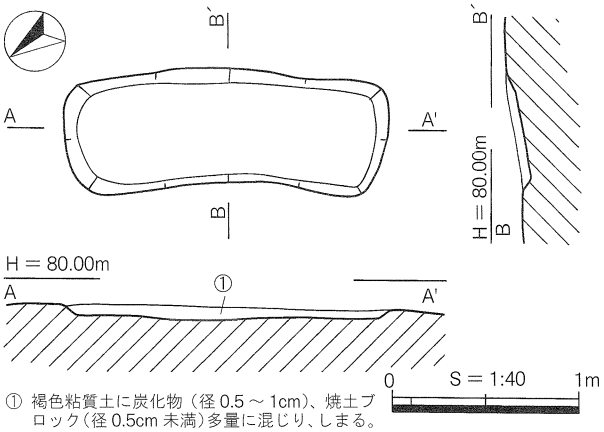

挿図43　　第３土坑遺構図

第４土坑（ＳＫ－04・挿図44・図版10）

位　置　　調査区中央より北側、ＳＸ－01の前方部を掘り込んで造られた平坦面で検出された。ＳＸ－01の第１埋葬施設の北西側4.80ｍに位置する。検出面での標高は79.92ｍを測る。

形　態　　平面形は長方形をなし、主軸はＮ－35°－Ｅをとる。上縁部の長径は1.73ｍ、短径は0.61ｍで、深さは0.07ｍを測る。断面形は皿形で、底面形は歪な方形を呈し、平坦である。長径は1.58ｍ、短径は0.48ｍを測る。埋土は１層で、炭化物、焼土ブロックが混じる褐色粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。



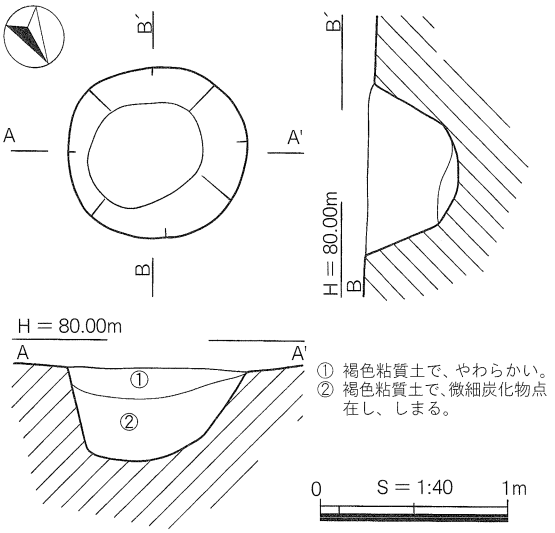

挿図44　　第４土坑遺構図

第５土坑（ＳＫ－05・挿図45・図版11）

位　置　　調査区中央より北側、平坦面にて検出された。ＳＫ－01の西側1.30ｍに位置する。検出面での標高は79.88ｍを測る。

形　態　　平面形は円形をなし、主軸はＮ－71°－Ｗをとる。上縁部の長径は0.95ｍ、短径0.91ｍ、深さは0.50ｍを測る。断面形は歪な逆梯形で、底面形は歪な楕円形を呈し、長径は0.85ｍ、短径は0.78ｍを測る。埋土は２層に分層され、下層の褐色粘質土には微細炭化物が含まれていた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。



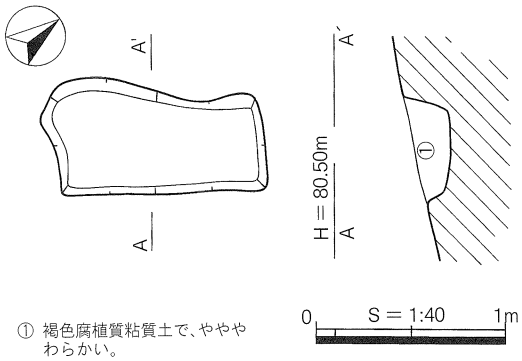

挿図45　　第５土坑遺構図

第６土坑（ＳＫ－06・挿図46・図版11）

位　置　　調査区中央より北東側、暖斜面において検出された。ＳＫ－01の北側1.70ｍに位置し、ＳＳ－04を切り込む。検出面での標高は80.13ｍを測る。

形　態　　平面形は長方形をなし、主軸はＮ－39°－Ｅをとる。上縁部は長径1.03ｍ、短径0.61ｍ、深さ0.25ｍを測る。断面形は逆梯形で、底面形は歪な長方形を呈し、平坦である。径は1.07ｍ、短径は0.46ｍを測る。埋土は１層で褐色腐植質粘質土の堆積していた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、ＳＳ－04との切り合い関係から中世以降である。



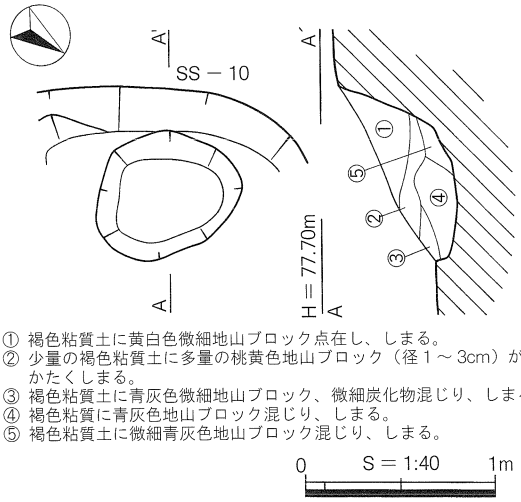

挿図46　　第６土坑遺構図

第７土坑（ＳＫ－07・挿図47・図版11）

位　置　　調査区中央より北東側において検出された。ＳＳ－10を切り込み、ＳＫ－08の北西側0.60ｍに位置する。検出面での標高は77.10ｍである。

形　態　　平面形は不整円形をなし、主軸はＮ－52°－Ｗをとる。上縁部の長径0.81ｍ、短径0.65ｍ、深さは0.13ｍを測る。断面形は皿状で、底面形は歪な楕円形を呈し、長径は0.60ｍ、短径は0.44ｍを測る。埋土は５層に分層され、下層には褐色粘質土に微細青灰色地山ブロック、微細炭化物が混じる層がみられた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、ＳＳ－10との切り合い関係から中世以降のものである。

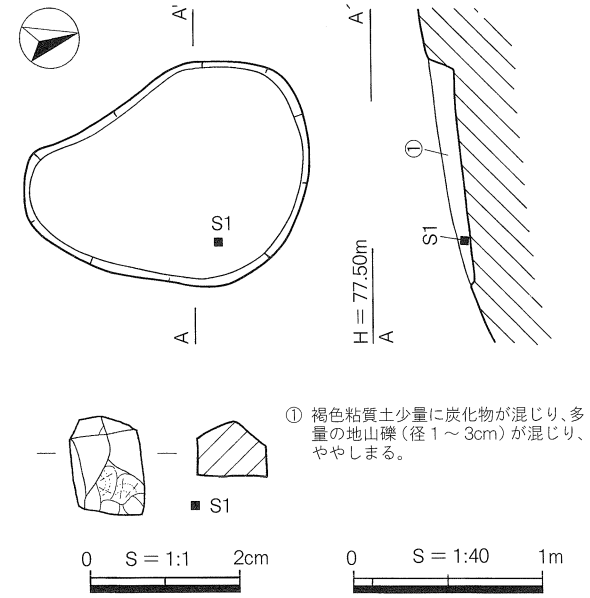



挿図47　　第７土坑遺構図

第８土坑（ＳＫ－08・挿図48・図版11、16）

位　置　　調査区中央より北東側において検出された。ＳＫ－07の南東側0.60ｍに位置し、ＳＢ－08・09の西側を切り込む。検出面での標高は77.20ｍである。

形　態　　平面形は不整楕円形をなし、主軸はＮ－6°－Ｅをとる。上縁部長径1.54ｍ、短径1.10ｍ、深さは0.14ｍを測る。断面形は逆梯形で、底面形は歪な楕円形を呈し、平坦である。長径は2.93ｍ、短径2.10ｍ、を測る。埋土は１層で、褐色粘質土に炭化物、地山礫が混じる層が堆積していた。



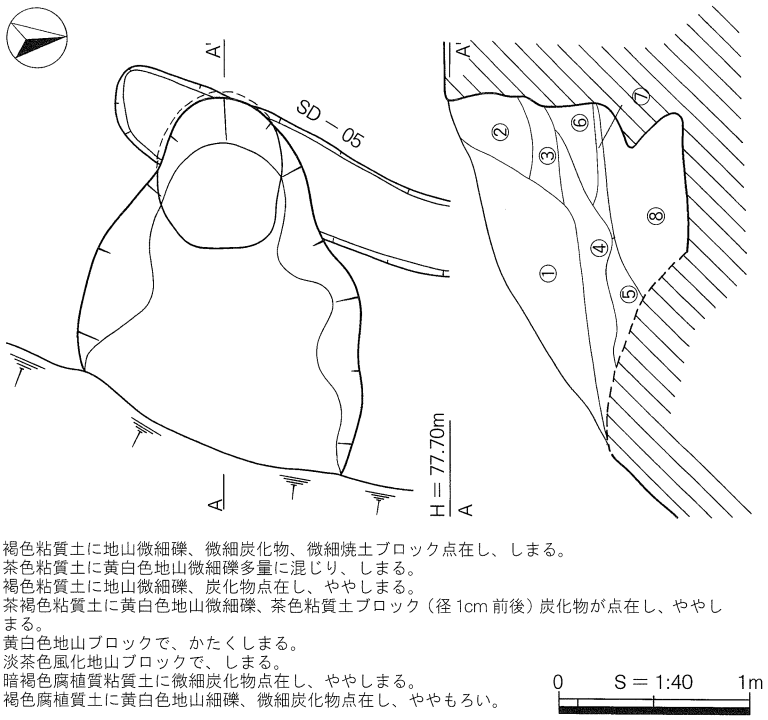

挿図48　第８土坑遺構図・出土遺物実測図

遺　物　　土坑内の底面からは水晶片（Ｓ 46）が出土している。遺構の性格は不明である。
時　期　　時期は不明であるが、ＳＢ－08・09との切り合い関係から中世以降のものである。

第９土坑（ＳＫ－09・挿図50・図版11）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－10の平坦面で検出された。ＳＤ－05を切り込み、東側は急斜面部にかかり、ＳＫ－10の西側3.10ｍに位置する。検出面での標高は77.02ｍである。

形　態　　平面形は不整形をなし、主軸はN－82°－Wをとる。上縁部の長径は1.90ｍ、短径1.39ｍ、深さは1.28ｍを測る。断面形は袋状で、底面形はやや歪な円形を呈し、平坦である。長径7.50ｍ、短径5.80ｍを測る。埋土は８層に分層され、最下層には褐色腐植質土に地山細礫、微細炭化物の点在する層が堆積していた。遺構の性格は不明であるが、人工的加工とは判断し難く、小動物による攪乱穴の可能性が高い。



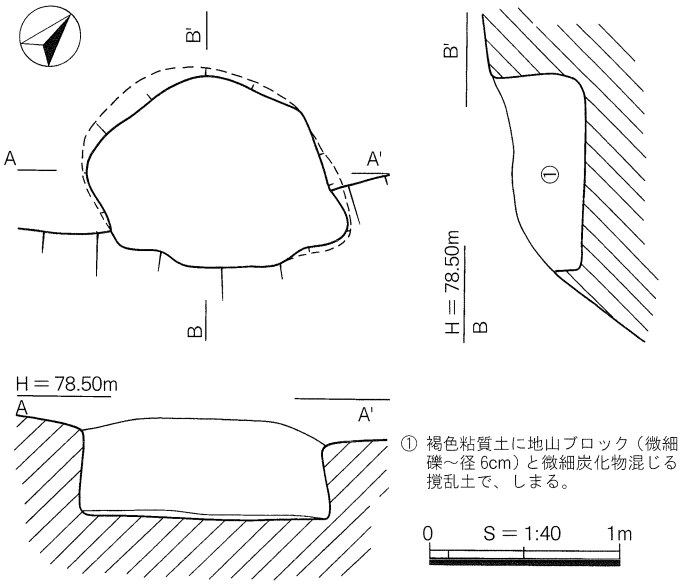

挿図50　　第９土坑遺構図

時　期　　遺物は出土なかった。時期は不明である。

第10土坑（ＳＫ－10・挿図49・図版11）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－07の平坦面で検出された。ＳＫ－11の南側1.30ｍに位置する。検出面での標高は78.37ｍを測る。

形　態　　平面形は不整形をなし、主軸はN－65°－Eをとる。上縁部の長径は1.40ｍ、短径1.00ｍ、深さは0.49mを測る。断面形は袋状で、底面形は歪な楕円形を呈し、平坦である。長径1.48ｍ、短径10.05ｍを測る。埋土は１層で褐色粘質土に地山ブロック、微細炭化物が混じる攪乱層が堆積していた。遺構は形態から上縁部をＳＳ－07により削平されているものの貯蔵穴であると考えられる。




挿図49　　第10土坑遺構図

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、ＳＳ－07との切り合い

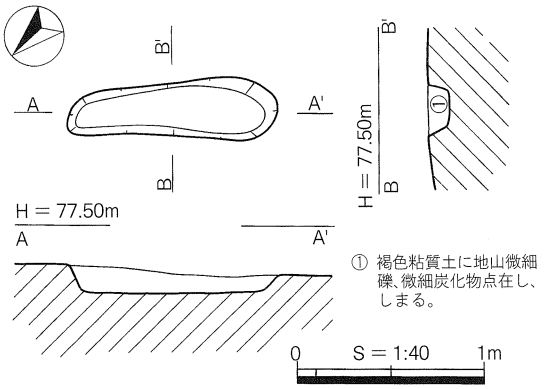
関係から、中世以前で形態や周辺の出土遺物等から弥生時代の可能性がある。

第 11 土坑（ＳＫ－11・挿図 51・図版 11、12）

位　置　　調査区中央より東側において検出された。ＳＫ－12 の北西側 0.20 m に位置する。検出面での標高は 77.29 m である。

形　態　　平面形は楕円形をなし、主軸はＮ－41°－Ｅをとる。上縁部の長径は 1.10 m、短径 0.27 m、深さ 0.12 m を測る。断面形は逆梯形で、底面形は細長い歪な楕円形を呈し、平坦である。長径 9.98 m、短径 2.70 m を測る。埋土は１層で褐色粘質土に微細な地山細礫、炭化物の点在する層が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。



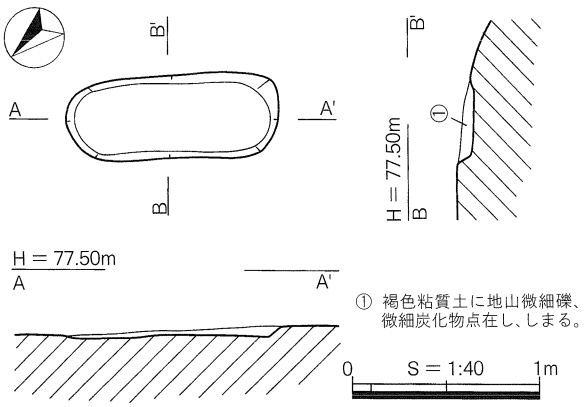

挿図 51　　第 11 土坑遺構図

第 12 土坑（ＳＫ－12・挿図 52・図版 11、12）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－10 の底面で検出された。ＳＫ－11 の南東側 0.20 m に位置する。検出面での標高は 77.23 m を測る。

形　態　　平面形は楕円形をなし、主軸はＮ－37°－Ｅをとる。上縁部は長径 1.13 m、短径 0.44 m、深さは 0.07 m を測る。断面形は皿状で、底面形は細長い楕円形を呈し、平坦である。長径 10.05 m、短径 3.05 m を測る。埋土は１層で褐色粘質土に微細な地山細礫、炭化物の点在する層が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

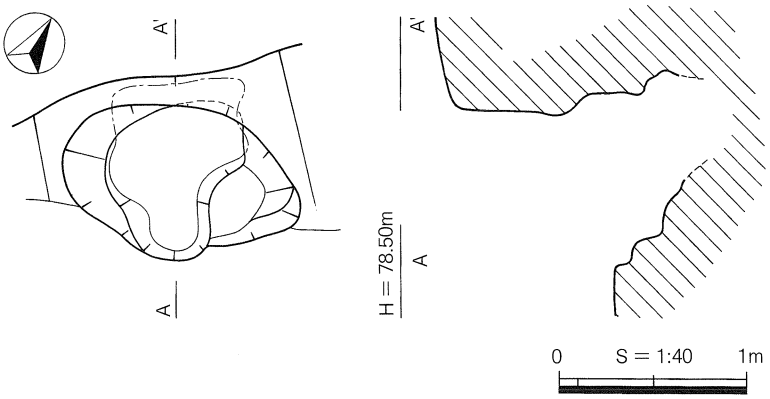



挿図 52　　第 12 土坑遺構図

第 13 土坑（ＳＫ－13・挿図 53・図版 12）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－10 の側壁面で検出された。ＳＫ－14 の北西側に接する形で位置する。検出面での標高は 78.21 m である。

形　態　　平面形は不整形をなし、主軸はＮ－76°－Ｅをとる。上縁部の長径は 1.31 m、短径 0.82 m、深さは 1.18 m を測る。断面形は袋状を呈する。底部は深く斜め方向に掘り込まれている。埋土は攪乱土が堆積していた。遺構の性格は小動物による攪乱穴と考えられる。




挿図 53　　第 13 土坑遺構図

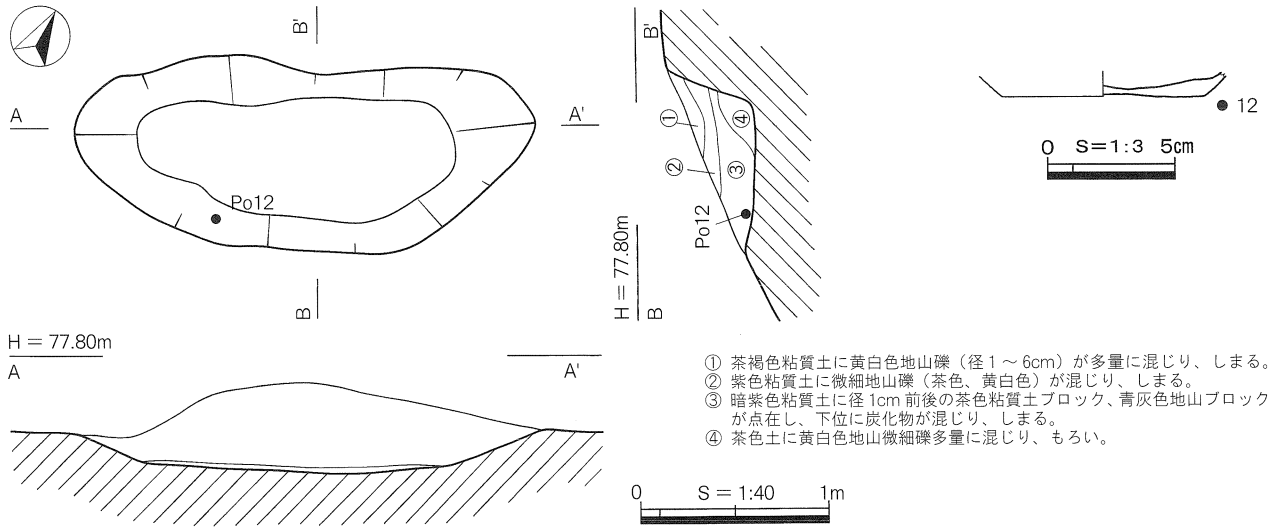
第14土坑（ＳＫ－14・挿図54・図版12、15）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－10の側壁際で検出された。ＳＫ－14の南東側に接する形で位置する。検出面での標高は77.64ｍを測る。

形　態　　平面形は不整楕円形をなし、主軸はＮ－60°－Ｅをとる。上縁部の長径は2.45ｍ、短径0.96ｍ、深さ0.45ｍを測る。断面形は主軸方向においては逆梯形で、底面形は歪な長方形を呈し、平坦である。長径は1.67ｍ、短径0.63ｍを測る。埋土は４層で、下層の③層である暗紫色粘質土に茶色粘質土ブロック・青灰色地山ブロックが点在し、炭化物が混じる層の堆積が厚くみられた。遺構の性格は不明である。

遺　物　　土坑内からは土師器の皿の底部(12)が出土している。

時　期　　時期は中世と思われる。

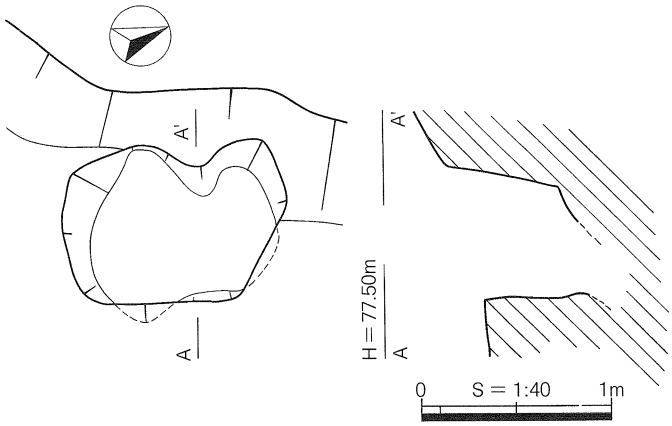



挿図54　　第14土坑遺構図・出土土器実測図

第15土坑（ＳＫ－15・挿図55・図版12）

位　置　　調査区中央より東側において検出された。ＳＫ－14の西側0.50ｍに位置する。検出面での標高77.17ｍを測る。

形　態　　平面形は不整楕円形をなし、主軸はＮ－24°－Ｅをとる。上縁部の長径は1.14ｍ、短径は0.79ｍ、深さは0.67ｍを測る。断面形は逆梯形で、底部は斜め方向に深く掘り込まれている。埋土は攪乱土が堆積していた。遺構の性格は小動物による攪乱穴と思われる。

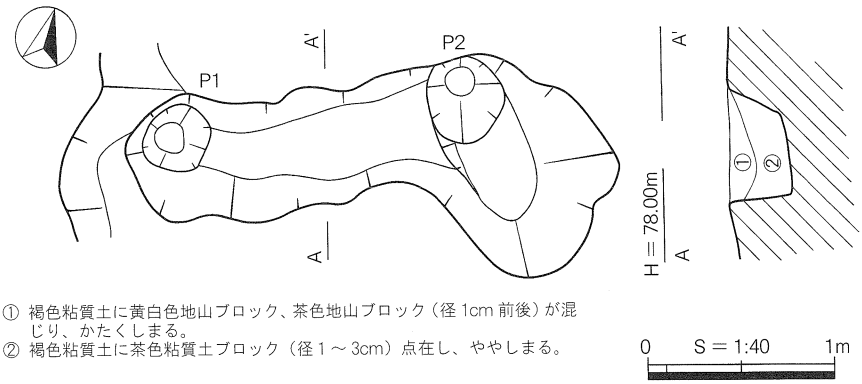



挿図55　　第15土坑遺構図

第16土坑（ＳＫ－16・挿図56）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－10の平坦面で検出された。ＳＫ－17を切り込み、ＳＫ－18の南東側0.20ｍに位置する。検出面での標高は77.57ｍを測る。

形　態　　平面形はややL字状を呈し、主軸はN－74°－Eをとる。上縁部の長径は2.63 m、短径0.55 m、深さは0.77 mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は不整形を呈し、中央は平坦である。長径は1.77 m、短径0.22 mを測る。底面西側にP１（78×70－35）cm、東側にP２（88×80－42）cmの２本の柱穴が掘り込まれている。埋土は２層に分層され褐色粘質土系の層が堆積していた。遺構の性格は不明である。



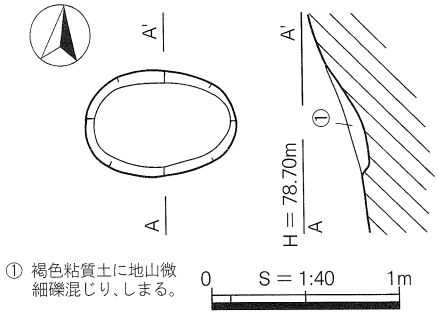

挿図56　　第16土坑遺構図

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、中世の山城跡に関連するものと推測される。

第17土坑（ＳＫ－17・挿図20、57・図版17）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－10の平坦面で検出された。ＳＫ－13の南側1.30 mに位置する。検出面での標高77.37 mを測る。

形　態　　平面形は楕円形をなし、主軸はN－83°－Eをとる。上縁部の長径は0.80 m、短径0.56 m、深さは0.19 mを測る。断面形は皿状で、底面形は楕円形を呈し、平坦である。長径は0.72 m、短径4.50 mを測る。埋土は１層で褐色粘質土に地山微細礫混じりの層が堆積していた。遺構の性格は不明である。



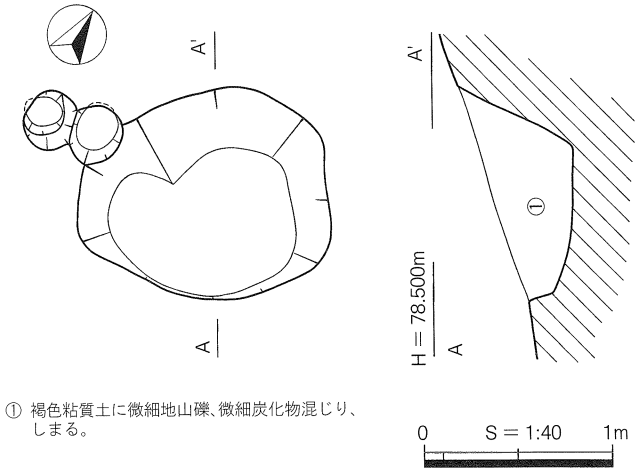

挿図57　　第17土坑遺構図

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第18土坑（ＳＫ－18・挿図58・図版12）

位　置　　調査区中央より東側において検出された。ＳＫ－19を切り込み、ＳＤ－04の南東1.40 mに位置する。検出面での標高は78.36 mを測る。

形　態　　平面形は楕円形をなし、主軸はN－40°－Eをとる。上縁部の長径は1.33 m、短径1.09 m、深さ0.61 mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は歪な楕円形を呈し、やや平坦である。長径0.99 m、短径0.72 mを測る。埋土は１層で褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物混じりの層が堆積していた。遺構の性格は不明である。




挿図58　　第18土坑遺構図

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。

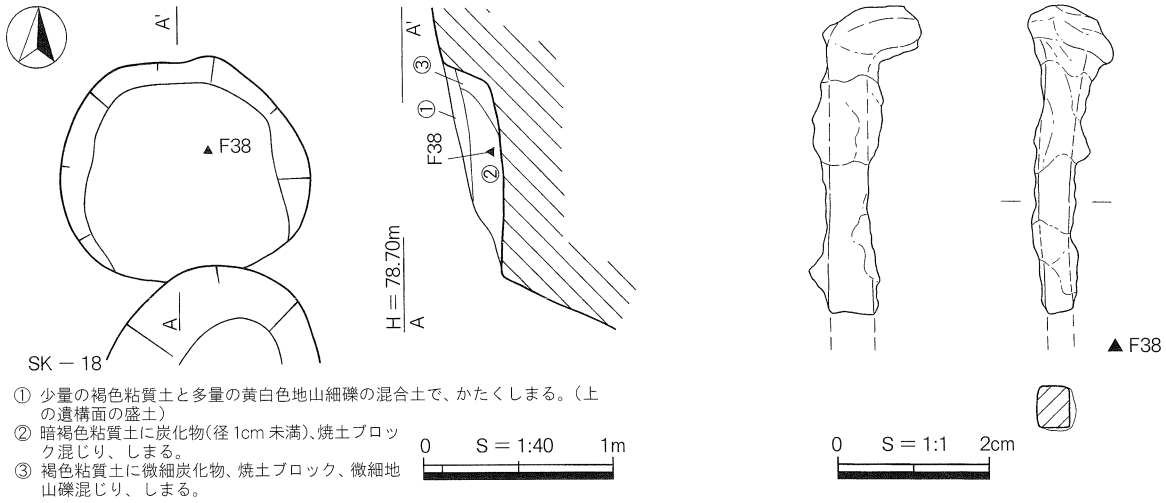
第19土坑（ＳＫ－19・挿図59・図版18）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－07の平坦面で検出された。ＳＫ－18に切り込まれ、ＳＤ－04の南東側0.40ｍに位置する。検出面での標高は78.48ｍを測る。

形　態　　平面形は円形をなし、主軸はＮ－82°－Ｅをとる。上縁部の長径は1.33ｍ、短径は1.15ｍ、深さは0.32ｍを測る。断面形は逆梯形で、底面形は円形を呈し、平坦である。長径は1.02ｍ、短径0.98ｍを測る。埋土は3層に分層され下層の②層の暗褐色粘質土に炭化物、焼土ブロック混じりの厚い堆積がみられた。遺構の性格は不明である。

遺　物　　遺物は釘Ｆ（38）が出土している。

時　期　　時期は不明である。



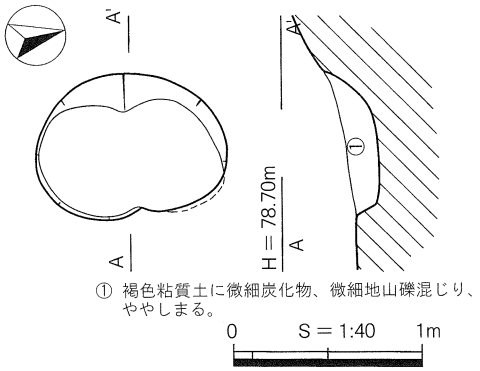

挿図59　　第19土坑遺構図・出土遺物実測図

第20土坑（ＳＫ－20・挿図60・図版12）

位　置　　調査区中央より東側、ＳＳ－07の平坦面で検出された。ＳＫ－19と重複し、ＳＤ－04の西側1.00ｍに位置する。検出面での標高は78.45ｍを測る。

形　態　　平面形は楕円形をなし、主軸はＮ－4°－Ｅをとる。上縁部の長径1.02ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.31ｍを測る。断面形は逆梯形で、底面形は楕円形を呈し、やや平坦である。長径は0.97m、短径0.52ｍを測る。埋土は1層で褐色粘質土に微細炭化物、微細地山礫が混じる層が堆積していた。遺構の性格は不明である。

遺　物　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。




挿図60　　第20土坑遺構図

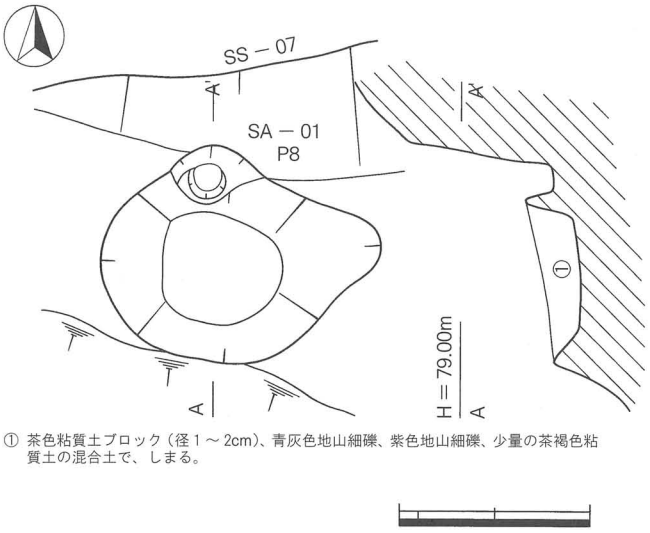
第21土坑（ＳＫ－21・挿図61・図版12）

位　置　　調査区中央より、やや北東側、ＳＳ－07の南端平坦面で検出された。ＳＤ－04の西側0.60に位置する。検出面での標高は78.86ｍを測る。

形　態　　平面形は不整楕円形をなし、主軸はＮ－83°－Ｅをとる。上縁部の長径は1.48ｍ、短径1.17ｍ、深さ0.47ｍを測る。断面形は逆梯形で、底面形は円形を呈し、やや平坦である。

長径は3.00 m、短径は2.90 mを測る。埋土は1層で混合土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明である。




① 茶色粘質土ブロック（径1～2cm）、青灰色地山細礫、紫色地山細礫、少量の茶褐色粘質土の混合土で、しまる。

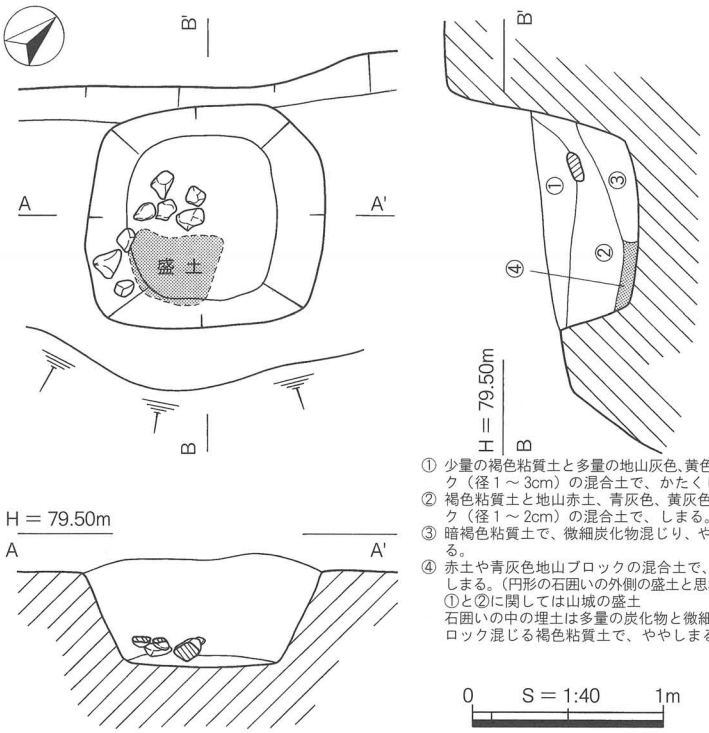
挿図61　　第21土坑遺構図

第22土坑（ＳＫ－22・挿図62・図版13）

位　置　　調査区中央より南西側、ＳＳ－16の平坦面で検出された。ＳＳ－17の南西側1.50 mに位置する。検出面での標高は79.35 mを測る。

形　態　　平面形は隅丸方形をなし、主軸はN－44°－Eをとる。上縁部の長径は1.25 m、短径1.17 m、深さ0.50 mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は隅丸方形を呈し、やや平坦である。長径は0.85 m、短径0.75 mを測る。底面から南西側の壁面にかけて、少し浮いた状態で8個の拳大の礫が検出された。これらの石は上面に火を受けた痕跡がみられ、赤く変色したり、煤が付着した痕跡がみられた。埋土は4層に分けられ、①層、②層の堆積層中に多量の炭化物、焼土を含むことから、この中で火を焚いたと考えられる。

時　期　　時期は不明である。




① 少量の褐色粘質土と多量の地山灰色、黄色ブロック（径1～3cm）の混合土で、かたくしまる。
② 褐色粘質土と地山赤土、青灰色、黄灰色ブロック（径1～2cm）の混合土で、しまる。
③ 暗褐色粘質土で、微細炭化物混じり、ややしまる。
④ 赤土や青灰色地山ブロックの混合土で、かたくしまる。（円形の石囲いの外側の盛土と思われる）
①と②に関しては山城の盛土
石囲いの中の埋土は多量の炭化物と微細焼土ブロック混じる褐色粘質土で、ややしまる。

0　S＝1:40　1m

挿図62　　第22土坑遺構図

第23土坑（ＳＫ－23・挿図63・図版5、6）

位　置　　調査区中央より南西側において検出された。第1堀切内に位置する。検出面での標高は74.70 mを測る。

形　態　　平面形は不整楕円形を呈し、主軸はN－61°－Wをとる。上縁部の長径は5.20 m、短径2.80 m、深さ1.50 mを測る。断面形は皿状で、底面形は歪な楕円形を呈する。長径は2.10 m、短径は1.18 mを測る。底面には細長い溝が北西から南東方向に向かって直線状に走り、にぎりこぶし大の礫が溝幅一杯に底面密着した状態で検出された。遺構の性格は第1堀切に付設するものと考えられる。

時　期　　時期は中世と考えられる。

| 遺構名 | 平面形 | 断面形 | 検出面標高 | 規模 | 長軸方向 |
|---|---|---|---|---|---|
| SK－01 | 円形 | お椀形 | 79.82 | 1.11 × 0.96 － 0.44 | N － 77° － W |
| SK－02 | 隅丸長方形 | 逆梯形 | 79.95 | 1.59 × 1.00 － 0.15 | N － 17° － E |
| SK－03 | 長方形 | 逆梯形 | 80.05 | 2.00 × 1.77 － 0.11 | N － 69° － E |
| SK－04 | 長方形 | 皿状 | 79.92 | 1.73 × 0.61 － 0.07 | N － 35° － E |
| SK－05 | 円形 | 逆梯形 | 79.88 | 0.95 × 0.91 － 0.50 | N － 71° － W |
| SK－06 | 長方形 | 逆梯形 | 80.13 | 1.03 × 0.61 － 0.25 | N － 39° － E |
| SK－07 | 不整円形 | 皿状 | 77.10 | 0.81 × 0.65 － 0.13 | N － 52° － W |
| SK－08 | 不整楕円形 | 逆梯形 | 77.20 | 1.54 × 1.10 － 0.14 | N － 6° － E |
| SK－09 | 不整形 | 袋状 | 77.02 | 1.90 × 1.39 － 1.28 | N － 82° － W |
| SK－10 | 不整形 | 袋状 | 78.37 | 1.40 × 1.00 － 0.49 | N － 65° － E |
| SK－11 | 楕円形 | 逆梯形 | 77.29 | 1.10 × 0.27 － 0.12 | N － 41° － E |
| SK－12 | 楕円形 | 皿状 | 77.23 | 1.13 × 0.44 － 0.07 | N － 37° － E |
| SK－13 | 不整形 | 袋状 | 77.21 | 1.31 × 0.82 － 1.18 | N － 76° － E |
| SK－14 | 不整楕円形 | 逆梯形 | 77.64 | 2.45 × 0.95 － 0.45 | N － 60° － E |
| SK－15 | 不整楕円形 | 逆梯形 | 77.17 | 1.14 × 0.76 － 0.67 | N － 24° － E |
| SK－16 | 不整形 | 逆梯形 | 77.57 | 2.63 × 0.55 － 0.77 | N － 74° － E |
| SK－17 | 楕円形 | 皿状 | 77.37 | 0.80 × 0.56 － 0.19 | N － 83° － E |
| SK－18 | 楕円形 | 逆梯形 | 78.36 | 1.33 × 1.09 － 0.61 | N － 40° － E |
| SK－19 | 円形 | 逆梯形 | 78.48 | 1.33 × 1.15 － 0.32 | N － 82° － E |
| SK－20 | 楕円形 | 逆梯形 | 78.45 | 1.02 × 0.76 － 0.31 | N － 4° － E |
| SK－21 | 不整楕円形 | 逆梯形 | 78.86 | 1.48 × 1.17 － 0.47 | N － 83° － E |
| SK－22 | 隅丸楕円形 | 逆梯形 | 79.35 | 1.25 × 1.17 － 0.50 | N － 44° － E |
| SK－23 | 不整楕円形 | 皿状 | 74.70 | 5.20 × 2.80 － 1.50 | N － 61° － W |

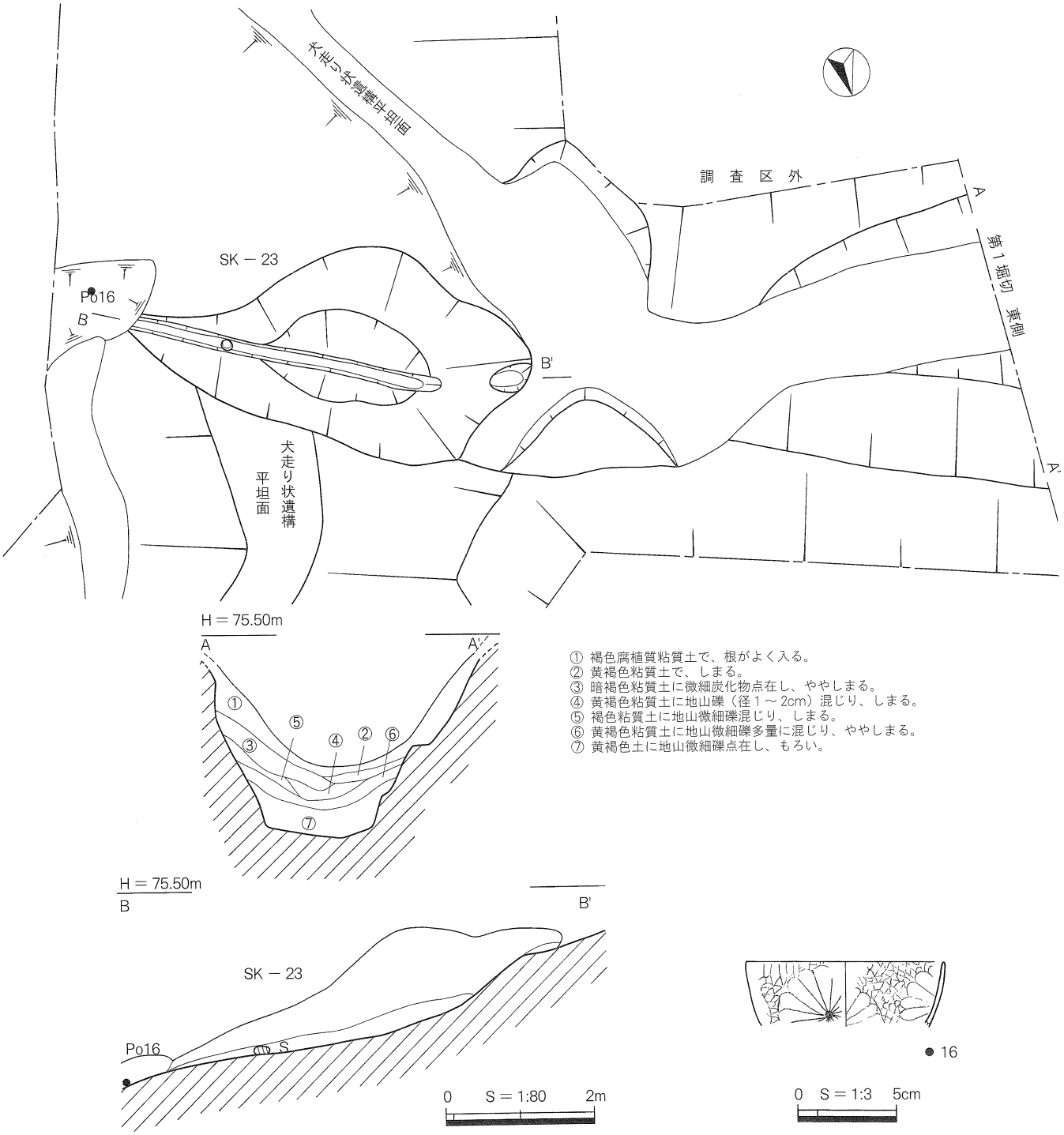
挿表５　土坑計測表

## 第７節　堀切

堀切は２条検出され、それぞれ調査区の南側でやせ尾根鞍部を断ち切るように東西方向に設けられている。南端のものを第２堀切、これから約７ｍ北方向に造られ、曲輪１に接したものを第１堀切と呼称する。いずれも空堀である。

### 第１堀切（挿図 63・図版５・16）

位　置　　調査区の南側に位置し、北側に曲輪１、南側に第２堀切がある。底面の平均標高は 72.90 m を測る。




挿図 63　　第１堀切　東側遺構図・出土土器実測図、第 23 土坑遺構図

形　態　　調査区の関係から全容は不明であるが、断面形をみると、いわゆる箱堀の逆台形を呈す。底面は削平され、底幅は1.50 mを測る。検出面での規模は長さ（東西方向）6.30 mである。曲輪1の土塁からの最大比高差は8.10 mを測る。なお、底面は東方向に傾斜しており、水を流すと東側に接して掘り込まれたＳＫ－23に流れ込むことになる。また、南東側には犬走り状の幅狭な平坦面（幅0.55 m）が続いている。

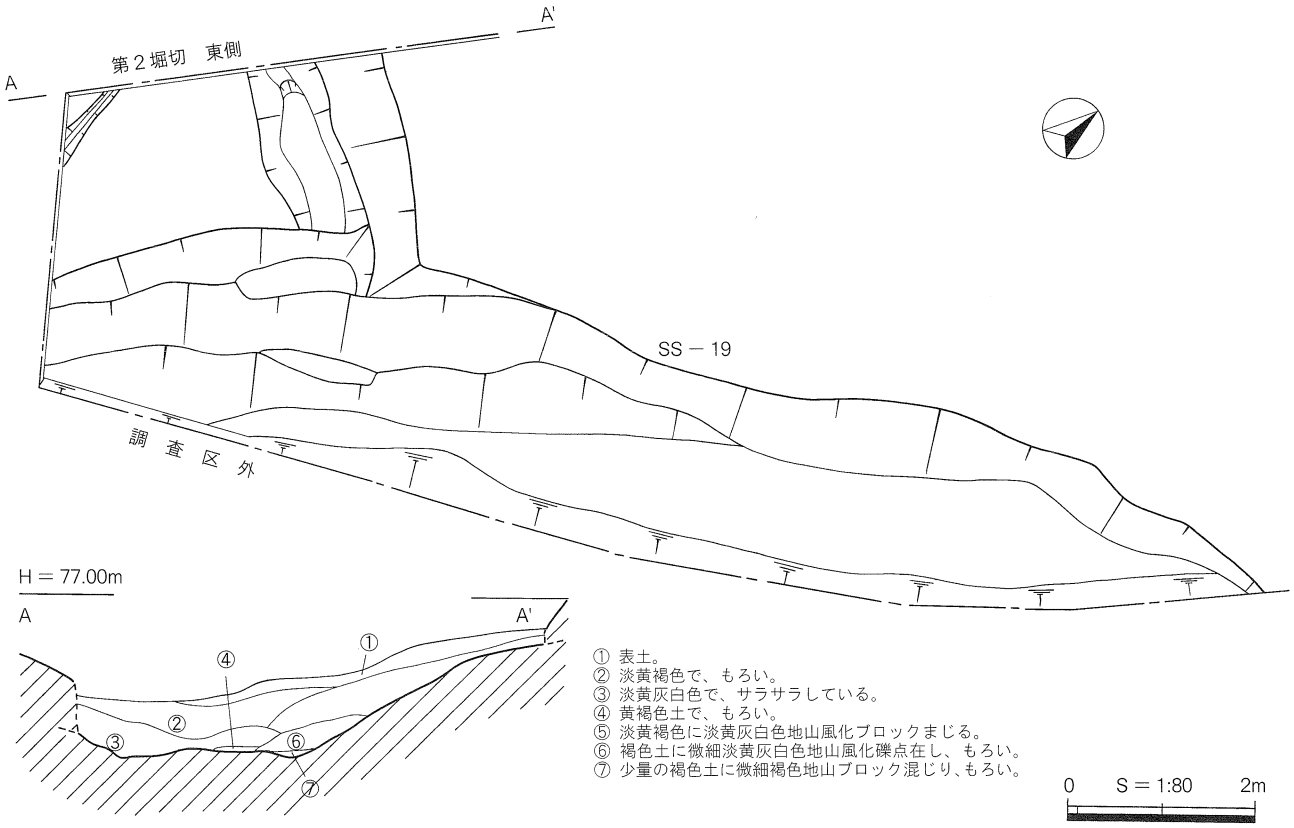
時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、立地条件等から中世の山城に関連するものと考えられる。

第２堀切（挿図10、64・図版６）

位　置　　調査区南端に位置し、東側にＳＳ－19が隣接する。底面の平均標高は75.90 mを測る。

形　態　　調査区の関係から全容は不明であるが、断面形をみると、いわゆる箱堀の逆台形を呈す。底面は削平され、底幅は1.20 mを測る。本遺構の南側にある尾根上削平地（挿図５、第13トレンチ図）からの最大比高差は4.10 mを測る。なお、底面両端には平面に沿う形で側溝が認められる。南側のものが、幅20cm、深さ４ cm、北側のものが幅40cm、深さ８ cmを測る。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、立地条件等から中世の山城に関連するものと考えられる。




挿図64　　第２堀切　東側遺構図、第19段状遺構遺構図

## 第８節　横堀状遺構

横堀状遺構は調査区東端で１基（第１横堀状遺構）、トレンチ調査（第７トレンチ）で１基（第２横堀状遺構）が確認された。

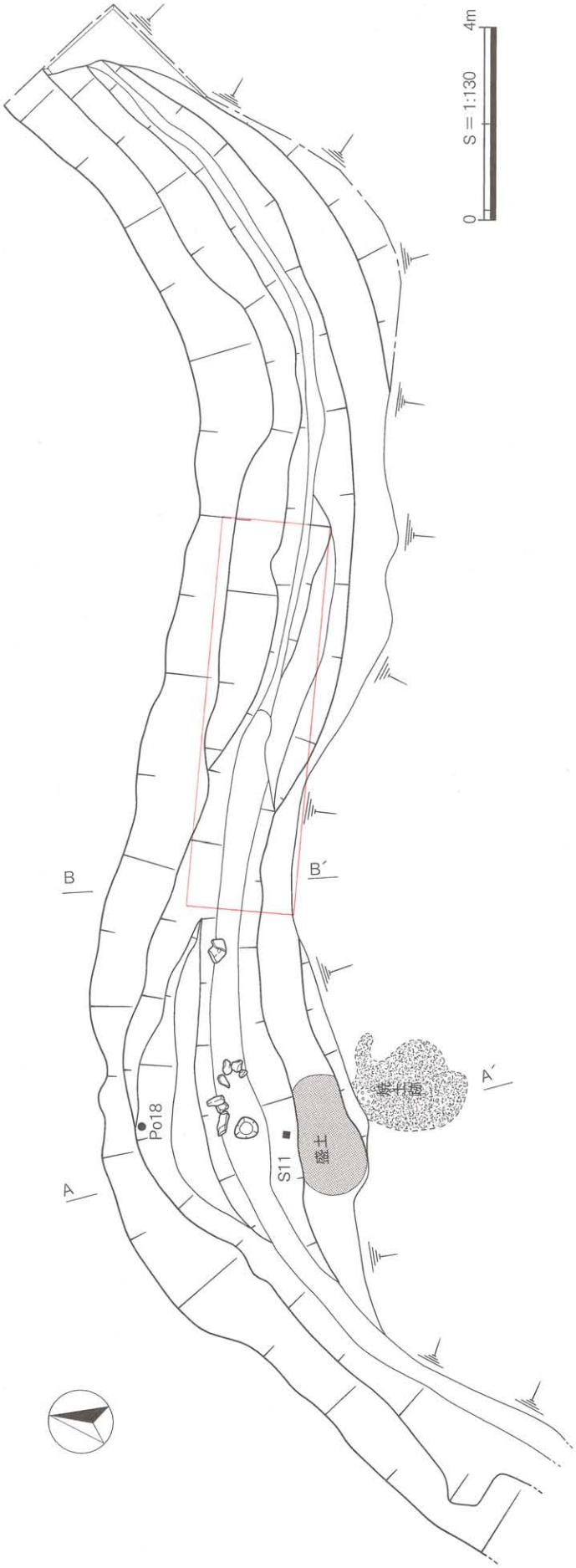
第１横堀状遺構（挿図 65、66・図版 13、14）

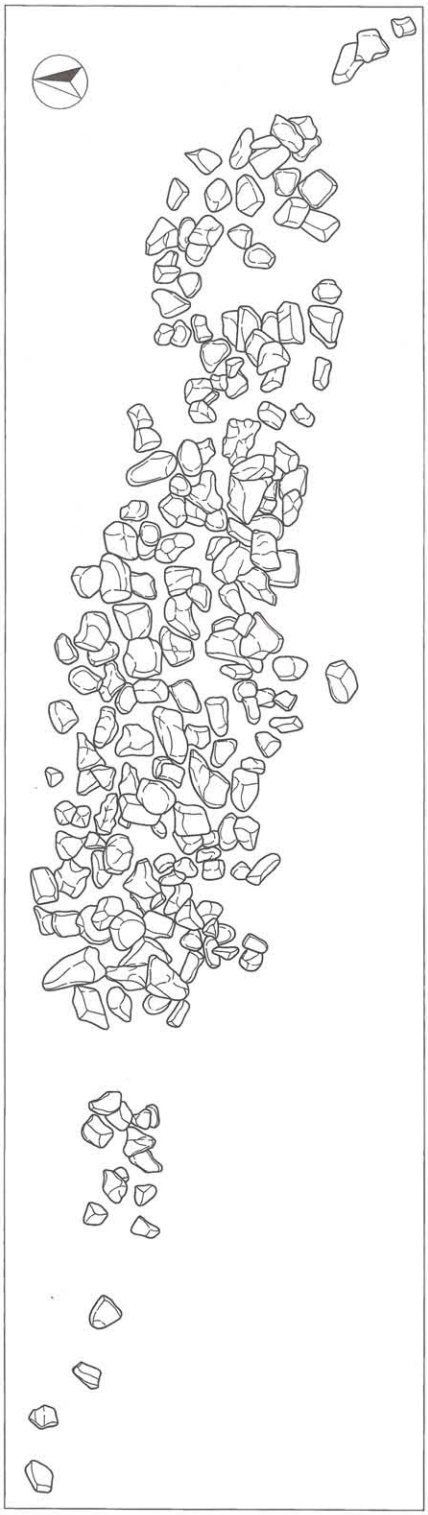
位　置　　調査区の東端から南東側の急斜面下に立地する。底面の平均標高は南東側で 72.95 m、東端で 72.65 mを測り、曲輪１との最大比高差は 7.40 mである。上側にＳＳ－ 18 が並行した形で隣接し、南東端は第１堀切東側に造られたＳＫ－ 23 の下側に接している。下側は斜面部が続いている。

形　態　　地形に沿う形で緩くＳ字状に曲折し、東側で終焉している。規模は長さ 36.00 mを測る。断面形をみると土層断面（Ａ－Ａ´）では逆台形を呈し、規模は上幅 1.80 m、底幅 0.90 m、深さ 0.28 mを測る。土層断面（Ｂ－Ｂ´）ではやや歪な逆台形を呈し、規模は上幅 1.80 m、底幅 0.55 m、深さ 0.40 mを測る。東端部では断面逆台形をとるものの規模は上幅 1.80 m、底幅 0.20 mと極端に幅狭となり、深さは 0.30 mを測る。したがって、第１堀切内のＳＫ－ 23 付近から派生する本遺構の底面形をみると、途中、中程までは底幅 0.90 ～ 0.55 mと比較的幅をとりながら移行するものの、ここから終焉する北側に向かって底幅は最大で 0.20 mと足幅にも満たないものとなっている。また、底面は北側に向かって傾斜が付いており、西側から水を流すと東側の外方に流れ落ちる結果となる。その為、雨水等が滞水することはなく、空堀の様相を呈している。埋土は自然堆積の様相を呈し、しまりが強い。また、本遺構中程の埋土中には多量の角礫が集石した状態で検出されている。横堀状遺構を構成する外側は土層断面（Ａ－Ａ´）周辺では、地山掘削で断面台形、土塁状（上幅 1.20 m×高さ 0.40 m）に掘り残し、一部分厚さ 15cm 程の盛土を施す所もみられるが、中程から東端にかけては地山掘削で断面やや山形に掘り残している。これは西側の基盤層が固い粘質土の堆積であるのに対して、東側半分は硬い角礫層であり、西側ほどの整美な断面台形状の成形が掘削上出来なかった事に起因するものと思われる。なお、土層断面（Ａ－Ａ´）周辺上側には段が付いている。また、土層断面（Ａ－Ａ´）周辺にある土塁状盛土の範囲は東西 2.40 m、南北は上幅一杯の 1.20 mであり、その下側緩斜面には、接する形で不整形の炭層とその下の焼土跡（長辺 2.20 m×短辺 1.60 m、厚さ：炭層 25cm、焼土層 13cm）が検出された。のろし等の機能が想定され、上側に接する盛土はこれに関連して積み上げられた可能性が考えられる。

遺　物　　段の肩部直上から 14 世紀頃の土師器捏鉢（18）、その他に埋土中より須恵器小壺（17）、鉄釘（Ｆ 43）、黒耀石製石鏃（Ｓ 11）が出土している。

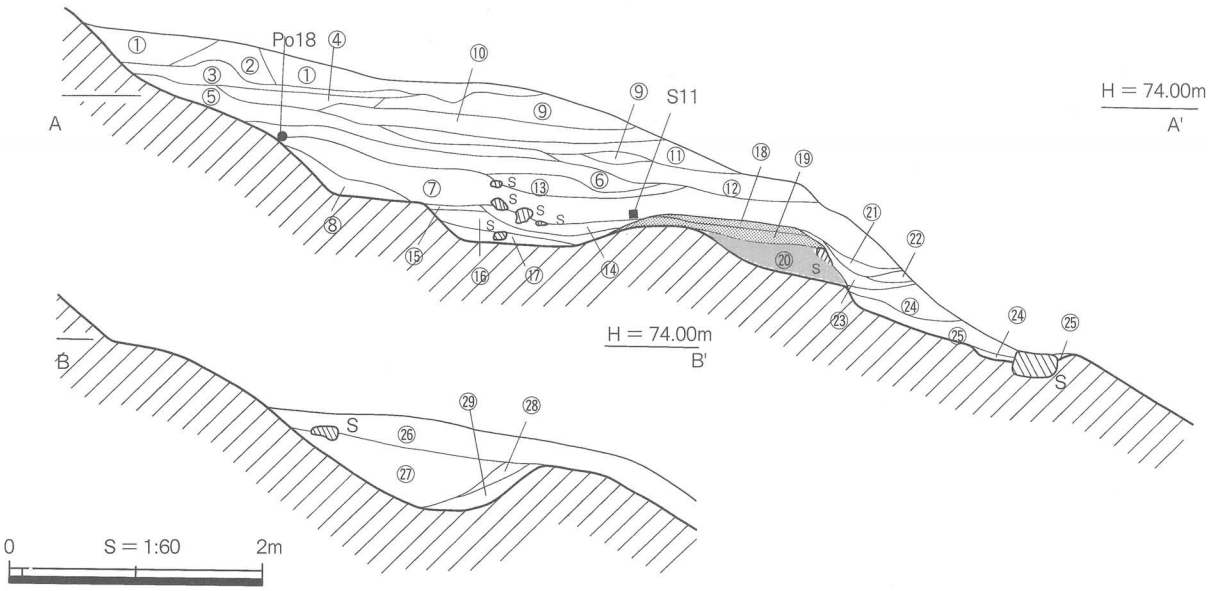
時　期　　出土遺物（18）は出土位置等から混入したものと思われる。形態、立地条件等から中世の山城を構成するものと推定される。



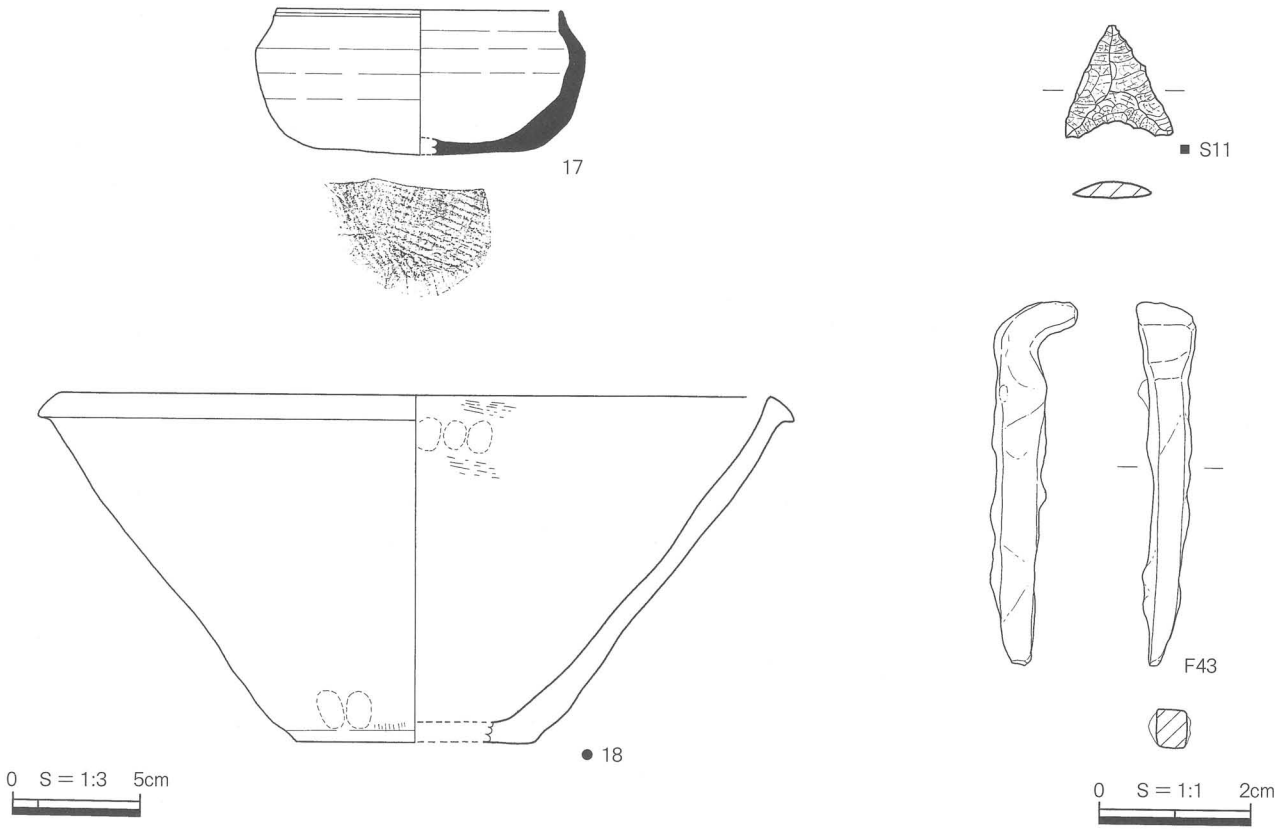




集石状況図

挿図 65　　第 1 横堀状遺構遺構図（1）・集石状況図




① 灰褐色粘質土で微細炭化物混じり、しまる。
② 灰色粘質土のブロックで、かたくしまる。
③ 灰色粘質土のブロックに黄白色地山微細礫混じり、かたくしまる。
④ 灰色粘質土で、かたくしまる。
⑤ 褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物混じり、しまる。
⑥ 茶灰褐色粘質土に微細地山礫点在し、しまる。
⑦ 灰褐色粘質土に微細炭化物点在し、しまる。
⑧ 黄灰褐色粘質土に青色地山微細礫多量に混じり、かたくしまる。
⑨ 少量の茶褐色粘質土と多量の青色、黄白色、淡茶色地山礫（径 1cm 未満）の混合土で、かたくしまる。
⑩ 灰褐色粘質土に青色地山微細礫多量に混じり、しまる。
⑪ 灰褐色粘質土に青色地山微細礫多量に混じり、青色地山微細礫を少量含む。
⑫ 褐色粘質土に桃黄色地山礫（径 3 ～ 5cm）点在し、しまる。
⑬ 灰褐色粘質土で、かたくしまる。
⑭ 少量の茶褐色粘質土に多量の黄白色地山微細礫が混じり、かたくしまる。
⑮ 暗褐色粘質土に黄白色地山微細礫が混じり、かたくしまる。
⑯ 褐色粘質土に地山微細礫（茶色、黄白色、青色）が多量に混じり、かたくしまる。
⑰ 暗褐色粘質土に地山微細礫が多量に混じり、かたくしまる。
⑱ 暗褐色粘質土と黄白色地山礫（径 1cm 未満）が均質的に混じり、かたくしまる。（混合土で盛土）
⑲ 暗褐色粘質土に地山微細礫（茶色、黄白色）が少量混じり、かたくしまる。（盛土）
⑳ 暗褐色粘質土に炭化物（径 1cm 前後）が混じり、混合土でしまる。
㉑ 灰褐色粘質土に地山微細礫点在し、しまる。
㉒ 灰褐色粘質土で、しまる。
㉓ 青灰色粘質土ブロックで、かたくしまる。
㉔ 炭層。
㉕ 赤色焼土ブロック層。（堅固）
㉖ 褐色粘質土で、しまる。
㉗ 褐色粘質土に微細炭化物、地山礫点在し、しまる。
㉘ 褐色粘質土に茶色地山微細礫混じり、かたくしまる。
㉙ 暗褐色粘質土に黄白色地山礫（径 1cm 前後）が混じり、かたくしまる。




挿図 66　　第 1 横堀状遺構遺構図 (2)・出土遺物実測図

第２横堀状遺構（挿図８・図版４）

位　置　　調査区北端の第７トレンチ内に位置する。

形　態　　調査区の関係から一部分しか判明していないが、現況では調査区外に北東から北方向に明瞭な土塁状の高まりが認められる。第１横堀状遺構が終焉する東側から、やや距離をおくものの、同レベルでさらに規模を拡大した本遺構が急斜面下を地形に沿う形で弧状に巡らされているものと考えられる。断面形をみると、U字形を呈し、規模は上幅 1.60 m、深さ 0.60 m を測り、外方の土塁盛土も上幅 1.80 mが認められる。なお、上側の曲輪２との最大比高差は 6.10 mを測る。

時　期　　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成するものと推定される。

## 第９節　古墳

日次１号墳（ＳＸ－01・挿図67、68、69・図版７、18）

位　置　　シアケ遺跡の調査区の北側において、前方後円墳が１基検出された。調査前から地形に若干の高まりがみられ、表土を掘下げたところ前方後円墳の痕跡が認められた。これを日次１号墳と呼ぶ。日次１号墳は横屋集落の北東側、伯太川が大きく蛇行する部分の東側丘陵に位置する。この丘陵は横屋集落の東側にある標高161.40ｍの丘陵から、南東から北東方向に向かって緩やかに下る丘陵の先端部に位置し、先端部の北西側は伯太川の侵食により、急斜面となっている。日次１号墳の墳頂部で80.65ｍを測る。

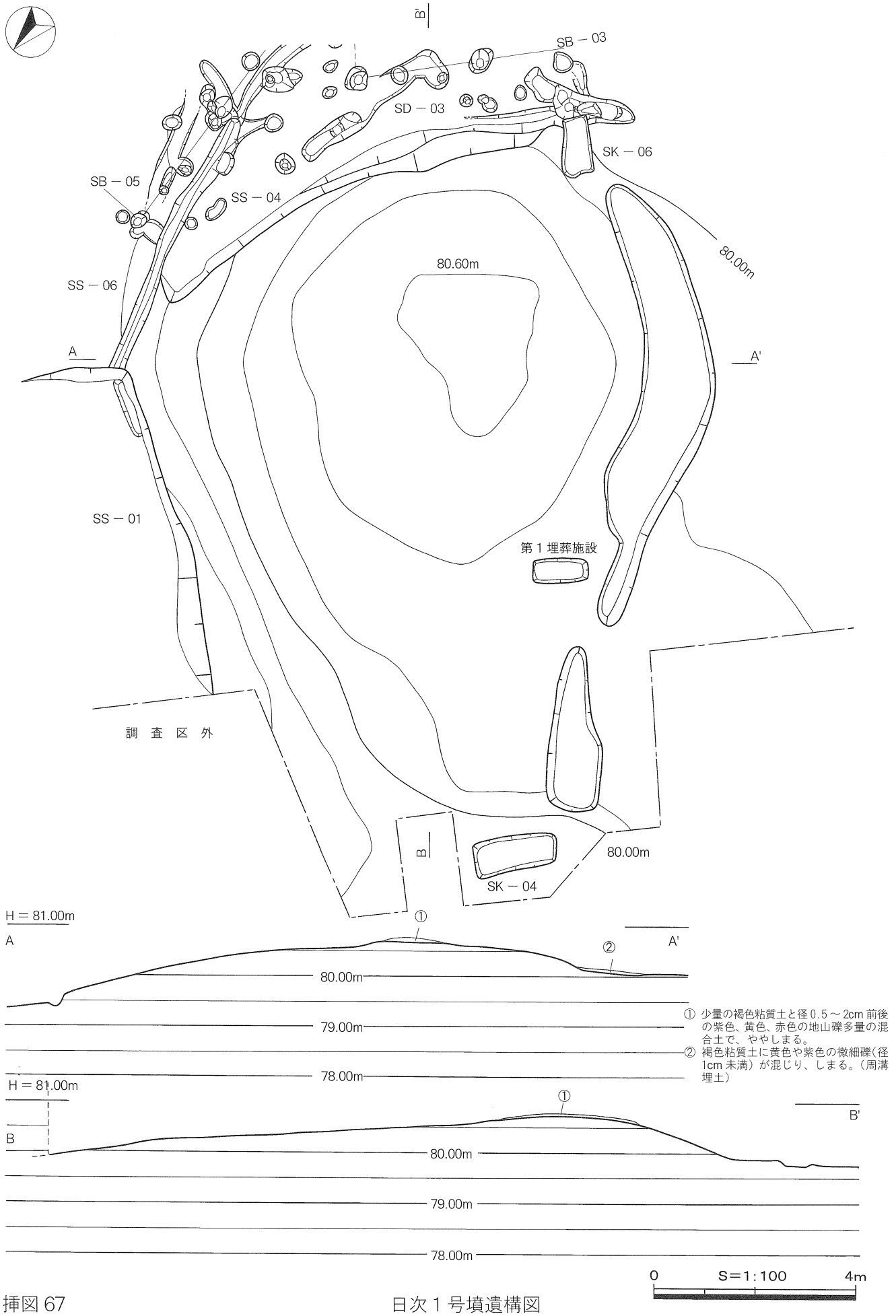
周　溝　　地山が山城の曲輪１造成時に大きく削平を受けており、本来の周溝は調査において検出された規模よりも大きいものであったと考えられる。前方後円墳の後円部の周溝が南西側において、前方部の周溝が西側にかけて、両周溝は途切れる形で検出されたが、本来は続いていたと考えられる。検出面での周溝の規模は、後円部の南西側の周溝で、長さ8.81ｍ、幅1.41～0.45ｍ、深さ0.11ｍを測り、平面形は後円部に沿った弧状を呈する。前方部の西側の周溝は長さ3.25ｍ、幅1.07～0.45ｍ、深さ0.12ｍを測り、平面形は直線状を呈する。周溝内埋土は褐色粘質土に地山微細礫混じり、しまりのある堆積がみられた。

墳　丘　　後円部の墳丘の墳裾部分において、南側から東側にかけてＳＳ－04によって大きく切られている。また、北側から北東側にかけてもＳＳ－01によって切られている。墳丘盛土は山城造成時に大きく削平を受けたと考えられ、後円部の中央の地山直上に2.90×１．１０ｍの範囲で薄く、楕円形に８cmから10cmの厚さで、少量の褐色粘質土と地山礫（径0.5～2cm）多量に含む墳丘盛土が残存していた（①層）。前方部において残存する墳丘盛土は確認されなかったが、前方部の盛土についても後円部同様に墳丘盛土があったと考えられる。前方後円墳全体の長さは周溝が全周する形で検出されていないので、南西側に検出された周溝から全体をみると、前方部の墳裾から後方部の墳裾までが14ｍ前後の前方後円墳と推定される。後円部の径は９ｍ前後、前方部は５ｍ前後と推定される。周溝底面から①層（残存する墳丘盛土）までの比高差は南西側で（Ａ－Ａ´）0.98ｍを測る。主軸方向については北西－南東方向をとる。なお、主体埋葬部の痕跡は認められなかった。

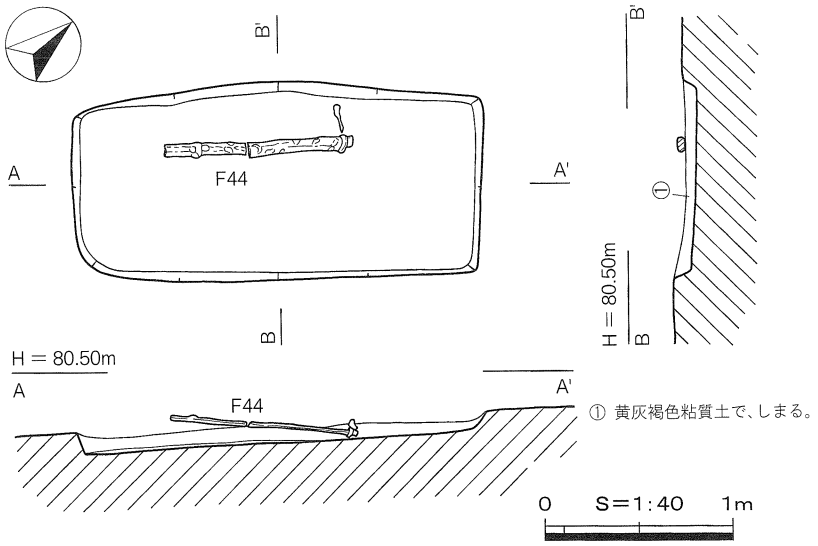
第１
埋葬施設　　第１埋葬施設は後円部中央より西側の周溝から東側に0.35ｍ離れた位置において検出された。前方後円墳の主軸方向にほぼ直交する形で地山面に掘り込まれ、検出面での標高は80.32ｍを測る。形態は上面、底面ともに長方形を呈し、規模は上面で長軸2.19ｍ、短軸1.05ｍ、深さ0.11ｍ、底面は長軸2.11ｍ、短軸0.96ｍを測り、断面形は逆梯形、主軸方向はＮ－41°－Ｗをとる。埋土は①のしまりのある黄灰褐色粘質土がみられた。掘り方の平面形が明瞭な長方形を呈することから、木棺が使用されたと推定される。

遺　物　　第１埋葬施設の中央より、鉄製の鉄剣（Ｆ44）が検出された。出土状況は主軸方向に平行に置かれ、刀身の柄が北東側、先端が南西側に向く状態で出土している。鉄剣の先端部は折れており若干移動していることから、山城の曲輪１を造成するときに使用された道具が当たったか、或いは後世の削平時のものによるもの、いずれかと推測される。頭位は鉄剣の柄部分の北東方向と考えられる。第１埋葬施設から検出された副葬品はこの鉄剣のみで、他には検出されなかった。

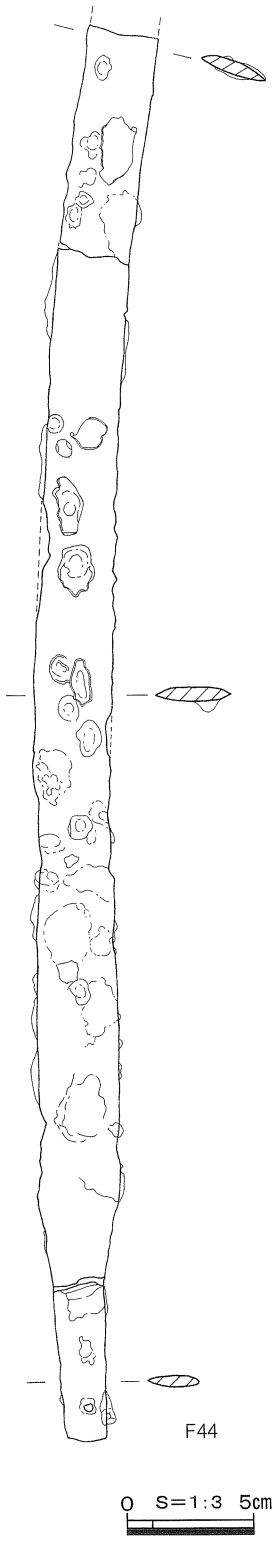
時　期　　出土遺物は鉄製品の鉄剣（Ｆ44）のみであり、時期を決定する資料に欠けるが、古墳時代中期頃と推定される。




挿図 67　　日次１号墳遺構図



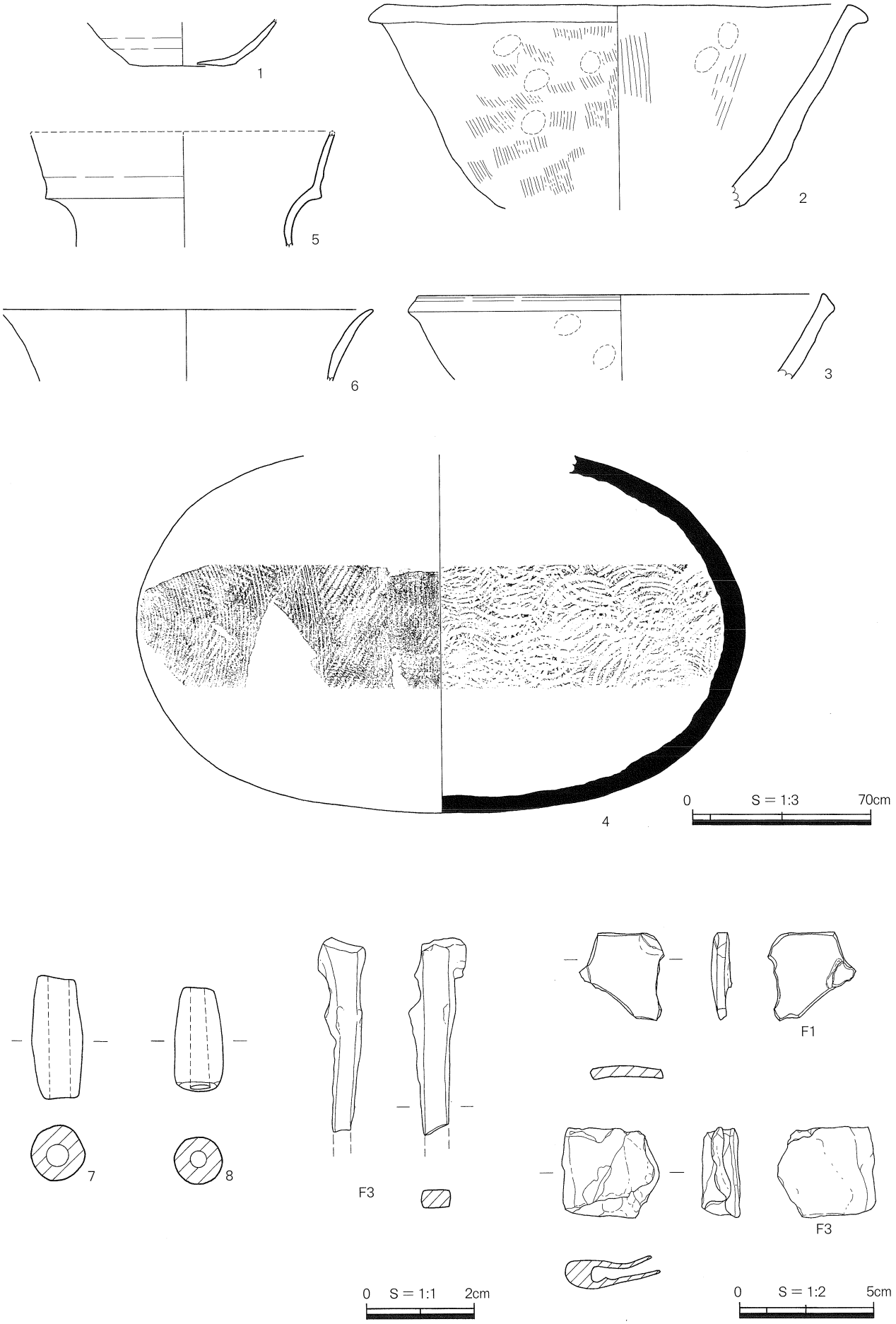

挿図 68　日次１号墳第１埋葬施設遺構図・遺物出土状況図




挿図 69　日次１号墳
第１埋葬施設
出土遺物実測図

## 第１０節　その他の遺構外遺物（挿図 70・図版 19）

シアケ遺跡では遺構に伴わない遺物が出土している。個々の遺物の詳細は観察表に譲り、ここでは概略について述べる。（１）は土師器の底部で接地面は平坦であるが、内外面が磨滅しているために底部の糸切痕の有無については確認できない。時期は中世と考えられる。（２）、（３）の土師器は底部を欠くがいずれも口縁部が肥厚するタイプで器壁は厚い。（３）は磨滅しているが、わずかに指頭圧痕が認められる。（２）は内外面にハケメ、指頭圧痕が認められる。器種は捏鉢になると考えられる。（４）は頸部から上を欠く須恵器の横瓶の胴部で楕円形の丸みを持ち、外面には叩き、カキ目調、内面には同心円状叩きがみられる。（５）の土器は弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の時期で、壷口縁部から頸部にかけて、（６）は同時期の口縁部上位で、器壁は薄く外反し、甕あるいは壷と考えられる。（５）は口縁下端部があまく外方に突出する。（７）、（８）は土錘で胎土も細かい。（Ｆ 1）は板状の鉄片である。（Ｆ２）は釘の頭部が扁平上に肥厚するタイプのもので、先端部の約１/３を欠損する。（Ｆ 3）は横U字形を呈する鉄製品で１枚の鉄板を折り曲げて造られている。




挿図 70　　遺構外出土遺物実測図

# 第４章　まとめ

## 第１節　遺構

シアケ遺跡では弥生時代に始まり中世に至るまでの様々な遺構が確認されているが、ここでは主に中世の山城跡について概観し、若干の考察を試みたい。山城跡シアケ遺跡は直下に伯太川上流域を望む交通上の要衝である。これを押さえ、見張るという点については絶好の立地条件を備えている。陸上交通の未発達な中世においては伯太川下流域にあたる意宇地方と上流域、さらに後方の隣国伯耆地方とを結ぶネットワークの場所として軍事上あるいは政治、経済面での本地域の役割は非常に重要であった。このような時代背景が想像できるなか、城域は伯太川右岸に突き出す形をとる尾根突端部にあたり、ややＶ字峡をなす伯太川上流域を往来する人々を間近に監視する上で最適の場所を占めている。伯太川に面した西～北側は絶壁となっており、自然の要害を呈している。全体の構造は尾根上最高所（標高約 80 m）に主郭を配し、北側から東側にかけて一段下った帯曲輪を付設したまとまりをもつ城郭空間を構成しており、南側を２条の堀切で遮断し、帯曲輪下には横堀状遺構を巡らせ、さらに下側を急斜面が取り巻くという視覚的にも防御の堅固さを強調している。主郭は長さ 40 m、幅７～ 20 mのひょうたん形を呈し、面積 520㎡程の複郭構造をもつ小規模城郭と言える。遺構配置からみると防御面では曲輪内の柵列、堀切、横堀状遺構などがあり、それぞれ曲輪の要所に配されている。見張り、伝達面では主郭は見張り、伝達といった主要機能を兼ね備え、他には、横堀状遺構際ののろし場などが挙げられる。

個々の遺構をみると、主郭ではやぐらなどの見張りに利用されたと判断できる遺構は検出されなかったが、台状部東側に展開する段状遺構を伴う掘立柱建物跡群は切り合い関係からＳＢ－ 03・04 からＳＢ－ 05・06・07、さらにＳＢ－ 01・02 へと南側から北西側へと台状部の下側をやや取り巻く形で検出された。掘立柱建物跡はいずれも小規模でやや簡素である点は否めない。時期については出土遺物が乏しいため明確には判断しがたいが、本山城跡に伴う曲輪内部施設と推測される。

帯曲輪では少なくとも２回の小規模な改修が認められる。最終面では、底面に盛土を施し、造成面を外方へ拡張している。ここに、ＳＢ－ 08 ～ 13 の少なくとも６棟の掘立柱建物跡が認められる。これらのうちＳＢ－ 10 ～ 13 の４棟は東側のやや張り出し部に重複して造られており、この地点が防御上本山城跡東側の重要拠点であった事が推測できる。重複するＳＢ－ 14・15 は他がいずれも小規模でやや簡素であるのに対して、特にＳＢ－ 14 は１間×１間で深い柱穴（深さ最高 1.00 m）をもち上部構造は一定の高さがある見張り機能を具備していた可能性が考えられる。また、同所に所在するＬ字状のＳＫ－ 16 は底面に２本の深い柱穴をもつ、形態が特異なものであるが、遺物がなく用途は不明であるものの、立地条件等を考慮すると、伝達上、或いは防御上必要な何らかの施設であった可能性も考えられる。虎口については、本調査区内では確認されていないが、帯曲輪南側に隣接する大規模な崩れが立地条件等から推測される。以上、本山城跡で確認された遺構を概観してきたが、出土遺物も少なく、城跡の面積も小規模であることから、恒常的生活の場ではなく、臨時的で少人数の滞在を示す場（詰めの城）であったと考えられる。いずれにしても、自然地形を巧みに利用しながら、機能に応じた施設の配置を行っていた様子が窺える。時期については鎌倉時代（13 世紀代）のものと考えられる。なお、その他の時代のものとしては、弥生時代の段状遺構、古墳時代中期の前方後円墳などがみられた。

## 第２節　遺物

シアケ遺跡においては各遺構から、遺物は出土しているが、全体の個体数は少ない。土器類の出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器（中世）、陶器が、土製品については土錘、石製品は石鏃、石匙、水晶、

礫が出土している。鉄製品については鎌、釘、直刀、板状鉄製品、棒状鉄製品、鉈などである。銅製品はキセル雁首が出土している。これらの遺物の特徴のあるものについて時期について考察してみる。
弥生土器（14）は弥生時代後期中葉の器台の口縁部で口縁端部を欠く、外面には凹線が施される。(14)は弥生土器の底部で平底である。

須恵器（17）は小壷で底部にタタキ目が施されており、焼成は硬い。

陶器は（2）は第10トレンチ内（第7段状遺構造成面）からの出土で亀山焼の甕と考えられるもので、肩部から口縁部にかけての破片で、器壁は厚く、体部外面には格子状のタタキ目が施され、内面にはヘラケズリ後にハケメ調整がはいり、頸部はくの字状に屈曲し端部は厚く平坦に造られている。（5）は第8段状遺構からの出土で備前焼の大甕と考えられ、口縁部の破片で、器壁は厚く、口縁部は外側に折り曲げて、丸く仕上げられている。色調は淡灰褐色胎土には白色の砂粒がみられる。（8）は常滑焼の大甕と考えられ、第10段状遺構からの出土で肩部下から口縁部にかけてと底部が出土している。器壁はやや厚く肩部から頸部に向かって、大きく湾曲しながら外反し、口縁部には縁帯が造られている。肩部は大きく張り、内面には指頭圧痕がみられ、色調は茶灰褐色から茶褐色で内外に自然釉がかかっている。底部は平坦である。これら3点の陶器の時期は13世紀代の鎌倉時代と考えられる。

土師器はややまとまった量の出土がみられた。(10)、(11)は捏鉢で口縁部端部の突出部が少ないことから、時期は13世紀代の鎌倉時代と考えられる。第10段状遺構出土の捏鉢（18）は口縁部端部の突出が外方に大きく出ることから（10)、(11）の捏鉢よりも新しく14世紀頃にはいるものと考えられる。土師器の坏は（4）が第4掘立柱建物跡から出土している。底部は磨滅しており、糸切り痕は確認されないが、形態から時期は鎌倉時代のものと考えられる。その他の遺構から坏の底部（3)、底部を欠く坏（6)、坏の底部（7)、坏（9）が出土している。

土製品は第10段状遺構から多く出土している。土錘は小型のものは丸く2 cm前後の製品が多い。やや大型のものは6角を呈し、長さは3 cm前後の製品が多くみられる。いずれの土錘も形態は中央が膨らみをもち、断面形は丸く、縦軸に沿って丸い穴が通じている。

石製品は第8土坑と第10段状遺構（帯状曲輪の一部分）から結晶部分の残る水晶破片（S 1)、(S 2）が、さらに第10段状遺構（帯状曲輪一部分）からは角閃石安山岩、安山岩の亜円礫、角礫（S 3～S 9）などが集石した状態で出土しているが、投弾と考えられるものである。その他に第1横堀状遺構出土の黒耀石製の無茎石鏃（S 11）には細かい剥離加工がみられる。形態から弥生時代のものと考えられる。第16段状遺構からは安山岩の石匙状石器（S 10）が出土している。

鉄製品は遺構内から多く出土しており総数43個を数える。鉄製品の種類の内訳は鉄剣1、釘26、鉈3、錐2、棒状鉄製品1、鎌1、鉄輪1、小札1（鎧の一部)、板状鉄製品1、製品の不明鉄6である。日次1号墳出土の鉄剣は長さ54.3cm以上、幅3.0cmで先端部を欠く。釘は第10段状遺構（帯状曲輪の一部分）から多く出土している。頭部あるいは先端部を欠損する釘もみられるが、頭部の残っている釘（F 12)、(F 14)、(F 17)、(F 21)、(F 19)、(F 23)、(F 26)、(F 28）を観察すると釘の形状は扁平で、断面は4角形の角柱状を呈している。釘（F 5)、(F 9）は釘が3本以上絡まって錆びついたものと推測される。鉈（F 11）は柄の部分と推定される。錐（F 10)、(F 36）は両先端部が尖っている。棒状鉄製品の（F 6）は断面がやや扁平な製品である。鎌（F 33）は長さが20cm以上と、やや大型で先端部を少し欠く。鉄輪（F 24）はリング状の鉄製品で何かの留め金と考えられるものである。小札（F 25）は薄い鉄版状の製品で鎧の一部で紐を通す穴が6ヶ所みられる。

銅製品はキセル雁首（F 22）が出土している。筒部は円錐形で、先端には皿状になっている時期は近世と考えられる。

以上、遺物は若干の弥生土器に始まり、古墳時代極少。そして鎌倉時代（13世紀代）のものが多く、大半を占め、14世紀代のものは少ない。

# 遺　物　観　察　表

法量（cm）　復は復元値　残は残存値

| 遺物番号<br>挿図番号<br>図版番号 | 出土遺構 | 種　類 | 器　種 | 法　量 | | | 色　調 | 特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 1<br>4<br>15 | 第1トレンチ | 弥生土器 | 底部 | | 復5.0 | 残3.2 | 内：断面淡黒褐色<br>外：黄茶色～桃黄茶色 | (内)ヘラケズリ<br>(外)ナデ・ミガキ<br>(胎土)緻密 |
| 2<br>10<br>15 | 第10トレンチ | 陶器<br>亀山焼 | 甕<br>口縁部 | 復30.0 | | 残6.8 | 内・外：灰色 | (内)ヘラケズリ後ハケメ<br>(外)格子状タタキ目<br>(胎土)緻密 |
| 3<br>34<br>15 | ＳＢ－08 | 土師器 | 皿 | | 復5.4 | 残1.2 | 内：黄橙灰褐色<br>外：淡黄橙色 | (内・外)ナデ<br>(胎土)密。1mm径程度の白色砂粒を含む |
| 4<br>35<br>15 | ＳＢ－09 | 土師器 | 坏 | 復12.4 | 復6.0 | 残3.5 | 内・外：淡橙黄色 | (内・外)風化の為調整不明<br>(胎土)密。微細砂粒を含む |
| 5<br>22<br>15 | ＳＳ－08 | 陶器<br>備前 | 甕<br>口縁部 | 復37.0 | | 残4.5 | 内・外：淡灰茶色 | (内・外)ヨコナデ<br>(胎土)密。微細砂粒を多く含む |
| 6<br>22<br>15 | ＳＳ－09 | 土師器 | 坏 | 復11.0 | | 残3.2 | 内・外：橙黄色 | (内・外)ナデ<br>(胎土)密。1mm径以下の白色砂粒を少量含む |
| 7<br>22<br>15 | ＳＳ－09 | 土師器 | 底部 | | 復5.0 | 残0.8 | 内・外：橙黄色 | (内・外)ナデ<br>(胎土)密。1mm径以下の白色砂粒を少量含む |
| 8<br>14<br>15 | ＳＳ－10 | 陶器<br>常滑 | 甕<br>口縁部<br>底部 | 復44.0 | 復23.0 | 残22.7 | 内：茶灰褐色<br>外：茶褐色<br>内外面自然釉がかかる。 | (内)ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕<br>(外)ナデ<br>(胎土)密。1～3mmの長石、石英、雲母を含む |
| 9<br>14<br>15 | ＳＳ－10 | 土師器 | 坏 | 復13.0 | 復6.0 | 残3.7 | 内：黄橙灰色<br>外：黄橙色 | (内・外)ナデ<br>(胎土)密。1～2mm径の白色砂粒を少量含む |
| 10<br>14<br>15 | ＳＳ－10 | 土師器 | 捏鉢 | 復25.0 | | 残6.5 | 内・外：黄橙灰褐色 | (内)ナデ・タテハケメ<br>(外)ナデ・指頭圧痕<br>(胎土)密。1～2mm径の白色砂粒を少量含む |
| 11<br>14<br>15 | ＳＳ－10 | 土師器 | 捏鉢 | 復26.0 | | 残2.8 | 内・外：淡乳黄褐色 | (内・外)ナデ<br>(胎土)1mm径以下の白色砂粒を含む |
| 12<br>54<br>15 | ＳＫ－14 | 土師器 | 皿 | | 復6.0 | 残1.0 | 内・外：濃橙黄色 | (内・外)ナデ<br>(胎土)密。1～2mm径以下の白色砂粒を少量含む |
| 13<br>14<br>15 | ＳＳ－07 | 弥生土器 | 口縁部 | | | 残2.4 | 内・外：濃橙黄色 | (内・外)風化の為調整不明<br>(胎土)雲母を多く含み、長石・石英を少量含む |
| 14<br>14<br>15 | ＳＳ－07 | 弥生土器 | 底部 | | 3.6 | 残1.7 | 内：淡褐色<br>外：黄茶色 | (内)指ナデ<br>(外)ナデ<br>(胎土)密。砂粒を含む |
| 15<br>22<br>16 | ＳＳ－12 | 弥生土器 | 底部 | | 復5.0 | 残3.6 | 内・外：淡桃黄茶色 | (内・外)風化の為調整不明<br>(胎土)密。微細砂粒を含む |
| 16<br>63<br>16 | 第1掘切 | 磁器 | 染付碗 | 復10.0 | | 残3.3 | 灰白色 | 内外面花・網目文様 |
| 17<br>66<br>16 | ＳＳ－18 | 須恵器 | 小壺 | 復11.0 | 復8.4 | 残5.8 | 内・外：淡灰色 | (内)ヨコナデ<br>(外)ヨコナデ・底部タタキ目<br>(胎土)密。 |

**シアケ遺跡土器・陶磁器・土製品観察表(1)**

| 遺物番号<br>挿図番号<br>図版番号 | 出土遺構 | 種　類 | 器　種 | 法　量 | | | 色　調 | 特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 18<br>66<br>16 | ＳＳ－18 | 土師器 | 捏鉢 | 復28.0 | 復9.6 | 残12.8 | 内・外：淡黄褐色 | (内)ヨコナデ・ハケメ・指頭圧痕<br>(外)ヨコナデ・底部指頭圧痕<br>(胎土)1mm径以下の長石、石英を多く含む |
| 19<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.3 | 2.4 | 褐灰色 | 4ｇ |
| 20<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.1 | 2.1 | 明赤褐色 | 3ｇ |
| 21<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.9 | 3.3 | にぶい黄橙色 | 13ｇ　6角形 |
| 22<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.3 | 2.2 | 淡橙色 | 4ｇ |
| 23<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.8 | 3.0 | 淡黄色 | 10ｇ　6角形 |
| 24<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.3 | 2.1 | 淡橙褐色 | 5ｇ |
| 25<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.2 | 2.0 | 淡橙黄褐色 | 3ｇ |
| 26<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.2 | 2.1 | 淡橙黄褐色 | 3.5ｇ |
| 27<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.9 | 3.1 | 淡黄色 | 13ｇ　6角形 |
| 28<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.3 | 2.3 | 淡黄灰黒色 | 4ｇ |
| 29<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.3 | 2.0 | 淡橙色 | 3ｇ |
| 30<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.3 | 2.4 | 淡橙黄灰色 | 4ｇ |
| 31<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径2.0 | 2.9 | 淡黄色 | 12ｇ　6角形 |
| 32<br>28<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.6 | 2.2 | 淡橙黄色 | 5ｇ |
| 33<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径2.0 | 3.0 | にぶい黄橙色 | 12ｇ　6角形 |
| 34<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.4 | 2.3 | にぶい黄橙色 | 4ｇ |
| 35<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.4 | 2.3 | 暗灰色 | 5ｇ |

**シアケ遺跡土器・陶磁器・土製品観察表（2）**

| 遺物番号<br>挿図番号<br>図版番号 | 出土遺構 | 種　類 | 器　種 | 法　量 | | | 色　調 | 特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 36<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.9 | 3.1 | 淡黄褐色 | 12ｇ　6角形 |
| 37<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.2 | 2.8 | にぶい赤褐色 | 4ｇ |
| 38<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.2 | 2.5 | 淡黄橙色 | 4ｇ |
| 39<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.3 | 2.3 | 淡橙黄色 | 4ｇ |
| 40<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | 径1.4 | 2.3 | 淡橙褐色 | 4ｇ |
| 41<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | | 残2.1 | 淡橙色 | 2ｇ |
| 42<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | | 3.3 | 淡黄色 | 15ｇ　6角形 |
| 43<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | | 3.1 | 淡黄色 | 12ｇ　6角形 |
| 44<br>27<br>16 | ＳＳ－16 | 土製品 | 土錘 | | | 2.6 | にぶい黄橙色 | 5ｇ |
| 45<br>15<br>16 | ＳＳ－10 | 土製品 | 土錘 | | | 3.1 | 淡黄色 | 13ｇ　6角形 |
| 1<br>70<br>19 | 遺構外 | 土師器 | 底部 | | 復6.0 | 残2.4 | 内・外：淡橙黄茶色<br>断面：淡黒灰色 | (内・外)ナデ<br>(胎土)緻密。微細砂粒わずかに含む |
| 2<br>70<br>19 | 遺構外 | 土師器 | 捏鉢 | 復26.0 | | 残11.4 | 内・外：淡黄茶色 | (内・外)ナデ・タテハケメ・指頭圧痕<br>(胎土)1～3mm径の白色砂粒を均質的に含む |
| 3<br>70<br>19 | 遺構外 | 土師器 | 捏鉢 | 復23.0 | | 残4.8 | 内・外：淡黄茶色<br>断面：灰褐色 | (内)ナデ<br>(外)ナデ・指頭圧痕<br>(胎土)密。1～3mm径の白色砂粒を少量含む |
| 4<br>70<br>19 | 遺構外 | 須恵器 | 横瓶<br>体部 | | | 残19.8 | 内・外：灰色 | (内)同心円文<br>(外)タタキ痕、カキ目痕<br>(胎土)密。微細砂粒含む |
| 5<br>70<br>19 | 遺構外 | 弥生土器 | 壺<br>口縁部 | | | 残6.4 | 内・外：淡茶褐色 | (内・外)風化の為調整不明<br>(胎土)1～2mm径の長石、石英を少量含む |
| 6<br>70<br>19 | 遺構外 | 弥生土器 | 口縁部 | 復21.0 | | 残4.0 | 内・外：淡茶褐色 | (内・外)風化の為調整不明(胎土)1～2mm径の白色砂粒を多く含む |
| 7<br>70<br>19 | 遺構外 | 土製品 | 土錘 | | 径1.0 | 2.3 | にぶい黄橙色 | 3ｇ |
| 8<br>70<br>19 | 遺構外 | 土製品 | 土錘 | | 径0.9 | 2.0 | 赤褐色 | 2ｇ |

**シアケ遺跡土器・陶磁器・土製品観察表（3）**

法 量 (cm)

| 遺物番号<br>挿図番号<br>図版番号 | 出土遺構 | 石　材 | 分　類 | 法　量 | | | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| S1<br>48<br>16 | ＳＫ－08 | 水晶 | 水晶破片 | 1.2 | 0.9 | 0.7 | 無色透明 | 2ｇ |
| S2<br>16<br>16 | ＳＳ－10 | 水晶 | 水晶破片 | 1.5 | 1.2 | 0.8 | 無色透明 | 2ｇ |
| S3<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 角閃石安山岩 | 自然礫 | 14.8 | 11.3 | 8.6 | 灰色 | |
| S4<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 角閃石安山岩 | 自然礫 | 17.2 | 11.2 | 9.0 | 灰色 | |
| S5<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 花崗岩 | 自然礫 | 17.6 | 11.1 | 6.2 | 黄灰色 | |
| S6<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 角閃石安山岩 | 自然礫 | 14.8 | 12.2 | 7.7 | 灰色 | |
| S7<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 安山岩 | 自然礫 | 11.5 | 7.5 | 5.9 | 乳灰色 | |
| S8<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 安山岩 | 自然礫 | 9.4 | 9.2 | 5.1 | 淡灰色 | |
| S9<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 安山岩 | 自然礫 | 12.8 | 5.6 | 4.6 | 淡灰色 | |
| S10<br>28<br>17 | ＳＳ－16 | 安山岩 | 石匙状石器 | 7.9 | 4.9 | 0.8 | 灰色 | 34ｇ　剥離痕 |
| S11<br>66<br>17 | ＳＳ－18 | 黒曜石 | 石鏃 | 1.5 | 1.4 | 0.2 | 黒色 | 1ｇ　細かい剥離痕 |

**シアケ遺跡石製品観察表(1)**

法 量 (cm)　　残は残存値

| 遺物番号<br>挿図番号<br>図版番号 | 出土遺構 | 種　類 | 法　量 | | | 断　面 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| F1<br>12<br>17 | ＳＳ－04 | 釘 | 残3.8 | 0.8 | 0.5 | 方形 | 両端を欠く |
| F2<br>12<br>17 | ＳＳ－04 | 釘 | 残2.6 | 0.4 | 0.3 | 方形 | 両端を欠く |
| F3<br>12<br>17 | ＳＳ－04 | 板状鉄製品 | 2.2 | 4.2 | 0.8 | 長方形 | |
| F4<br>12<br>17 | ＳＳ－06 | 不明鉄 | 残5.2 | 1.1 | 0.7 | 方形 | 頭部を欠く |
| F5<br>23<br>17 | ＳＳ－09 | 釘 | 残10.7 | 2.8 | 3.5 | 1個体は方形 | 釘（固まり）Ｆ１～Ｆ９個体 |
| F6<br>23<br>17 | ＳＳ－09 | 棒状鉄製品 | 残9.1 | 1.5 | 0.5 | 長方形 | 頭部は折り返す |
| F7<br>22<br>17 | ＳＳ－09 | 釘 | 残4.8 | 0.6 | 0.3 | 長方形 | 先端部を欠く |
| F8<br>22<br>17 | ＳＳ－09 | 不明鉄 | 残2.3 | 1.1 | 0.8 | 五角形 | 角柱状の鉄片 |
| F9<br>23<br>17 | ＳＳ－09 | 釘 | 残10.5 | 1.6 | 1.2 | 1個体は方形 | 釘（固まり）Ｆ１～Ｆ７個体 |
| F10<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 錐 | 10.8 | 0.5 | 0.5 | 方形 | 先端は尖る |
| F11<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 鉈 | 残11.3 | 0.5 | 0.5 | 方形 | 先端部を欠く |
| F12<br>17<br>17 | ＳＳ－10 | 釘 | 残6.1 | 0.4 | 0.4 | 方形 | 先端部と頭部は扁平 |
| F13<br>17<br>17 | ＳＳ－10 | 釘 | 残5.0 | 0.7 | 0.6 | 方形 | 先端部と頭部を欠く |
| F14<br>17<br>17 | ＳＳ－10 | 釘 | 残3.1 | 1.2 | 0.4 | 長方形 | 先端部を欠き、頭部は扁平 |
| F15<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 釘 | 残7.8 | 1.2 | 0.9 | 方形 | 先端部と頭部を欠く |
| F16<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 鉈 | 残7.8 | 0.9 | 0.6 | 長方形 | 柄の部分を欠き、刃部は反る |
| F17<br>17<br>17 | ＳＳ－10 | 釘 | 残3.1 | 0.7 | 0.7 | 方形 | 先端部を欠き、頭部は扁平 |

**シアケ遺跡金属製品観察表(1)**

| 遺物番号<br>挿図番号<br>図版番号 | 出土遺構 | 種　　類 | 法　　量 | | | 断　　面 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| F18<br>16<br>17 | ＳＳ－10 | 不明鉄 | 2.7 | 3.7 | 0.6 | 長方形 | 鉄板状の破片 |
| F19<br>17<br>17 | ＳＳ－10 | 釘 | 残4.9 | 0.8 | 0.65 | 方形 | 先端部を欠き、頭部は湾曲する |
| F20<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残3.5 | 0.6 | 0.5 | 方形 | 先端部を欠き、頭部はやや扁平 |
| F21<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残4.1 | 0.9 | 0.6 | 長方形 | 先端部を欠き、頭部は扁平 |
| F22<br>16<br>18 | ＳＳ－10 | キセル雁首（銅） | 残6.8 | 1.7 | 0.15 | | |
| F23<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残5.0 | 0.6 | 0.4 | 長方形 | 先端部を欠き、頭部はやや扁平 |
| F24<br>16<br>18 | ＳＳ－10 | 鉄輪 | 5.0 | 5.0 | 1.1 | | 2連のリング状 |
| F25<br>16<br>18 | ＳＳ－10 | 小札 | 残7.9 | 残2.8 | 0.2 | | 径1～2㎜の円孔が4つ縦に約6㎜間隔で一列に並ぶ |
| F26<br>17<br>17 | ＳＳ－10 | 釘 | 5.7 | 0.4 | 0.7 | 長方形 | 頭部は扁平 |
| F27<br>18<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 7.0 | 1.1 | 0.7 | 長方形 | 先端部を欠く |
| F28<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残6.1 | 0.8 | 0.7 | 方形 | 先端部を欠き、頭部は扁平 |
| F29<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残3.7 | 0.55 | 0.5 | 方形 | |
| F30<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残3.1 | 0.6 | 0.55 | 方形 | 頭部を欠く |
| F31<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残5.6 | 0.6 | 0.5 | 方形 | 頭部と先端部を欠く |
| F32<br>17<br>18 | ＳＳ－10 | 釘 | 残5.5 | 0.5 | 0.5 | 方形 | 頭部を欠く |
| F33<br>18<br>18 | ＳＳ－10 | 鎌 | 20.0 | 2.0 | 0.3 | 紡錘形 | 弓状の形状を持つ |
| F34<br>18<br>18 | ＳＳ－10 | 不明鉄 | 残8.4 | 1.0 | 0.7 | 長方形 | |
| F35<br>18<br>18 | ＳＳ－10 | 不明鉄 | 残5.2 | 1.2 | 1.1 | 不整六角形 | |

**シアケ遺跡金属製品観察表(2)**

| 遺物番号<br>挿図番号<br>図版番号 | 出土遺構 | 種　　類 | 法　　量 | | | 断　　面 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| F36<br>18<br>18 | ＳＳ－10 | 錐 | 11.1 | 0.6 | 0.6 | 方形 | 柄の部分、先端共に尖る |
| F37<br>18<br>18 | ＳＳ－10 | 不明鉄 | 5.9 | 4.3 | 0.6 | 扁平 | 鉄板状の破片 |
| F38<br>59<br>18 | ＳＫ－19 | 釘 | 残4.1 | 0.5 | 0.5 | 方形 | 先端部を欠き、頭部は扁平 |
| F39<br>24<br>18 | ＳＳ－13 | 鉋 | 20.3 | 1.2 | 0.7 | 方形長方形 | |
| F40<br>24<br>18 | ＳＳ－13 | 釘 | 残4.1 | 0.8 | 0.6 | 長方形 | 先端部を欠く |
| F41<br>24<br>18 | ＳＳ－13 | 釘？ | 残3.6 | 0.8 | 0.6 | 長方形状 | 先端部を欠く |
| F42<br>27<br>18 | ＳＳ－16 | 釘？ | 残6.6 | 0.75 | 0.7 | 円形 | 先端部は丸みをもつ |
| F43<br>66<br>18 | ＳＳ－18 | 釘 | 4.8 | 0.4 | 0.5 | 方形 | 先端部は湾曲する |
| F44<br>69<br>18 | ＳＸ－01 | 鉄剣 | 残54.3 | 3.0 | 0.5 | レンズ状 | 先端部を欠損、目釘穴は一箇所確認される。 |
| F1<br>70<br>19 | 遺構外 | 不明鉄 | 3.3 | 2.8 | 0.4 | 扁平 | 鉄板状の破片 |
| F2<br>70<br>19 | 遺構外 | 釘 | 残3.5 | 0.5 | 0.3 | 長方形 | 先端は扁平状 |
| F3<br>70<br>19 | 遺構外 | 不明鉄 | 3.4 | 3.7 | 1.1 | 横Ｕ字形 | 1枚の鉄板を折り曲げる |

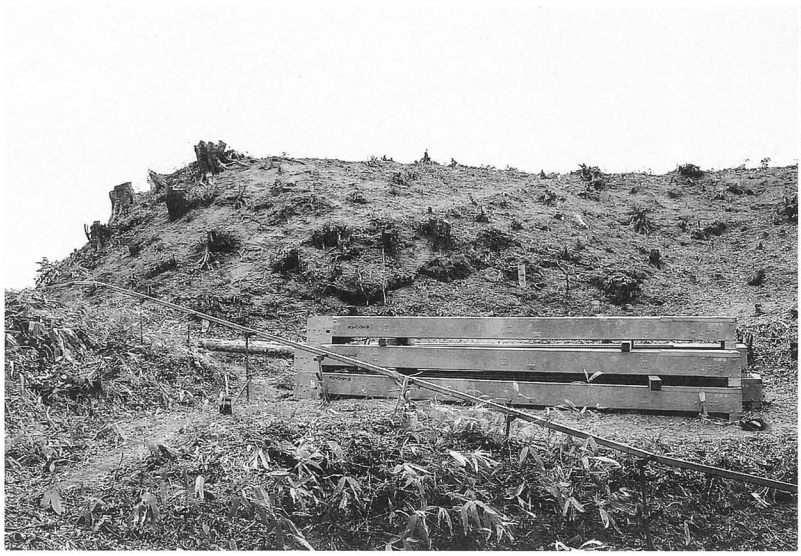
**シアケ遺跡金属製品観察表(3)**

# 写　真　図　版

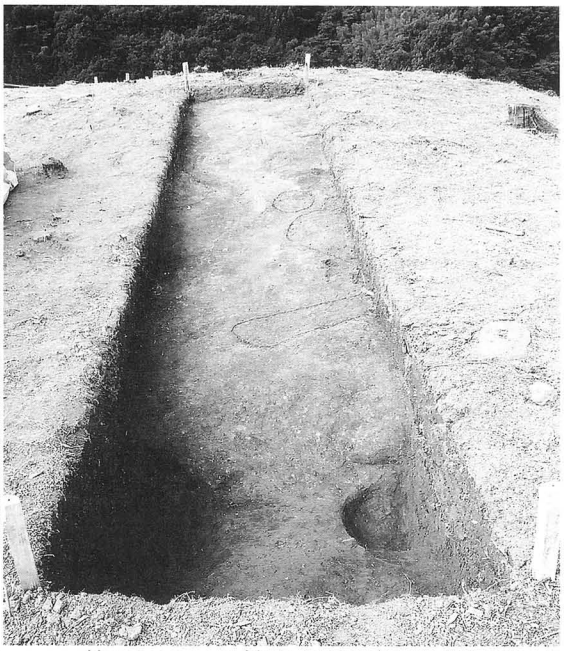
シアケ遺跡調査前全景（北西から）

# 図版2

シアケ遺跡調査地全景（鳥取西部地震直後）

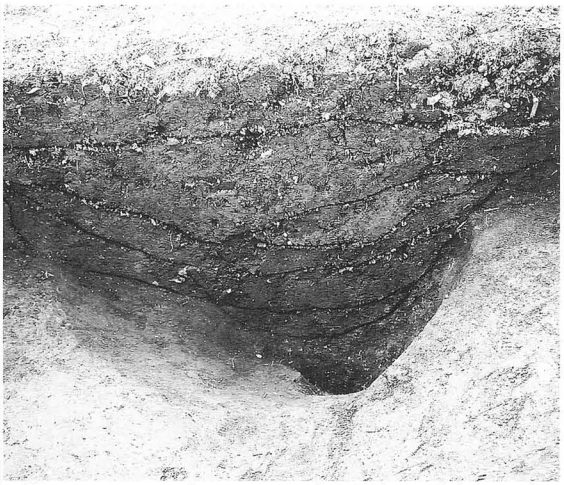


調査前曲輪1南側（南東から）



第3トレンチ検出状況（南から）

第1トレンチ完掘状況（西から）



第3トレンチ内SK－01土層断面（東から）

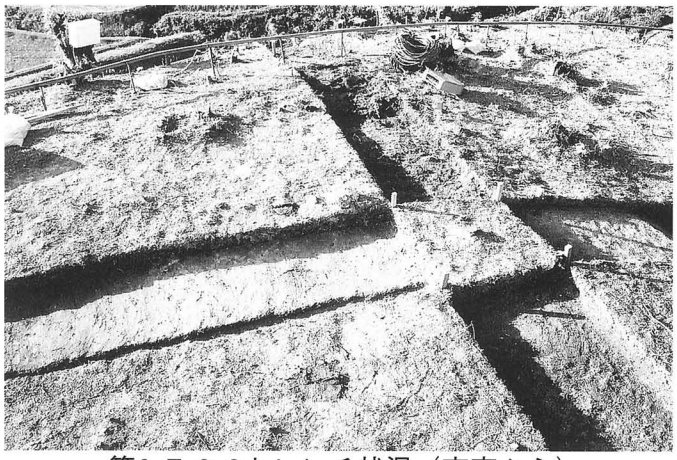
第2トレンチ完掘状況（南から）

第6トレンチ完掘状況（東から）

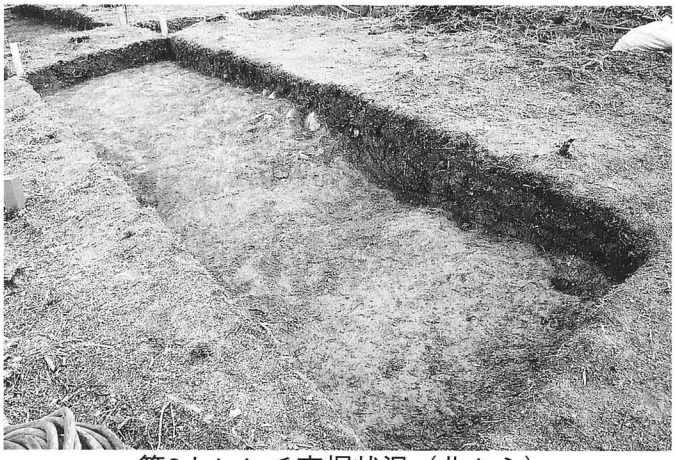
# 図版4

第6トレンチ土塁検出状況（北から）

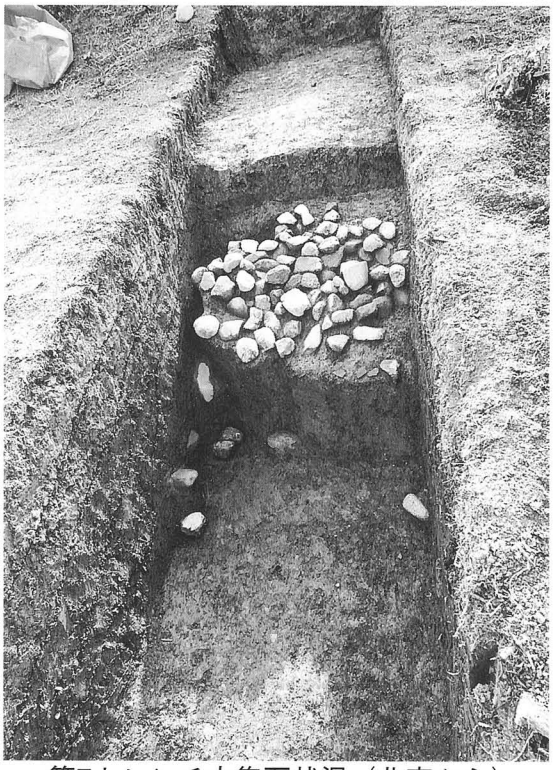
第6トレンチ土塁土層断面（北西から）



第6･7･8･9トレンチ状況（南東から）



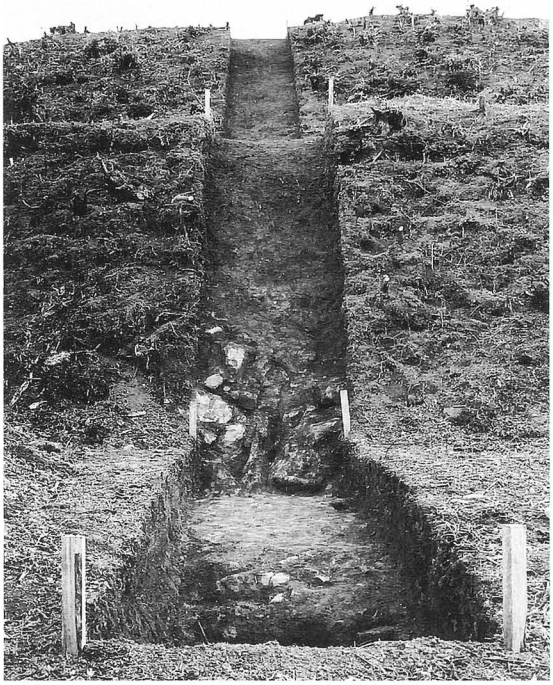
第8トレンチ完掘状況（北から）



第7トレンチ内集石状況（北東から）

第7トレンチ北東側(横堀)完掘状況（南西から）

第7トレンチ内横堀土層断面（北西から）



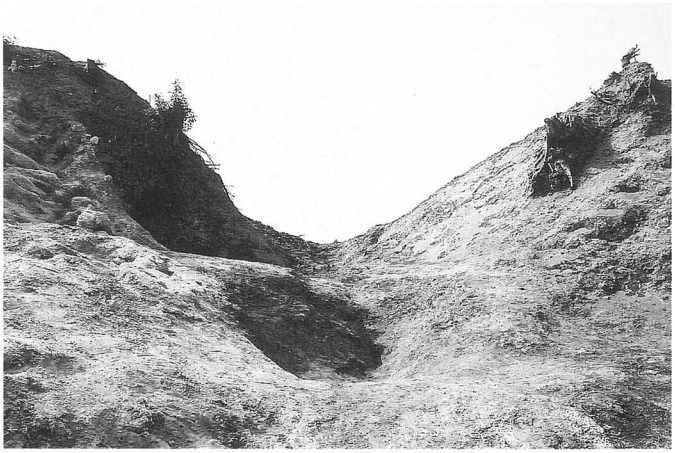
第7トレンチ北東側完掘状況（北東から）

第11トレンチ完掘状況（南西から）

第11トレンチ内第2堀切完掘状況（南東から）

第13トレンチ完掘状況（南西から）

第1堀切検出状況（東から）



第1堀切(上)・SK－23(下)検出状況（東から）

SK－23完掘状況（南から）

# 図版6

SK－23状況（東から）

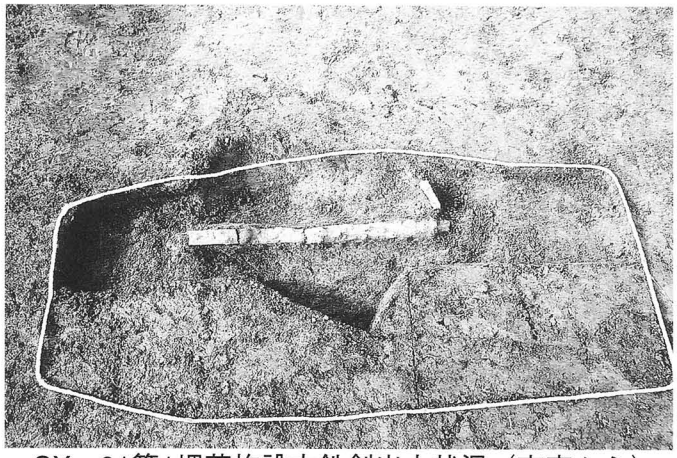
第2堀切検出状況（南東から）

調査区南側完掘状況（北東から）

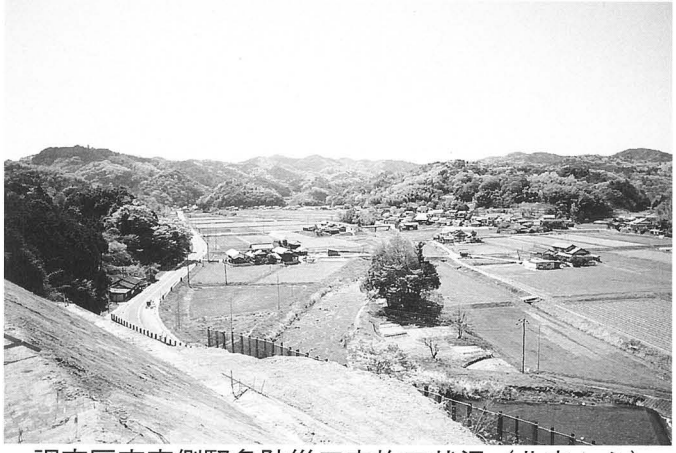
曲輪1南側検出状況（北東から）

調査区南側完掘状況（南から）

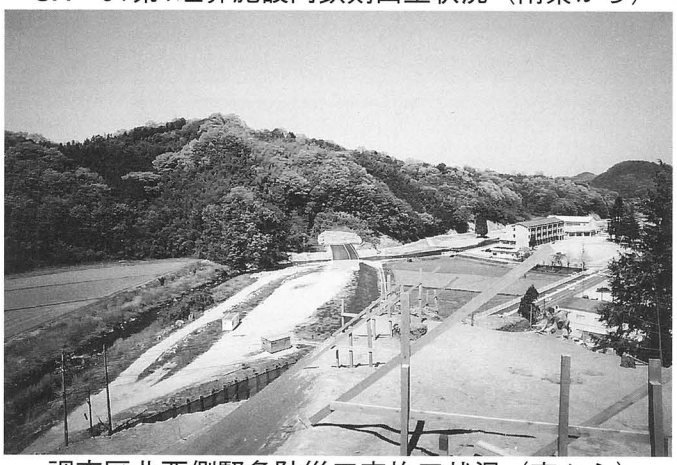
曲輪1北側SX－01完掘状況（南から）



SX－01第1埋葬施設内鉄剣出土状況（南東から）



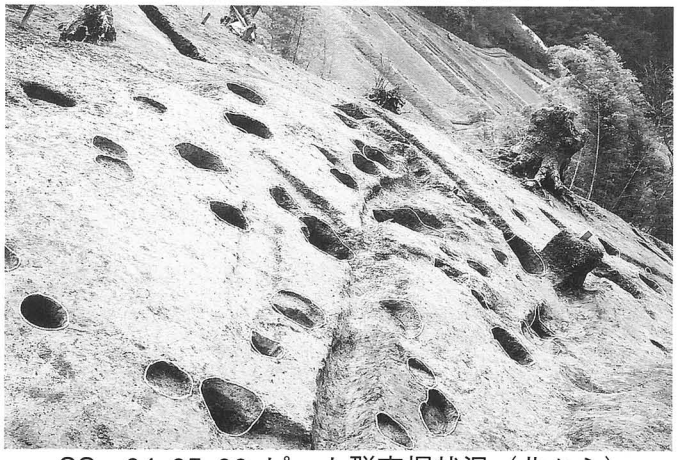
調査区南東側緊急防災工事施工状況（北東から）



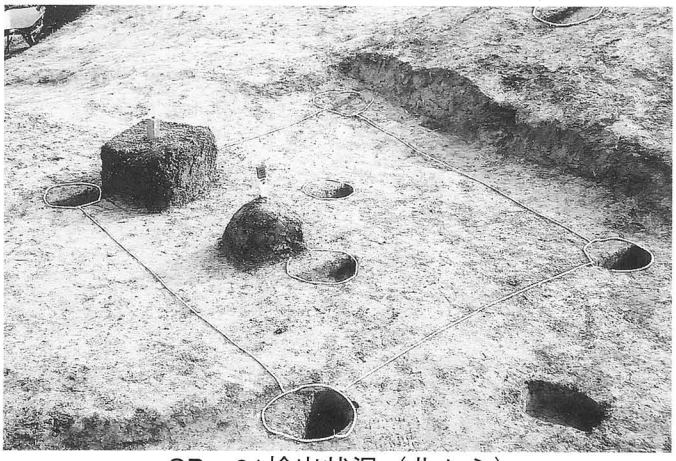
調査区北西側緊急防災工事施工状況（南から）

曲輪1北東側SS－06検出状況（北西から）

SS－06側溝土層断面（北西から）



SS－04・05・06・ピット群完掘状況（北から）

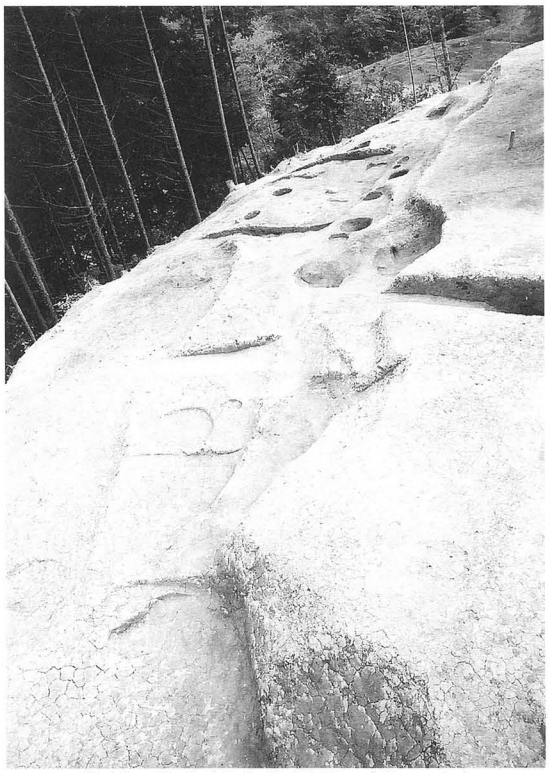


SB－01検出状況（北から）

# 図版8

曲輪2北側SS－09土層断面（南東から）

SS－09(上)・SS－11(下)・SS－12(右)検出状況(南東から)

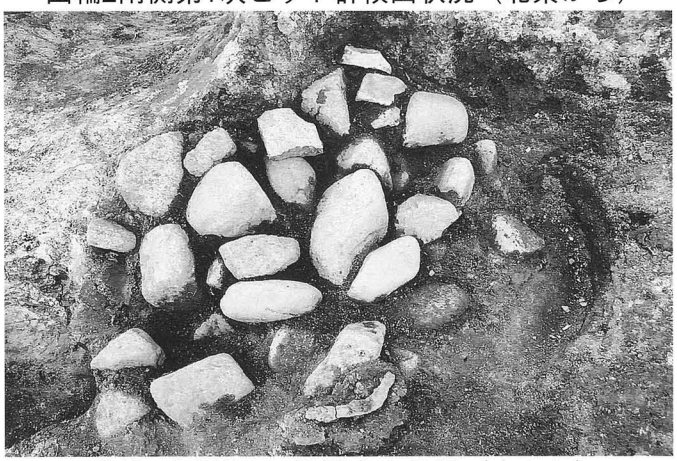


曲輪2北東側完掘状況（北から）

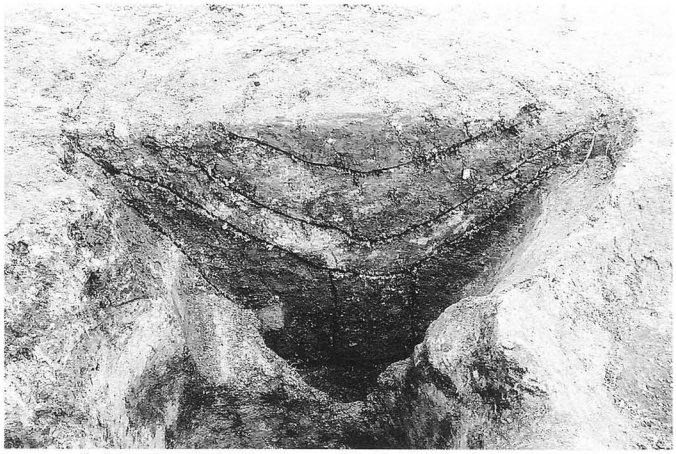
曲輪2東側完掘状況（北から）

曲輪2南側第1次ピット群検出状況（北東から）

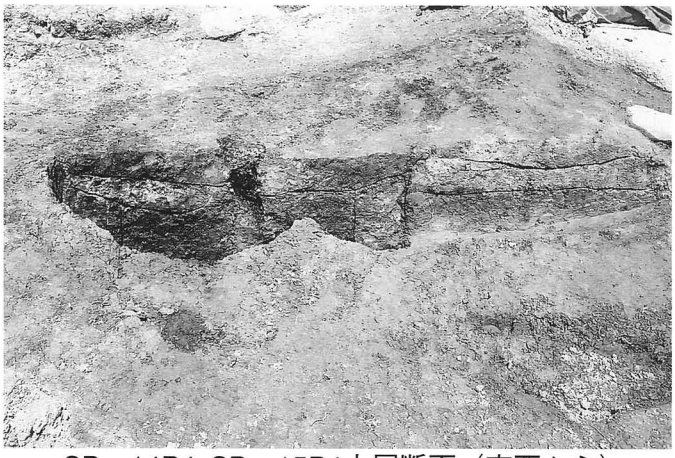
曲輪2南側第1次ピット群検出状況（北西から）



曲輪2南側集石・鉄鎌出土状況（東から）

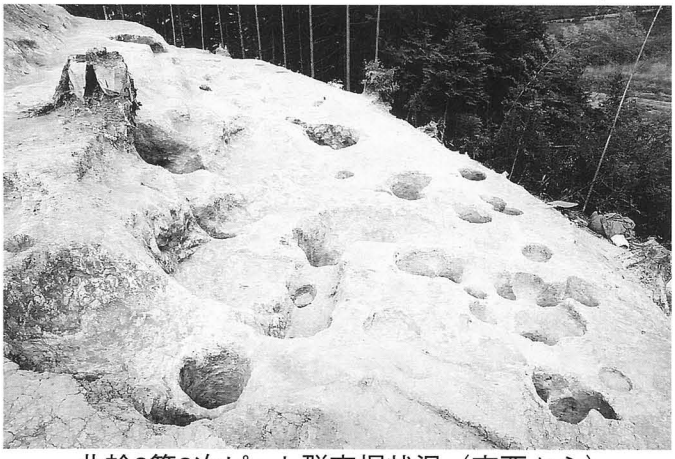


曲輪2南側特殊ピット半截状況（南西から）



SB－14P4・SB－15P4土層断面（南西から）

曲輪2第2次ピット群完掘状況（北西から）



曲輪2第2次ピット群完掘状況（南西から）

曲輪2南東側検出状況（南から）

曲輪2南側SD－06完掘状況（南西から）

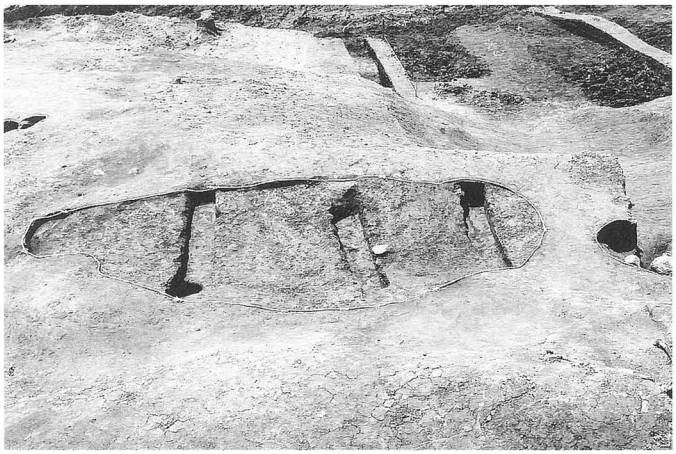
曲輪2南側SD－06土層断面（南西から）

曲輪2南側埋土中玉砂利（北から）

# 図版10

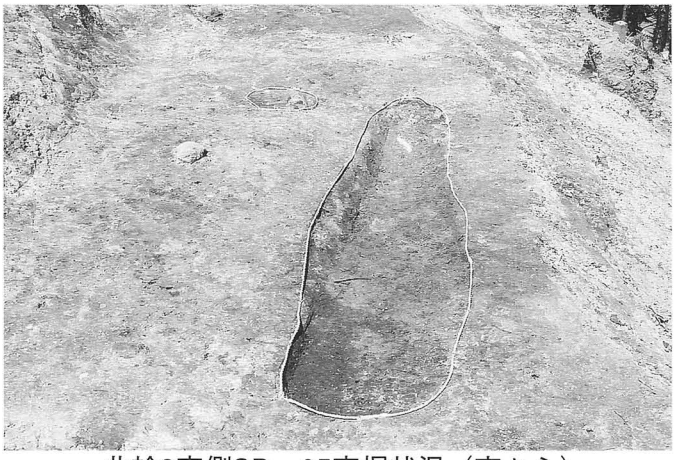
曲輪2南西側SS－17完掘状況（南西から）

調査区東側崩れ土層断面（西から）



曲輪2南側SD－04検出状況（北から）

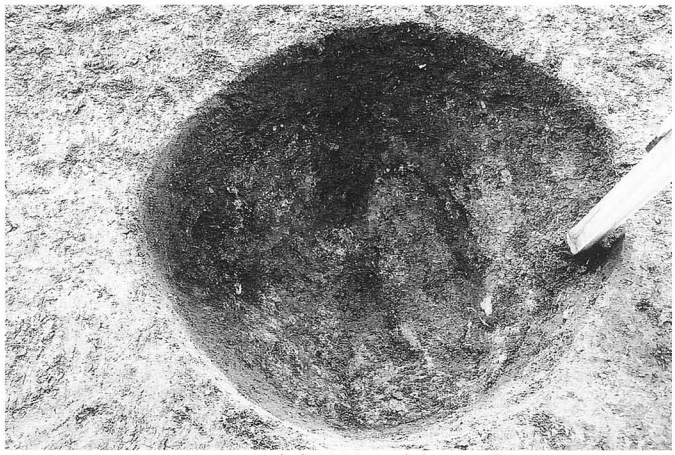
曲輪2東側SD－05検出状況（南から）



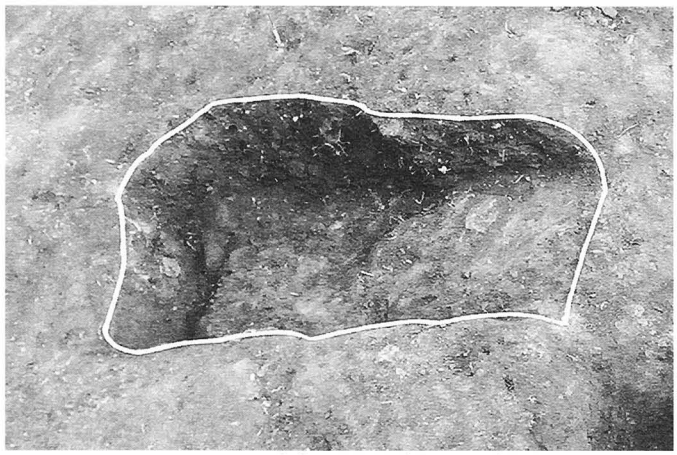
曲輪2東側SD－05完掘状況（南から）

SK－01完掘状況（西から）

SK－04完掘状況（南東から）

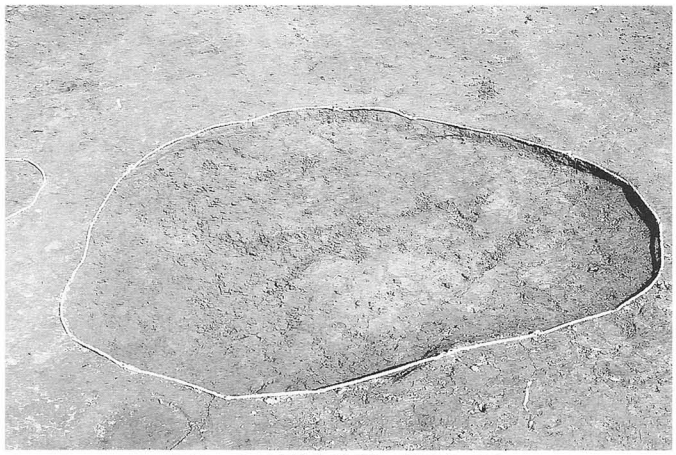


SK－05完掘状況（東から）

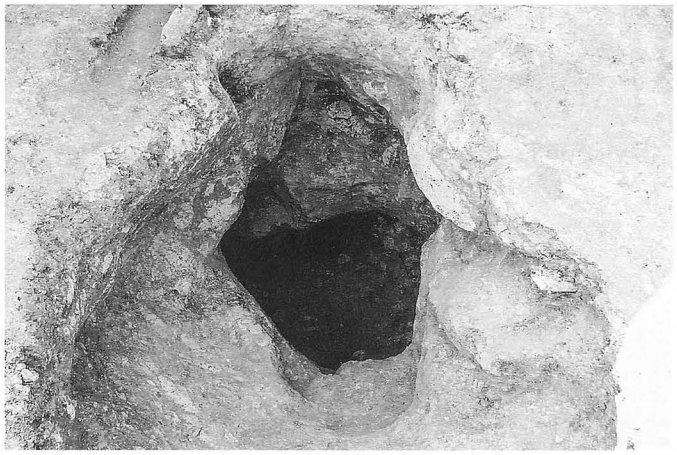


SK－06完掘状況（南から）

SK－07完掘状況（西から）

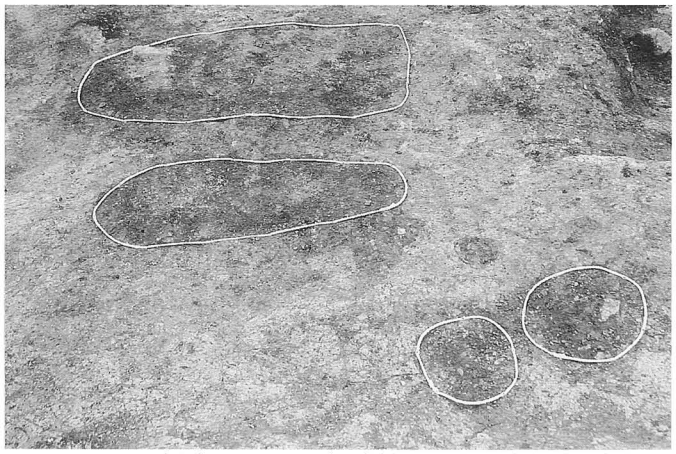


SK－08完掘状況（西から）



SK－09完掘状況（東から）

SK－10完掘状況（北西から）



SK－11(上)・SK－12(下)検出状況（東から）

SK－11(左)・SK－12(右)土層断面（南から）

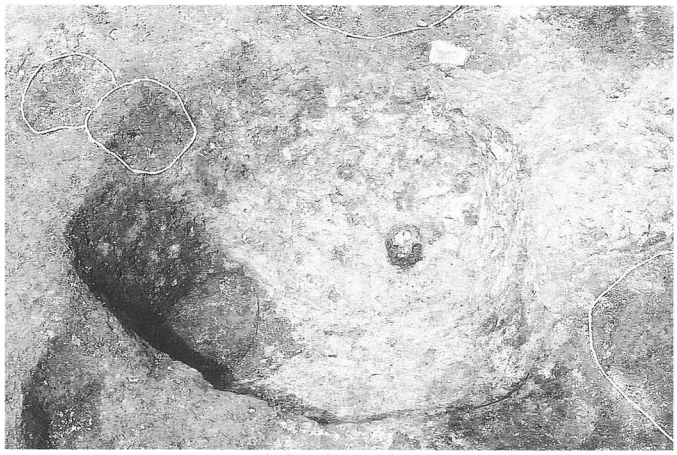
# 図版12

SK－11(右)・SK－12(左)完掘状況（北から）

SK－13(左上)・SK－14(中央)完掘状況（南東から）

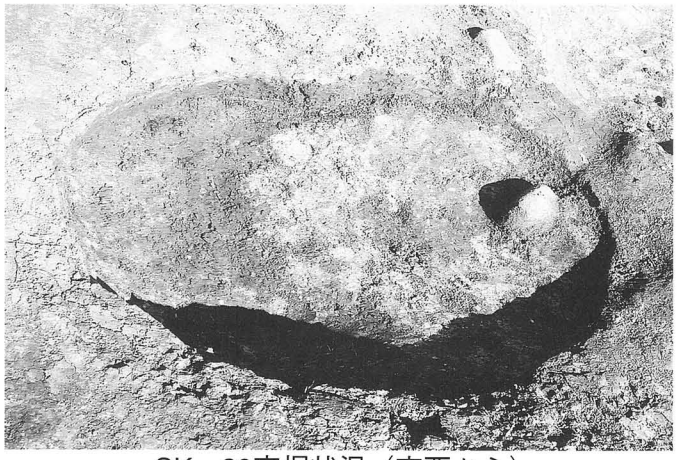
SK－14土層断面（北東から）

SK－15土層断面（南から）



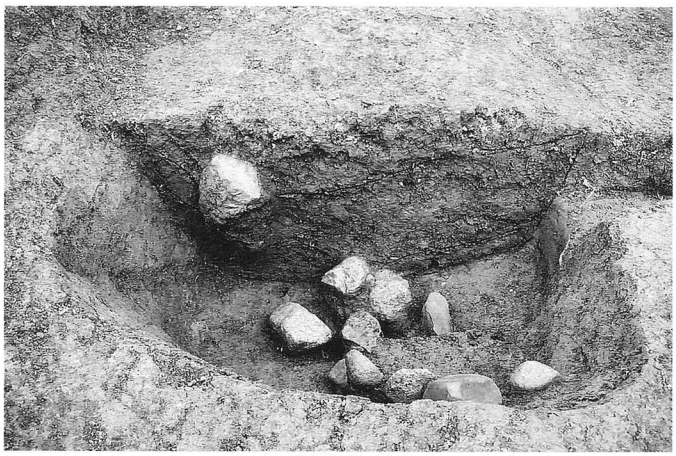
SK－18完掘状況（南東から）

SK－20検出状況（南西から）



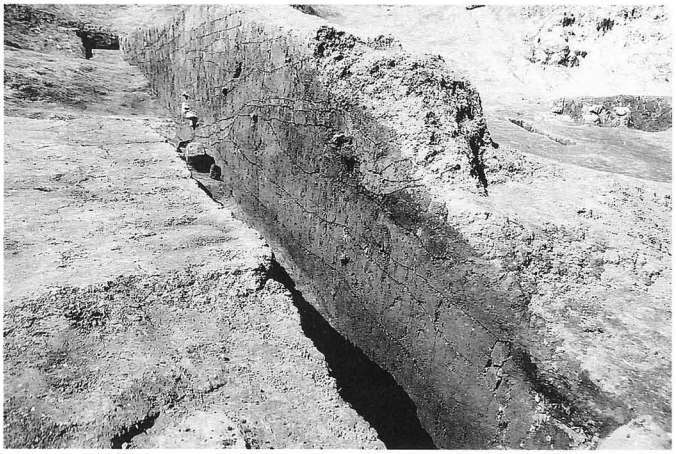
SK－20完掘状況（南西から）

SK－21完掘状況（北から）



SK－22土層断面（南西から）

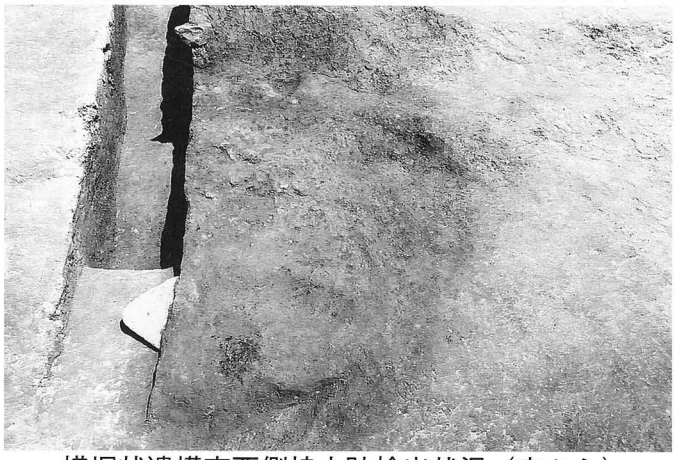
SK－22完掘状況（南西から）



横堀状遺構南西側土層断面（南から）

横堀状遺構南西側土層断面（土塁部・南西から）

横堀状遺構南西側土層断面（焼土部・南西から）

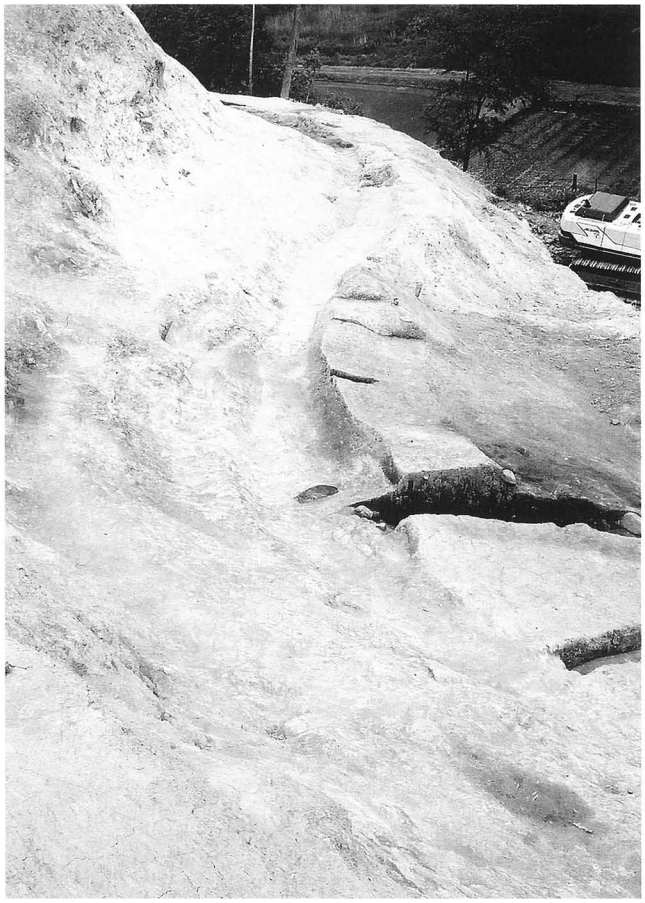


横堀状遺構南西側焼土跡検出状況（南から）

横堀状遺構南西側検出状況（北から）

横堀状遺構南側集石状況（北から）

# 図版14

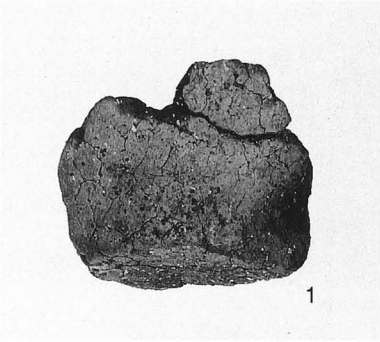


横堀状遺構完掘状況（南西から）

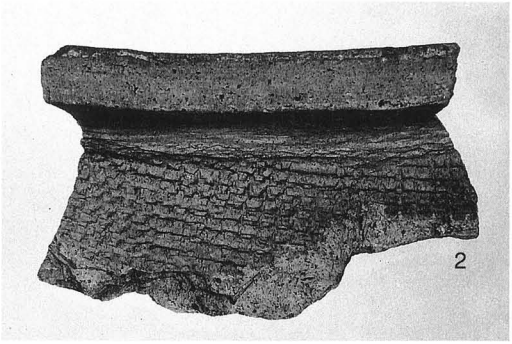
横堀状遺構東側完掘状況（北東から）

横堀状遺構南側集石状況（東から）

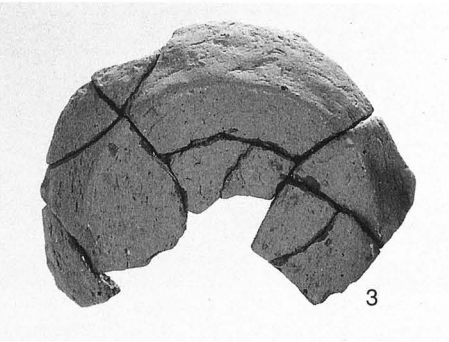
T—1



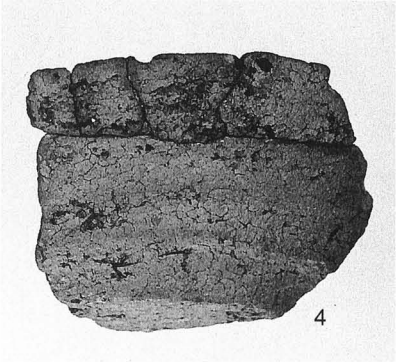

T—10



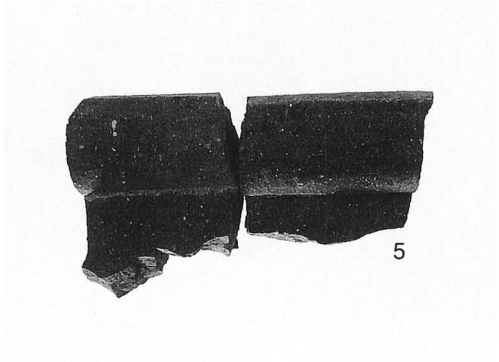

SB—08



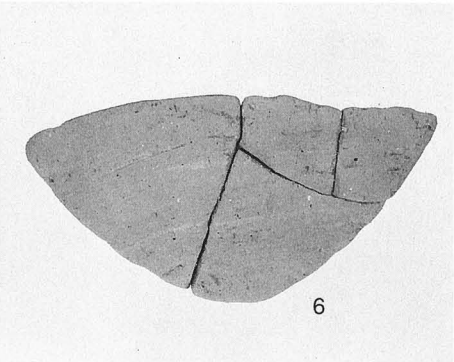

SB—09



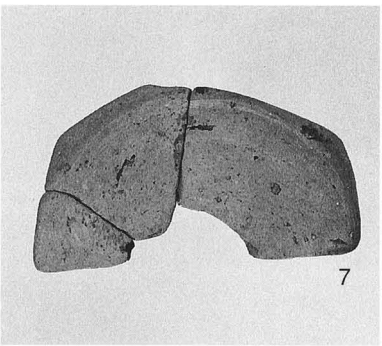

SS—08

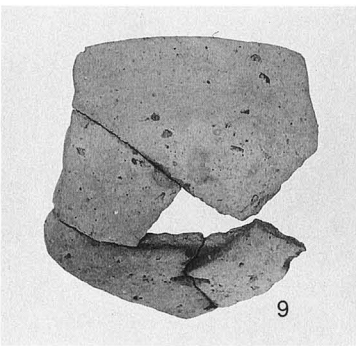



SS—09

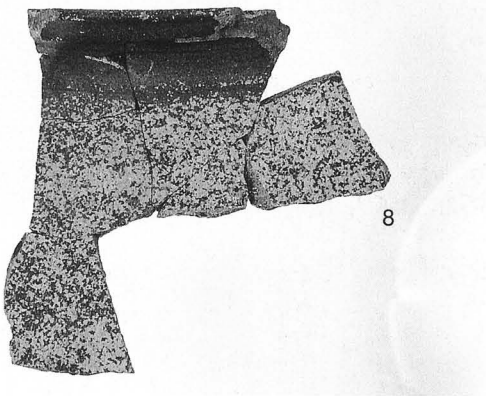



SS—09

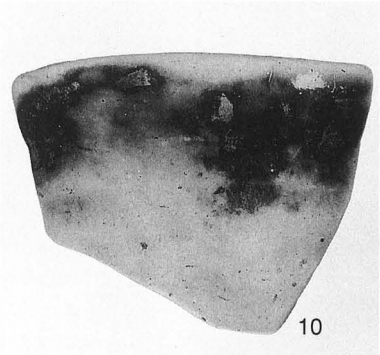


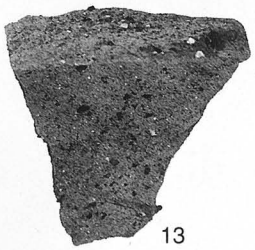

SS—10

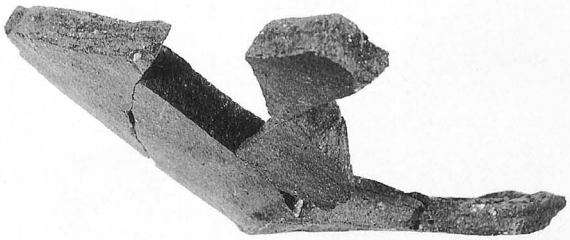



SS—10

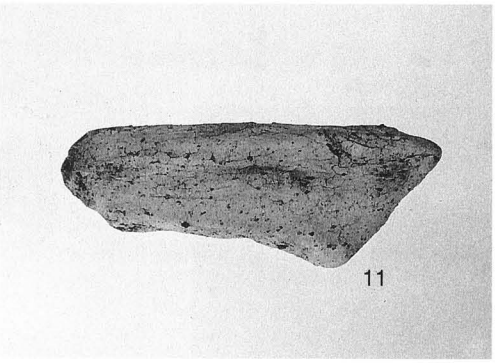



SS—07

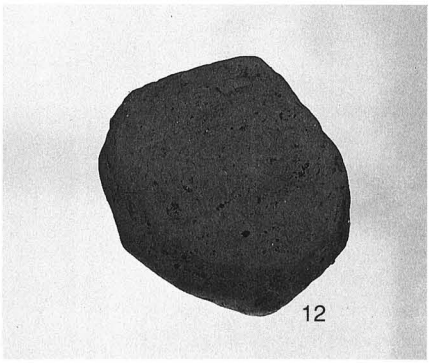


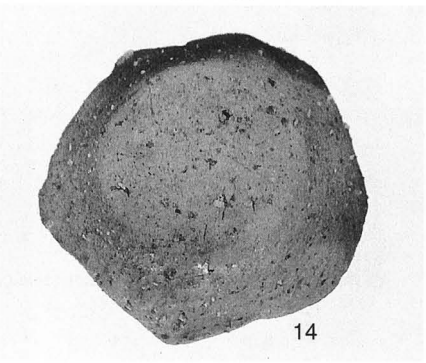

SS—10




SK—14

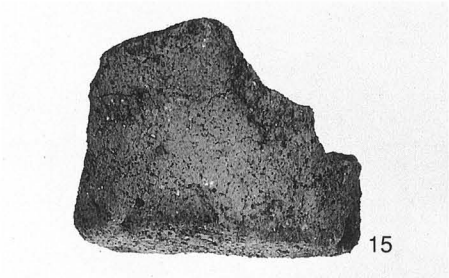



SS—07

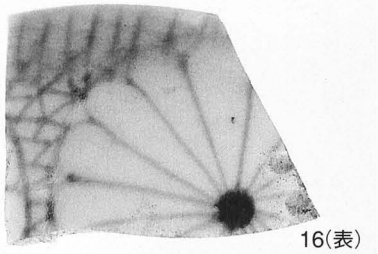


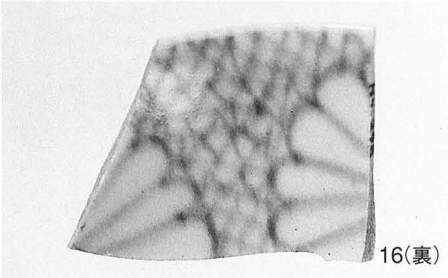
# 図版16

SS－12

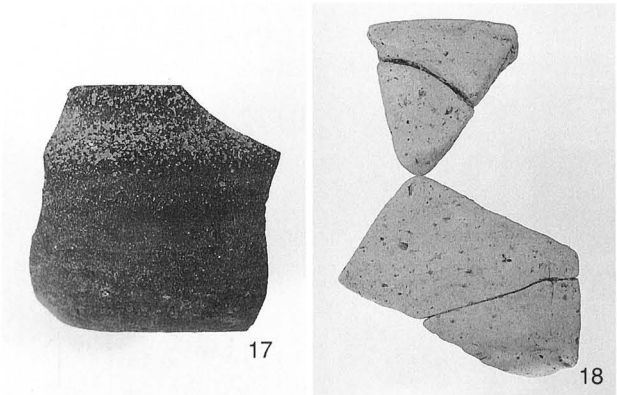



第１堀切

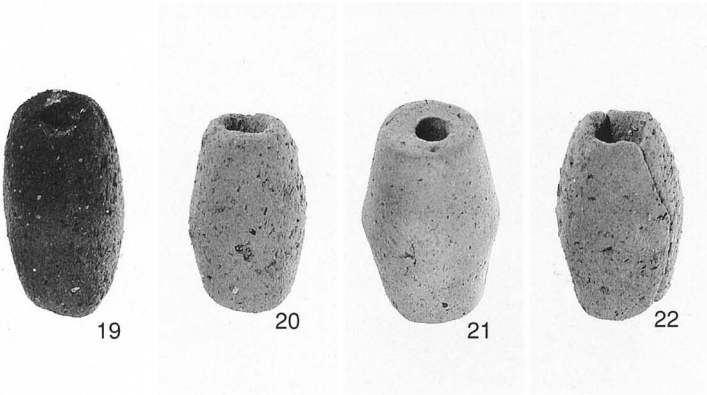


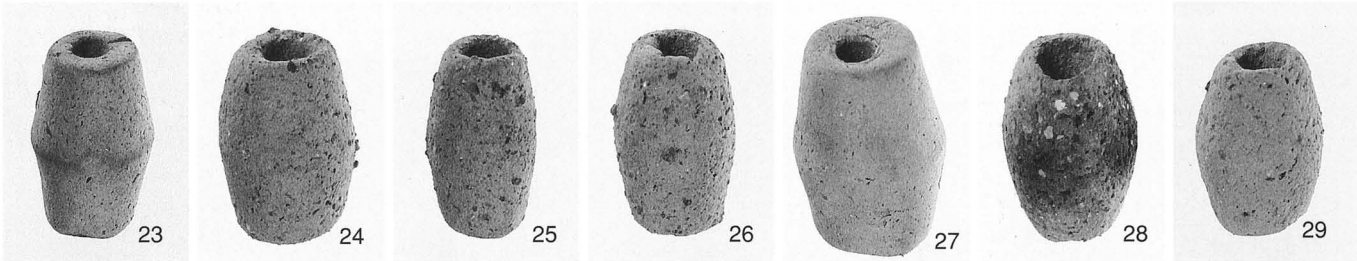



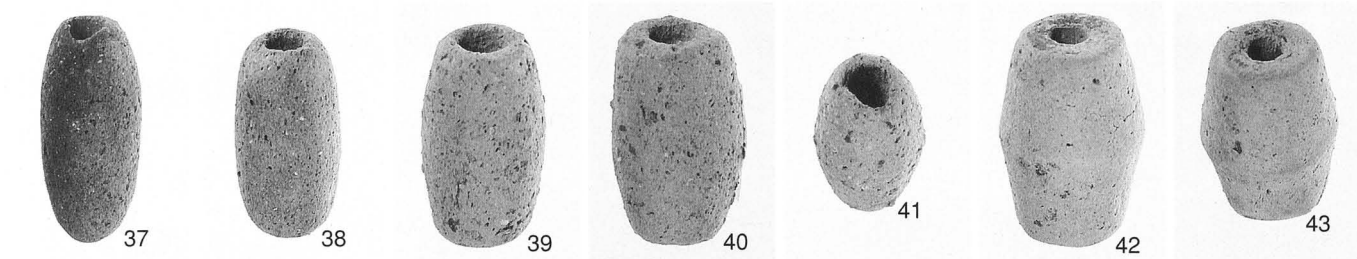

SS－18




SS－10

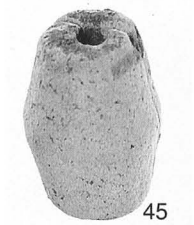


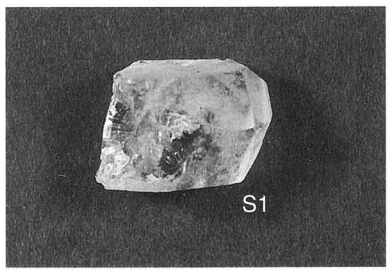



SS－16

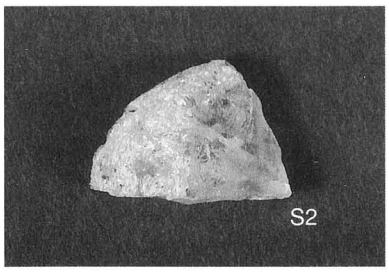
SS－10



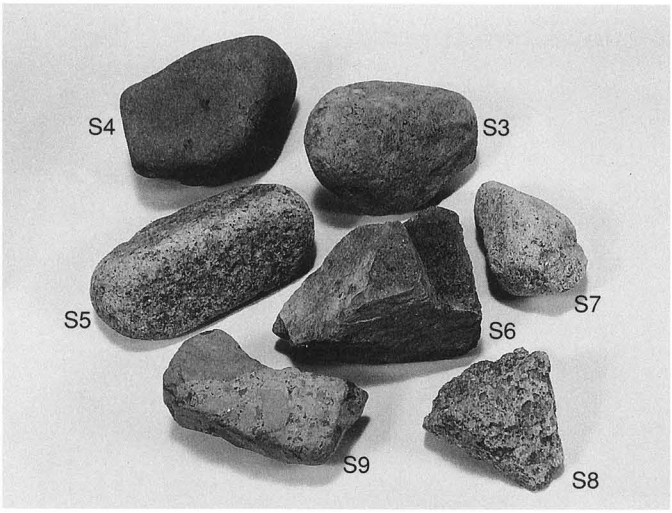

SK－08



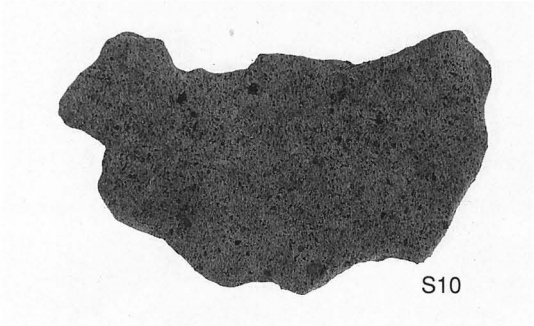

SS－10

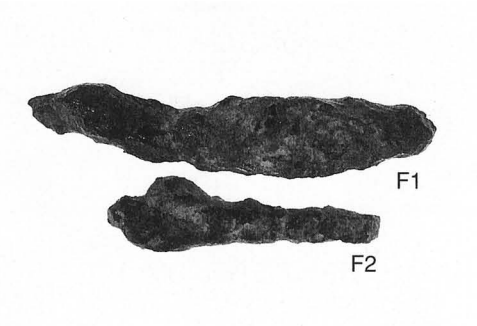


SS－10

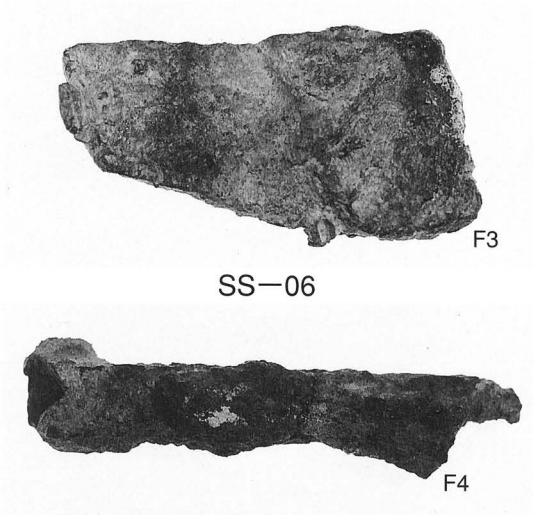


SS－16　　SS－18　　SS－04

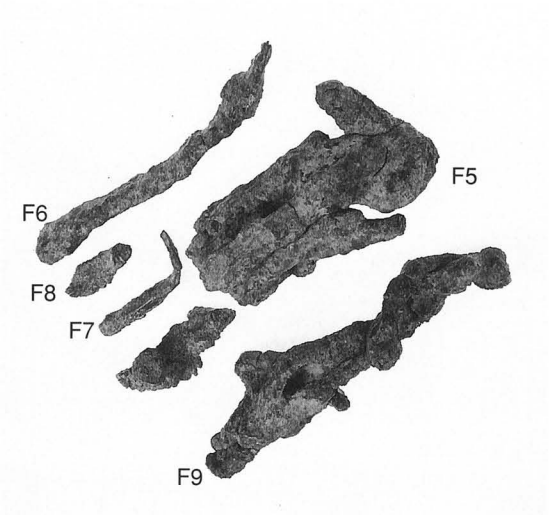




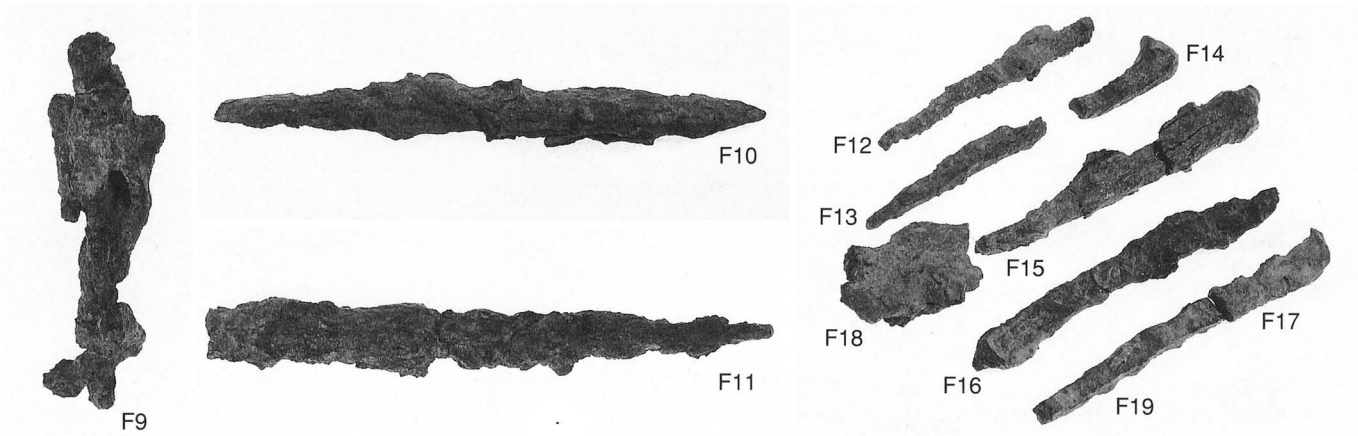

SS－04　　SS－09




SS－06

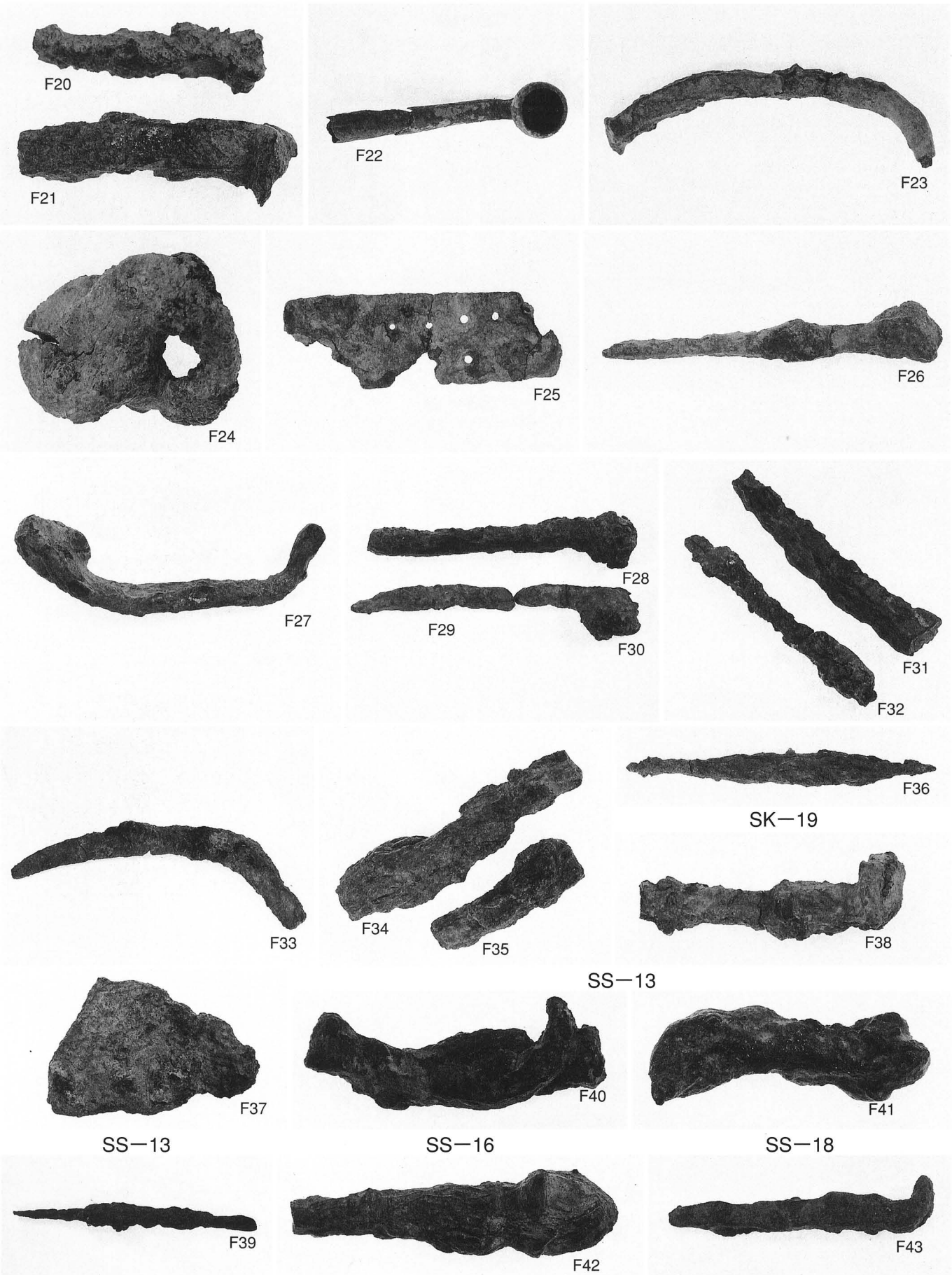


SS－09　　SS－10



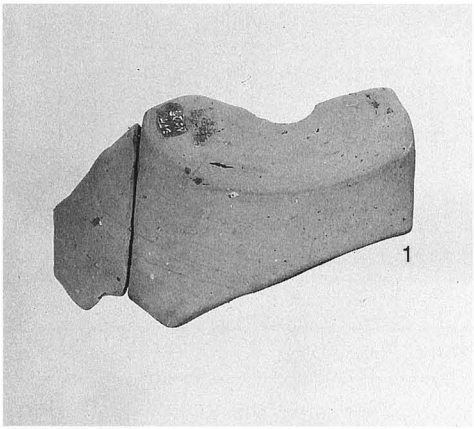
# 図版18

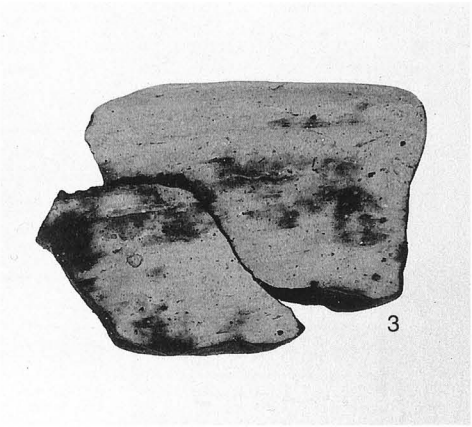
SS－10

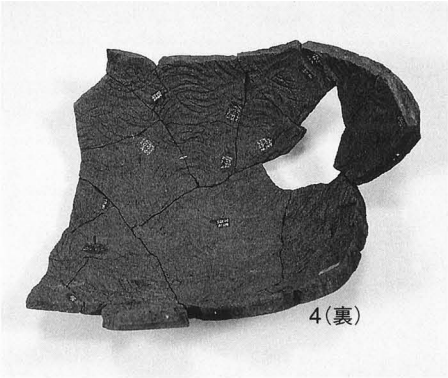


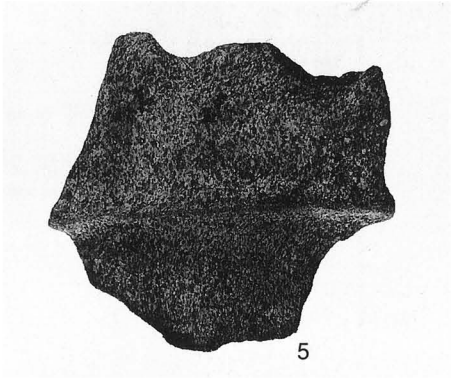

日次１号墳第１埋葬施設

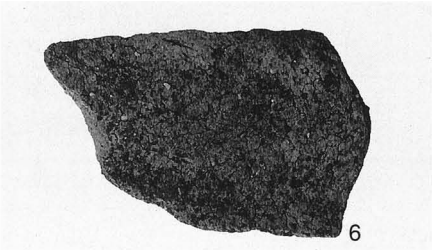
遺構外

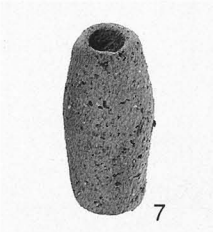


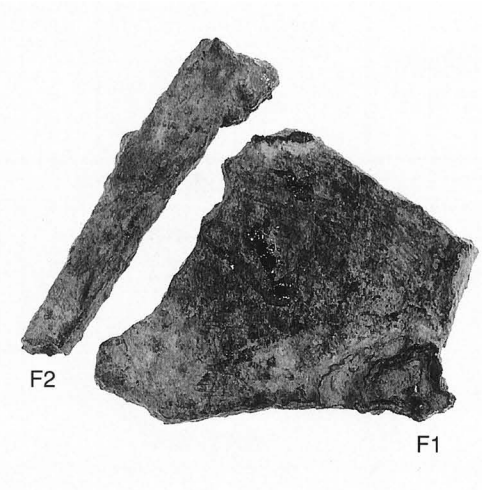


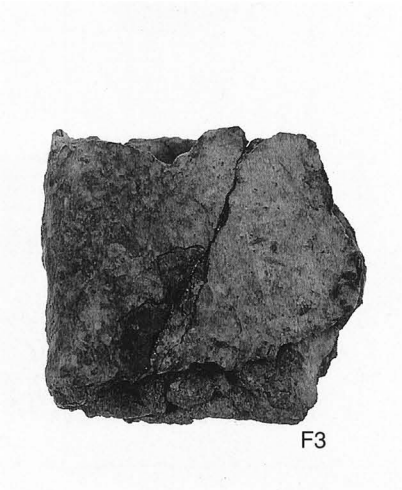


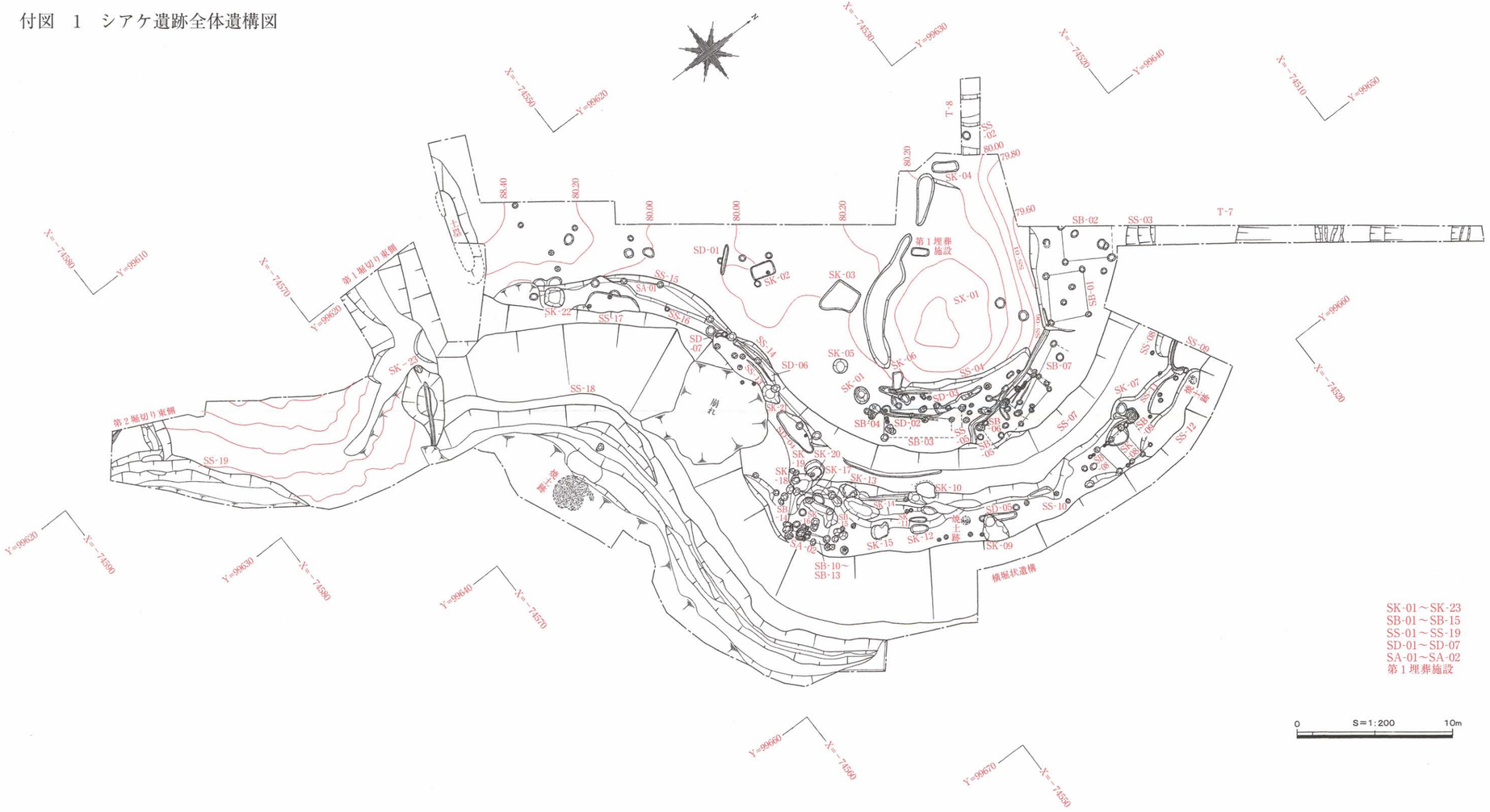


# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | しあけいせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書 名 | シアケ遺跡発掘調査報告書 |
| 副 書 名 | 主要地方道安来伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 |
| 巻 次 | |
| シリーズ名 | 伯太町埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第４集 |
| 編 集 者 名 | 松本　哲・妹尾　秀樹 |
| 編 集 機 関 | 伯太町教育委員会 |
| 所 在 地 | 〒６９２－０２０７　島根県能義郡伯太町大字母里５８０番地 |
| 発 行 年 月 日 | 西暦２００２年３月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東緯 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| しあけいせき<br>シアケ遺跡 | しまねけんのぎぐんはくたちょうおおあざひなみ<br>島根県能義郡伯太町大字日次 | 32322 | | | | 20000824<br>～<br>20011130 | 1,392㎡ | 主要地方道安来伯太日南線改良工事に伴う事前調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| シアケ遺跡 | 山城跡 | 中世 | 掘立柱建物跡<br>段状遺構<br>溝状遺構<br>土坑<br>古墳<br>堀切<br>横掘状遺構 | 弥生土器<br>土師器<br>須恵器<br>陶器 | |

付図　1　シアケ遺跡全体遺構図